

第3章 松林寺遺跡

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

松林寺遺跡は島根県大田市仁摩町大国に所在し、南を向く丘陵の斜面に位置する。遺跡のある大田市仁摩町大国地区は、日本海へ注ぐ潮川の下流に位置し、潮川が狭い谷間を抜けて開けた仁万平野へ出る位置に相当する。仁万平野は平地の少ない石見て益田平野に次ぐ面積があり、遺跡の多いところである。

松林寺遺跡の「松林寺」の由来は、錦織智禪『石見社寺案内』(1922)において仁摩町大国町宮村に「(淨土宗) 松林庵」があることに拠ると考えられる。松林寺遺跡の北側の斜面には、平坦面や墓地が広がっており、「松林庵」の跡と考えられる。

【旧石器・縄文時代】

この地域で旧石器時代の遺跡は知られていない。

仁万大橋遺跡(25)、久根ヶ曾根遺跡などでは縄文時代前期に遡る土器が出土している。仁万平野の南東側に位置する古屋敷遺跡(3)では、後期から弥生時代前期にかけての最大9面の遺構面から、地床炉340か所以上、炭溜まり約50か所、配石や集石10か所、土器溜まり10か所を確認した。晩期のクルミの集積やトチの水さらし場、晩期末の木棺墓など、縄文時代の生活に関連する遺構が見つかっていることが注目される。晩期には古屋敷遺跡に加えて五丁遺跡(7)でも土器が出土し、仁万平野の東側での活動が盛んになる。

【弥生時代】

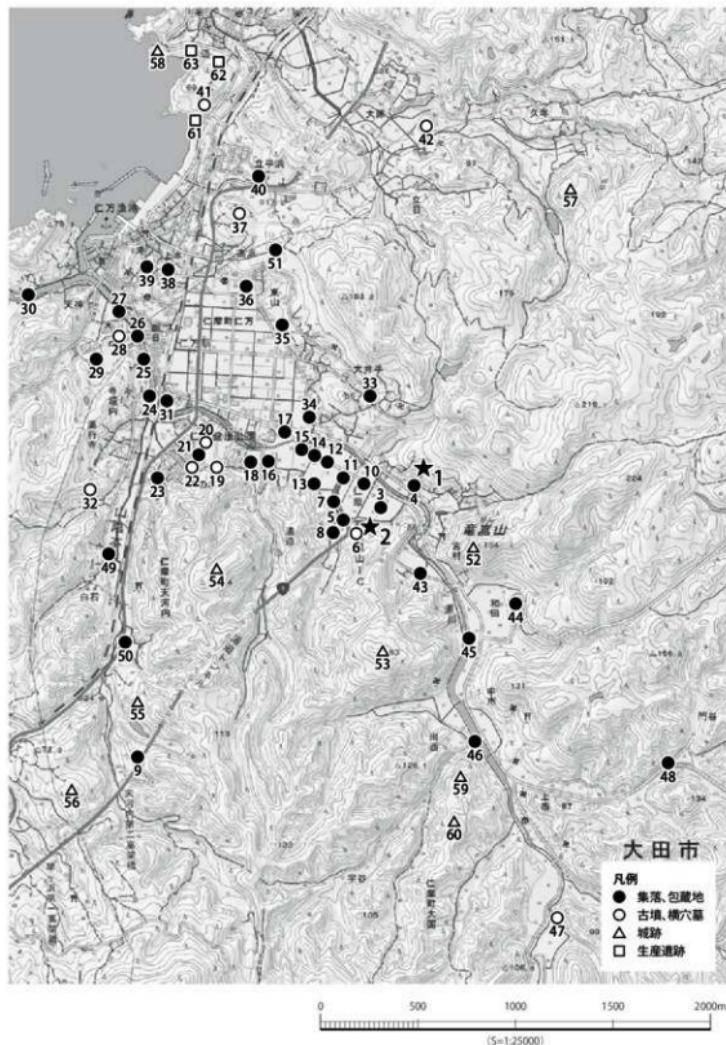
弥生時代前期の遺跡として、古屋敷遺跡や五丁遺跡、庵寺遺跡(5)がある。仁摩町教育委員会が平成7年度に調査した古屋敷遺跡B区では、土坑から弥生時代前期の土器とともに炭化米や炭化種子が出土している。潮川下流の川向遺跡(27)では弥生時代前期～中期の貯木施設、直柄平鍬や縱柄杓子などの木製品が出土している。庵寺古墳群では、標高50～80mの斜面に中期後葉から後期前半の竪穴建物や段状遺構が築かれており、高地性集落と考えられる。弥生時代中期後葉から後期前半では、丘陵上や斜面に集落遺跡が築かれるようである。丘陵裾部では、大国地頭所遺跡(4)から後期の建物跡や大量の土器が見つかっている。後期後葉から古墳時代にかけては、丘陵裾部のような比較的標高の低い場所に集落遺跡が築かれるようになる。

【古墳時代】

大国地頭所遺跡では、弥生時代に引き続いて古墳時代前期～中期の建物跡や大量の土器が見つかっている。また、大寺遺跡(36)や庵寺遺跡では田下駄などの木製品が出土しており、水田の広がりを示唆する。清石遺跡(17)では古墳時代中期の土器溜まりが見つかっている。

庵寺古墳群は古墳時代前期～中期の古墳群である。庵寺1B号墳では八禽鏡を副葬しており、この地域の首長クラスの古墳と考えられる。このほか、安養寺1号墳(22)や坂灘遺跡(30)では埋葬施設に箱式石棺を用いている。古墳時代後期には明神古墳(37)が築かれている。明神古墳は、全長10mを超える大型の横穴式石室に家形石棺を納め、金銅装円頭大刀や銅碗などの優れた副葬品があった。

このほか、榆ノ木谷横穴群(20)、矢迫屋横穴群(32)、赤崎山横穴群(41)、坊迫横穴墓(47)



第31図 松林寺遺跡と周辺の遺跡

などの横穴墓が築かれている。

【奈良・平安時代】

奈良時代前半の遺跡の様相は不明な点が多いが、奈良時代後半には五丁遺跡(7)、孫四田遺跡(10)、ヒヨトリケ市遺跡(13)、京円原遺跡(14)、古市遺跡(46)など多くの遺跡で土器が出土するようになり、善興寺橋遺跡(24)、仁万大橋遺跡(25)、馬庭遺跡(31)など潮川下流域の遺跡でも同様である。五丁遺跡で条里制の畔耕が確認されており、大規模な開発が行われていた可能性がある。榆ノ木谷横穴群(20)は、奈良時代まで追葬を行っていたようである。

なお、『和名類從抄』によると、松林寺遺跡周辺は「邇摩郡大国郷」に含まれる。

【鎌倉・室町時代】

白石遺跡(18)では、多数の掘立柱建物跡が見つかり、白磁や青磁などの貿易陶磁が出土した。この他、古屋敷遺跡(3)、孫四田遺跡(10)、大月遺跡(11)、コヲスミ遺跡(12)、京円原遺跡(14)、清石遺跡(17)、古市遺跡(46)や原田遺跡(48)でもこの時代の遺物が出土しており、仁万平野一円に遺跡が広がる。

石見銀山の銀鉱山開発がさかんになると、銀を巡り戦国大名の争奪の場となる。大国地区には石見城跡(52)が築かれる。仁万平野の奥の標高約150mの山頂に位置しており、狭い谷部を潮川が流れている部分に相当する。

なお、仁万平野の遺跡の動向と石見銀山遺跡が連動している可能性が指摘されている(新川2013)。

【参考文献】

新川 隆 2013 「陶磁器からみた石見銀山周辺地域・仁摩町出土資料を中心に」『世界遺産 石見銀山遺跡の調査研究』3、島根県教育委員会・大田市教育委員会、1-15

No. 遺跡名

1	松林寺遺跡	17	清石遺跡	33	萩田遺跡	49	横屋前遺跡
2	庵寺石塔群	18	白石遺跡	34	大井手遺跡	50	白石上屋敷遺跡
3	古屋敷遺跡	19	千人塚古墳	35	番所遺跡	51	高浜遺跡
4	大国地頭所遺跡	20	榆ノ木谷横穴群	36	大寺遺跡	52	石見城跡
5	庵寺遺跡	21	榆ノ木遺跡	37	明神古墳	53	大国城跡
6	庵寺古墳群	22	安養寺古墳群	38	墓原遺跡	54	天垣内城跡
7	五丁遺跡	23	飯田遺跡	39	打落し遺跡	55	半城跡
8	於才追遺跡	24	善興寺橋遺跡	40	立平浜遺跡	56	狐城跡
9	ナメラ追遺跡	25	仁万大橋遺跡	41	赤崎山横穴群	57	宅野城跡
10	孫四田遺跡	26	中配前遺跡	42	宝隆寺裏古墳群	58	鶴城跡
11	大月遺跡	27	川向遺跡	43	駒岩遺跡	59	虹ヶ谷城跡
12	コヲスミ遺跡	28	毘沙門塚古墳	44	坪ノ内遺跡	60	茶臼山城跡
13	ヒヨトリケ市遺跡	29	毘沙門遺跡	45	志源寺遺跡	61	坂本廻跡
14	京円原遺跡	30	坂叢遺跡	46	古市遺跡	62	達水鉄山所跡
15	千後田遺跡	31	馬庭遺跡	47	坊迫横穴墓	63	宅野鉢跡
16	入石遺跡	32	谷迫屋横穴群	48	原田遺跡		

第2節 調査経過

松林寺遺跡は、平成27年度の試掘確認調査で設定した9か所のトレンチの内、東側斜面に設定した3か所のトレンチで遺構・遺物を確認したことから、本発掘調査の範囲を設定し、平成28年度に発掘調査を実施した。調査終了後、遺跡が斜面の上方へ広がることが予想されたため、平成29年4月17日～28日に試掘確認調査を実施したところ、2か所のトレンチから遺物が出土し、遺跡が上方へ広がることが確認できた。その結果、平成29年度に発掘調査を実施した。

調査前は山林であった。調査面積は合計1,250m²である。

調査の方法 調査区の設定

調査では、重機掘削後に10m四方のグリッドを設定し、南北にアルファベット、東西にアラビア数字を振り、北東側を基準とした。調査区を北側へ拡張したため、中途半端な数字になっていく。遺構に伴わない遺物はグリッドで取り上げた。また、調査区から北西へ約40m離れた部分にも調査区を設定し、この部分を2区と名付けた。2区は当初から人力で掘削した。

表土・包含層掘削と遺構検出

試掘確認調査を受け、表土の掘削にはバケットに平爪を装着したバックホーを使用し、少しずつ面的に掘り下げを行った。根株は重機で倒せるものは倒し、大きな根株は穴が空かないよう人力で撤去した。遺物包含層の掘削はスコップやジョレンを用いて人力で掘り下げ、出土する遺物の粗密に応じて適宜草削りや移植ゴテ等を使用した。

遺構掘削

遺構の掘削には草削りや移植ゴテを使用した。掘削に当たっては土層観察用の畦を設定するか半截して、土層を観察しながら掘り下げた。土層については必要に応じて写真撮影を行い、図面を作成した。遺構から出土した遺物については適宜出土状況を記録した後、取り上げた。

記録の作成

遺構の平面図は遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面図は「遺構くん」のほかオートレベルを用いて測量を行った。また、必要に応じて手測りで平面図や断面図を作成した。遺構の写真は35mmデジタルカメラで撮影し、必要に応じて6×7判フィルムカメラ（モノクロネガ、カラーポジフィルム）により撮影した。

整理等作業

報告書作成はDTP方式を採用し、トレースや図の加工などはAdobe社製Illustrator CS5.1、Photoshop CS5.1を用いた。遺構・遺物写真是デジタルカメラで撮影した後、Photoshop CS5.1を用いて調整した。原稿編集作業はAdobe社製InDesign CS5.5を用いて行った。

平成28年度の発掘調査は9月6日から開始した。10月28日には田中義昭氏（元島根県文化財保護審議委員）に調査指導を受けた。11月12日に現地説明会を実施した。好天に恵まれ、約70名の参加者があった。その後調査を進め、11月25日に調査を終了した。

平成29年度の調査は9月1日から重機による表土掘削を始め、9月6日から作業員による人力の掘削を開始した。平成28年度調査区の上方を1区、西側の部分を2区とした。1区は前年度よりも傾斜が急で、滑りやすい場所であった。遺物の出土はあったものの、遺構の数は想定よりも少

なかった。10月30日には高田健一氏（鳥取大学地域学部准教授）による調査指導を受けた。その後、11月17日にラジコンヘリによる写真撮影を実施し、測量を行い、11月27日に発掘調査を終了した。

《平成28（2016）年度》

- 9月6日 人力掘削開始
- 9月14日 段状遺構2検出
- 9月27日 段状遺構2の下方に段状遺構1を確認
- 10月13日 土器埋設遺構検出
- 10月21日 鳥取県中部地震、被害なし
- 10月27日 土器溜まり検出
- 10月28日 田中義昭氏による調査指導会
- 11月12日 現地説明会（約70名）
- 11月24日 清掃、ラジコンヘリによる撮影
- 11月25日 測量を行い、発掘調査を終了する

《平成29（2017）年度》

[1区]

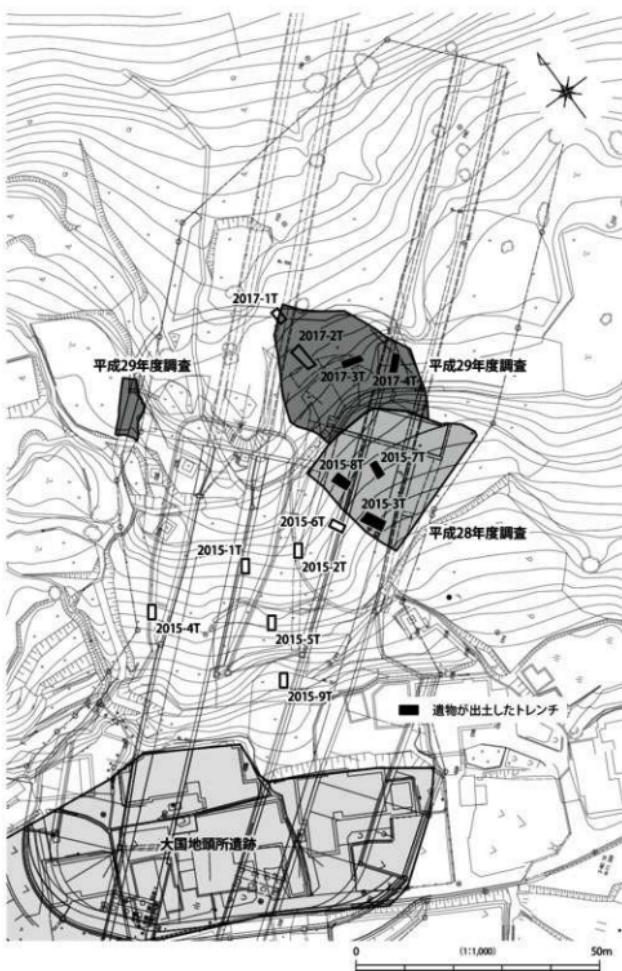
- 9月6日 調査開始
- 10月5日 土坑検出
- 10月30日 高田健一氏による調査指導会
- 11月2日 谷状地形の続きを確認
- 11月17日 ラジコンヘリによる空中写真撮影
- 11月19日 大国まちづくりセンター文化祭にパネルと土器を展示
- 11月24日 測量
- 11月27日 完掘写真撮影、調査終了

[2区]

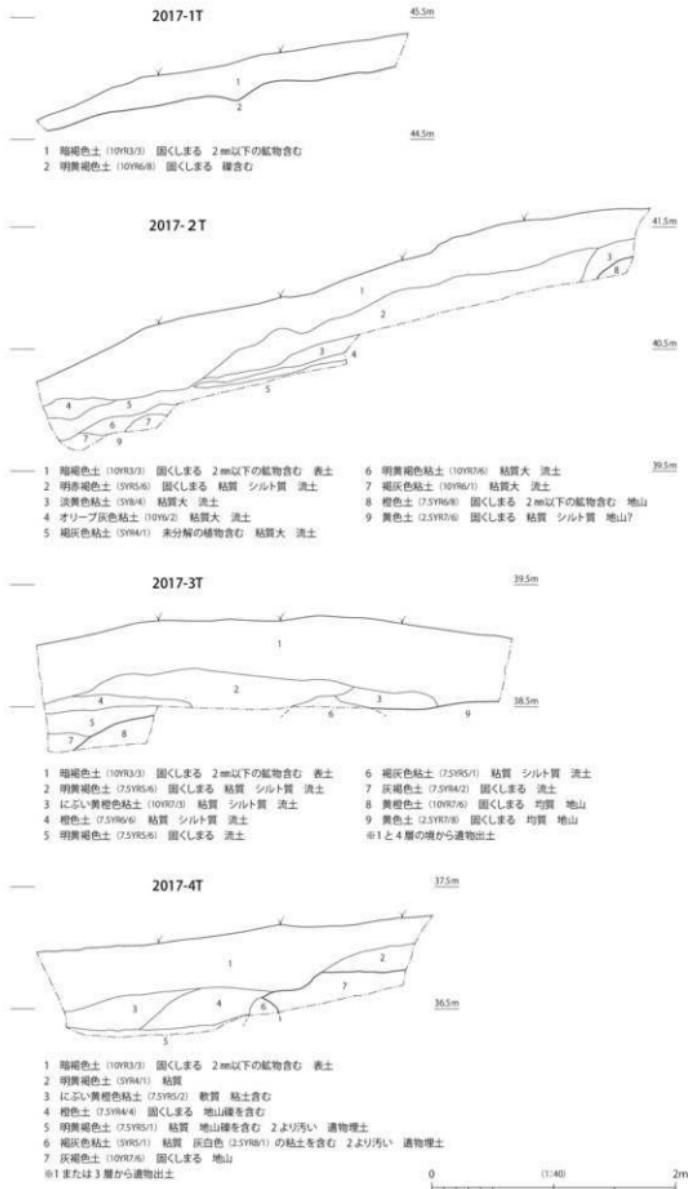
- 9月6日 調査開始、以後断続的に調査
- 9月12日 石列検出
- 10月25日 土層図作成
- 11月15日 石列の測量
- 11月17日 完掘写真撮影、調査終了

平成29年2月 武末純一氏（福岡大学法文学部教授）による調査指導

平成29年7月 田畠直彦氏（山口大学理蔵文化財資料館）による調査指導



第32図 松林寺遺跡トレーンチ配置図



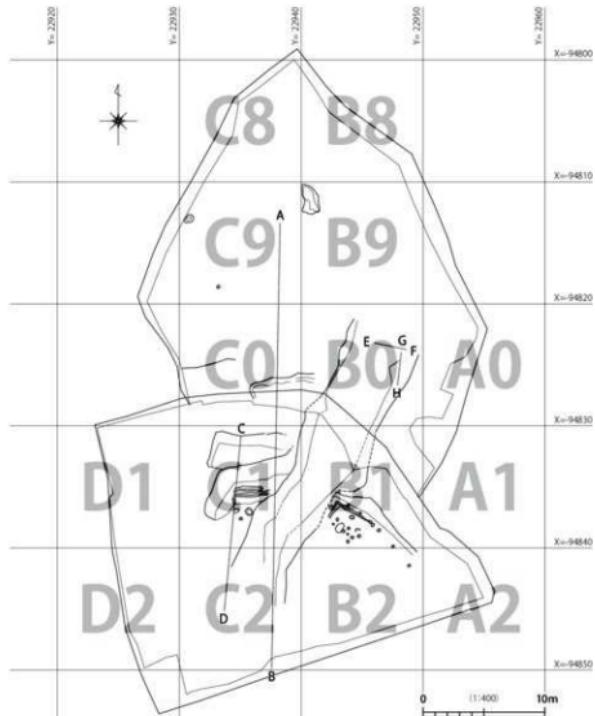
第33図 松林寺遺跡トレーンチ土層図

第3節 調査成果

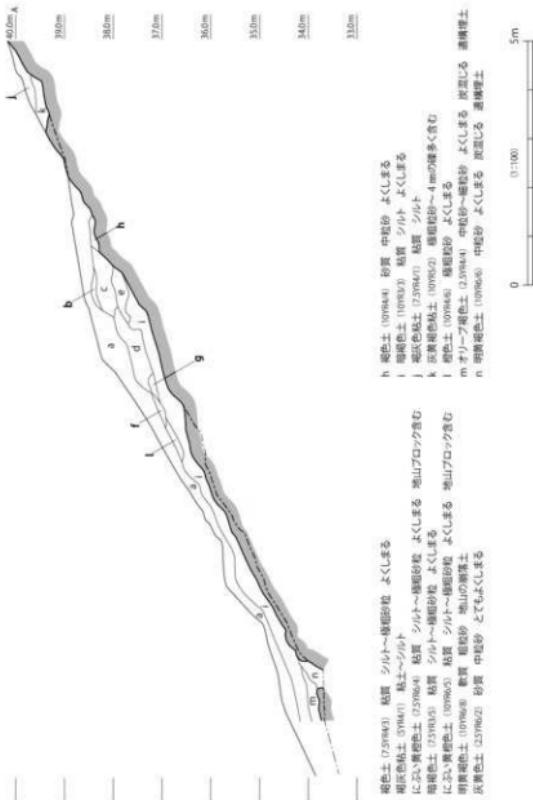
1. 紹序(第35、36図)

松林寺遺跡は斜面に位置していることから、土層は傾斜して堆積していた。最大で1m以上堆積している部分があった。第35図と第36図は調査年度が異なるため、統一した土色をつけることができなかった。標高34mより上方では、堆積土は褐色土と暗褐色土の二層に大別できる。標高38m付近では堆積が複雑であったが、遺構は確認できなかった。標高34mより下では、上から暗褐色土や黄褐色土、褐色土、黒褐色土が堆積していた。上位では黄褐色や褐色などやや明るい色調であるが、下位では黒褐色土のような暗い色調に変わる。拳大から人頭大の角礫を多く含む。暗褐色土や黄褐色土は水を含むと滑りやすく、B8グリッドには地すべりと考えられる跡があった。

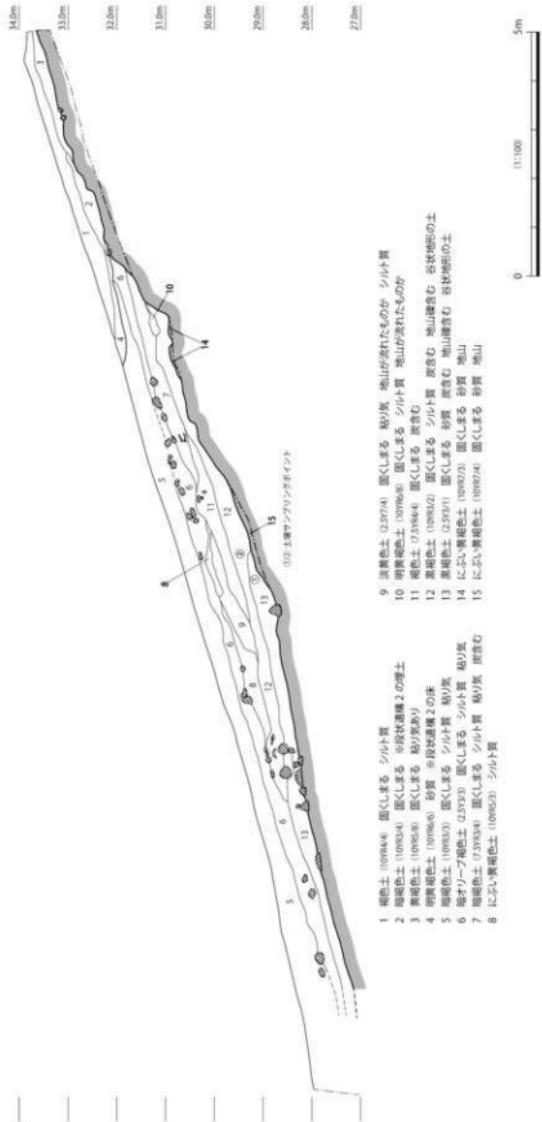
断面の観察や土層図では層を細分できたが、掘削時に出土した土器などの層位に対応するかは判断できなかったので、一括して「褐色土」として取り上げた。また、第35図の1層と第36図のa層、35図の5層と36図の1層が対応する可能性がある。第37図は段状遺構1と2の上層である。第36図とは対応していない部分が多いが、上位に黄褐色土、下位に黒褐色土などの暗い色調



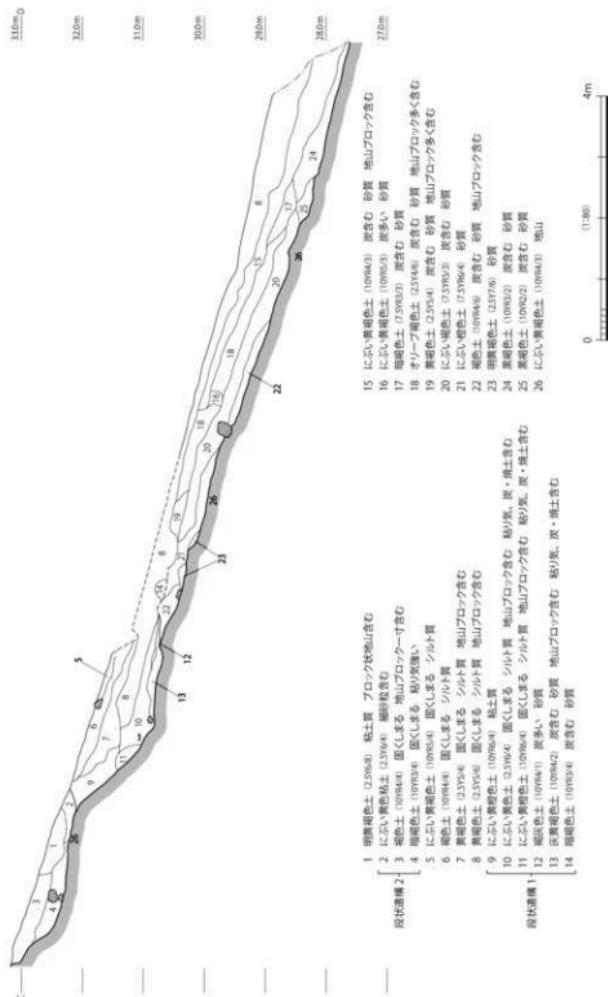
第34図 松林寺遺跡全体図



第35図 松林寺遺跡南北土層図1



第36図 松林寺遺跡南北土層図2



第37図 松林寺遺跡段状造構1、2土層図

の土層が堆積している点は共通する。

谷状地形

B0、B1、C1、C2 グリッドでは谷状の地形を確認した。この部分は窪地になっていたが、溝のように明瞭な上場下場を確認できなかったので、この部分を「谷状地形」として包含層と区別した。B0 グリッドでは、大きな岩があり、崩落の恐れがあるためその部分を残して調査を進めた。谷状地形の上部はやや湿気が多い程度で特に変化はなかった。

谷状地形の中は上層に乾燥した褐色系の土が堆積していたが、中位以下には礫混じりの粘土が堆積していた（第38図）。この粘土は粘性が強く、晴れた日でも常に水が染み出てきた。粘土はB1 グリッドの上方では青灰色であり、それより下位では暗褐色土や灰オリーブ褐色土が堆積していた。この部分は普段は乾いているが、降雨時には水が流れた。

谷状地形の幅は上場で 5～7m である。C2 グリッドの下方の部分では浅くなり、高低差がなくなる。出土した土器には弥生土器と土師器があり、弥生土器のほうが土師器よりも多く出土した。段状造構 1 を切っているが、最も新しい土器の差はほとんど無かった。土器は調査区外の上方から流れてきたものがあると考えられる。

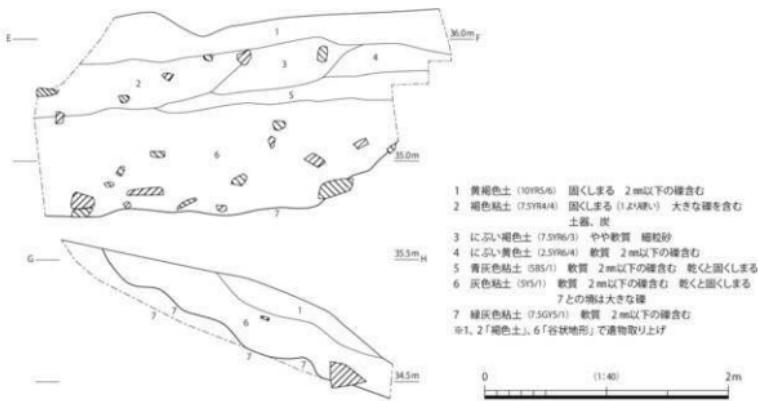
なお、谷状地形の下方には地すべり計が設置してあるため、その部分を残して調査を行った。

2. 検出遺構

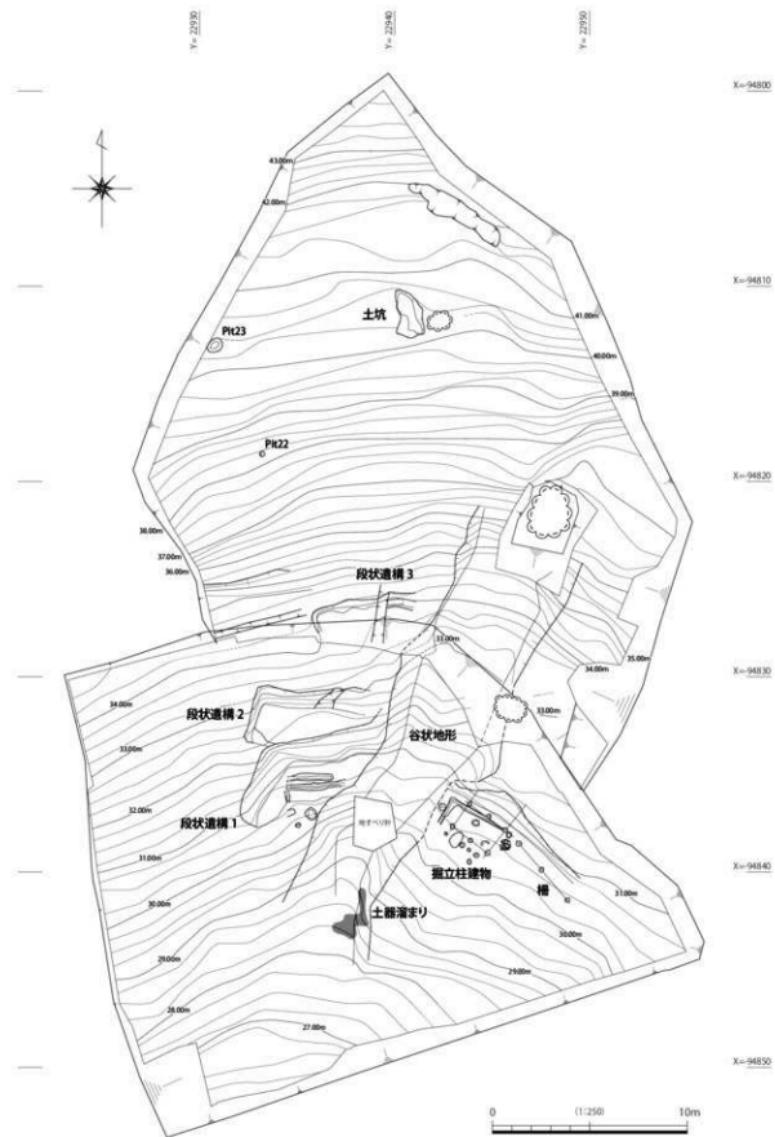
松林寺遺跡の調査では、1 区で掘立柱建物 1、柵 1、段状造構 3、土坑 1、土器埋設遺構 1 を確認した。調査範囲の標高は 27～43m であるが、遺構は標高 30～34m の範囲に多く、土坑のみ標高 40.5m に位置していた。

掘立柱建物（第40、41図）

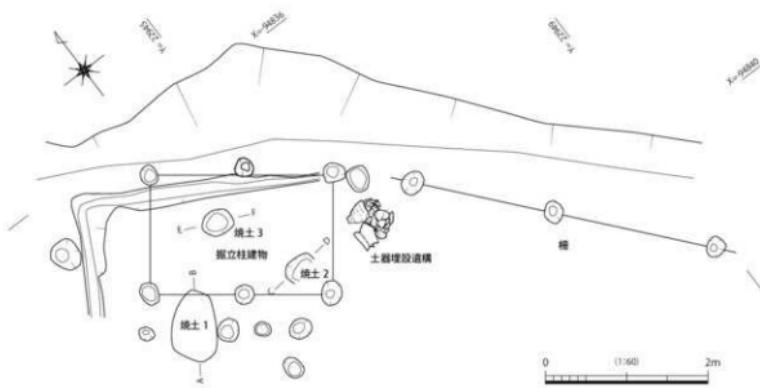
B1 グリッドに位置する。1間×2間の掘立柱建物である。規模は 2.2 × 1.5m である。柱穴の埋め土はにぶい黄褐色土 1 層である。山側は斜面をカットしていることから、建物の軒の出が短かい、または平屋根の可能性がある。柱穴から遺物は出土しなかった。



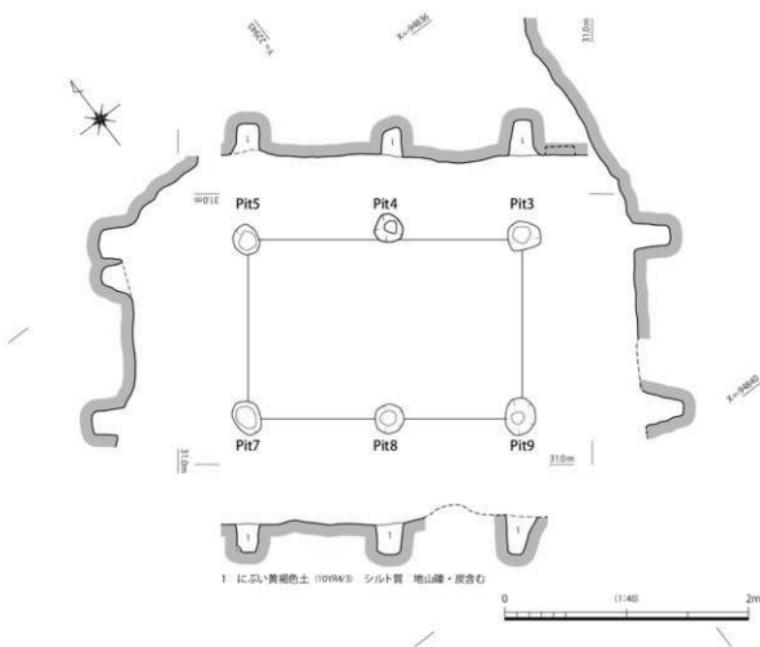
第38図 松林寺遺跡谷状地形土層図



第39図 松林寺遺跡遺構配置図



第40図 松林寺遺跡掘立柱建物、柵平面図



第41図 松林寺遺跡掘立柱建物実測図

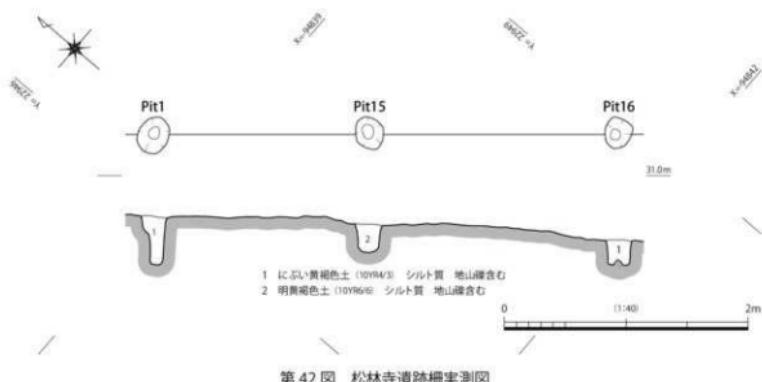
建物の中に2か所、南側に1か所の焼土面を確認した(第40、43図)。焼土の平面形は楕円形で、長軸で40~90cm、短軸で30~55cmの規模である。焼土はいずれも焼けてよくしまっていた。遺物は出土しなかった。

柱穴を検出し清掃した際に山側に溝があることが分かった。この溝は掘立柱建物に先行する。北側と西側のみ確認することができた。東側はSB06の柱穴で切られており、これ以上は延びない。L字に折れ曲がる。地山によく似た土が堆積しており、清掃中に掘りあがってしまったので、土層図を作成することができなかった。遺物が出土しなかったが、SB06に先行することから、弥生時代後期中葉～後葉の可能性がある。

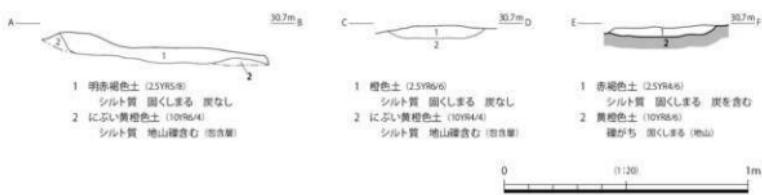
また、後述する土器埋設遺構はこの建物のすぐ東側に位置するが、土器埋設遺構の検出面が高く、建物の機能時に土器埋設遺構が存在した可能性は低いと考えられる。掘立柱建物跡から遺物は出土しなかった。土器埋設遺構に先行することから、弥生時代後期後葉～後期末と考えられる。

柵(第42図)

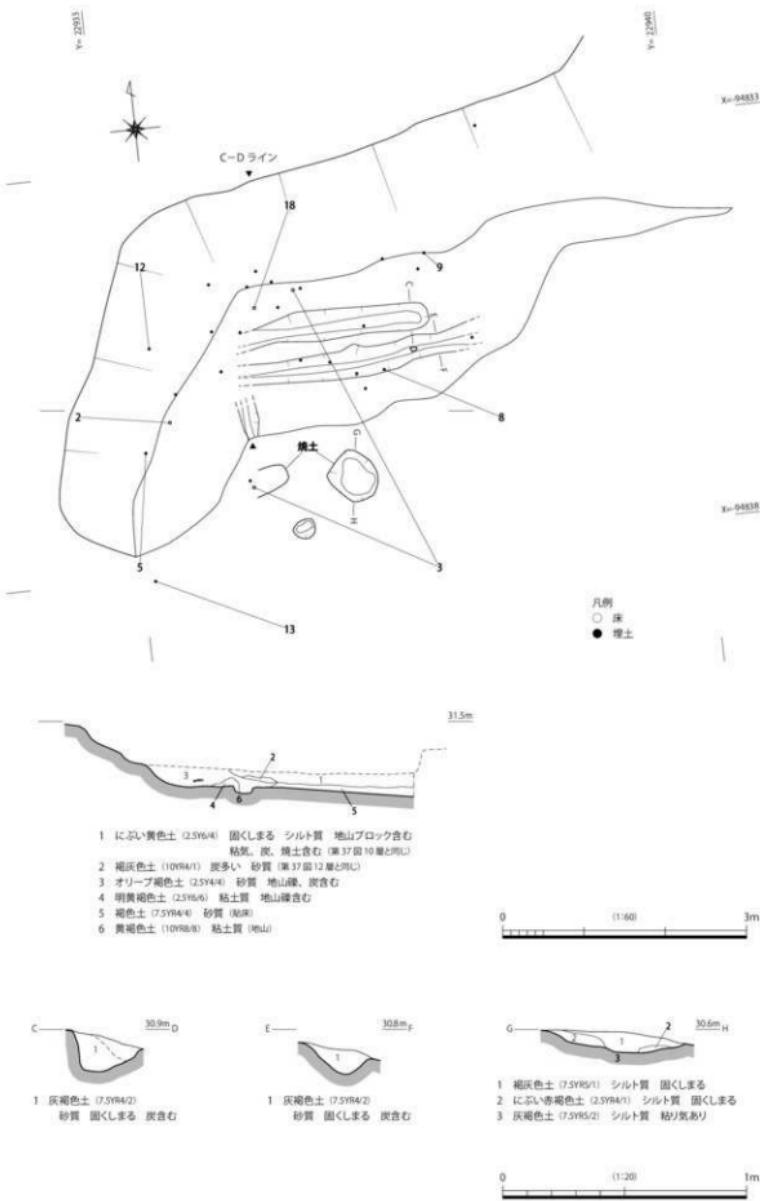
B1からB2グリッドにかけて位置する。掘立柱建物の東側に位置する。段の加工はこの部分まで及ぶ。2間分、3.9mの長さである。対応する柱穴が無かったので、柵と考えた。遺物が出土しなかった。掘立柱建物と同時期の遺構の可能性がある。



第42図 松林寺遺跡柵実測図



第43図 松林寺遺跡焼土層図



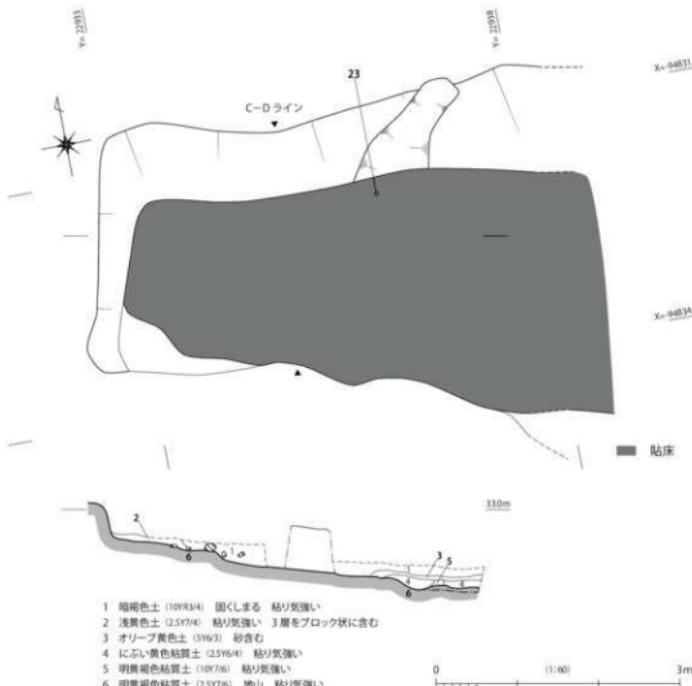
第44図 松林寺遺跡段状遺構1実測図

段状遺構 1（第44図）

C1 グリッドに位置する。斜面を段状に加工する。土層の切り合いから段状遺構 2 に先行する（第37図）。遺構の平面形は谷状地形に削平されており現状では不整形であるが、台形であった可能性がある。規模は上場で $7.1 \times 5.4\text{m}$ 、床面で $6.0 \times 3.6\text{m}$ である。深さは最大で 1.5m と深い。床面には斜面に並行する溝 2 条、直交する溝 1 条があるほか、やや下方にピット 1、焼土 2 がある。埋土は地山ブロックを含むにぶい黄色土やオリーブ褐色土であり、東側には貼床に褐色土を用いている。貼床は遺構の東側にあったが、面的に確認できなかった。床面の溝は長さ 2 ~ 3m、幅は上場で約 30cm、断面形は浅い U 字形である。防湿のための溝の可能性がある。床面には溝しか認められなかったことから、段状遺構と考えられる。床面や埋土から弥生土器や土師器が出土した。床面の遺物にも弥生土器（1 ~ 3）と土師器（4）があることから、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉まで使用されたと考えられる。

段状遺構 2（第45図）

C1 グリッドに位置する。斜面を段状に加工する。段状遺構 1 を切り、後にする。遺構の平面形は長方形である。規模は上場で $6.5 \times 4.4\text{m}$ 、床面で $6.0 \times 3.0\text{m}$ である。深さは最大で 70cm であ



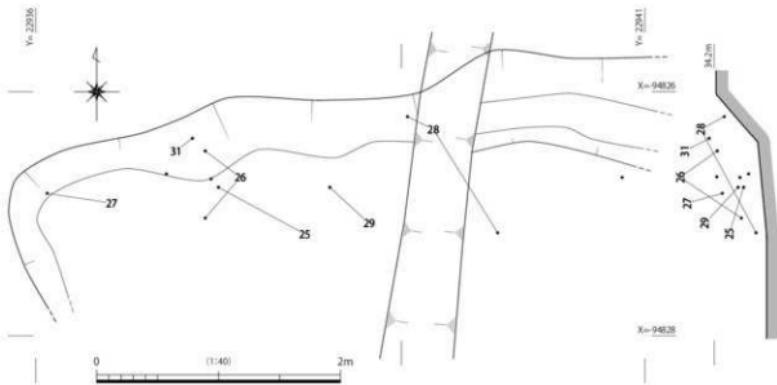
第45図 松林寺遺跡段状遺構 2 実測図

る。床面には貼床があったのみで柱穴など他の遺構を確認できなかったことから、段状遺構と考えられる。埋土は固くしまった暗褐色土である。貼床はオリーブ黄色土やにぶい黄色の粘質土である。貼床は床面ほぼ全面に広がっていた。東側が低く傾斜していることから貼床を設けたと考えられるが、それでもまだ東側が低い。貼床は段状遺構1を埋めている。

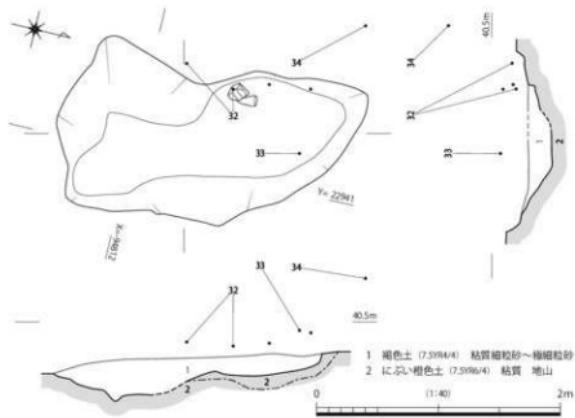
貼床にはりついたかたちで台石(23)が出土したほか、土師器片が埋土中から出土した(19~22)。これらの土器の時期から、古墳時代前期前葉~中葉と考えられる。

段状遺構3(第46図)

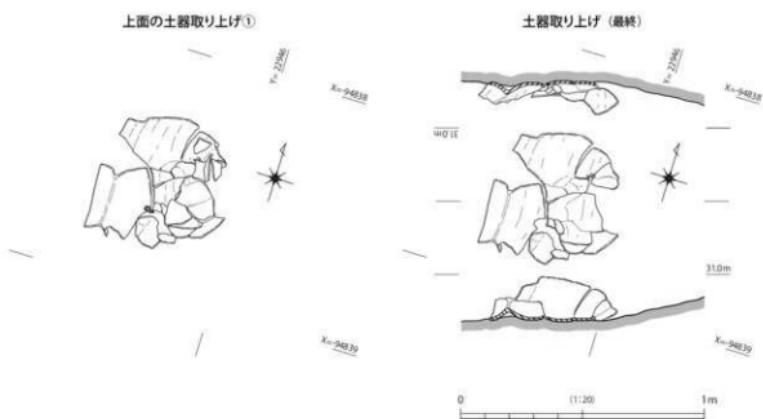
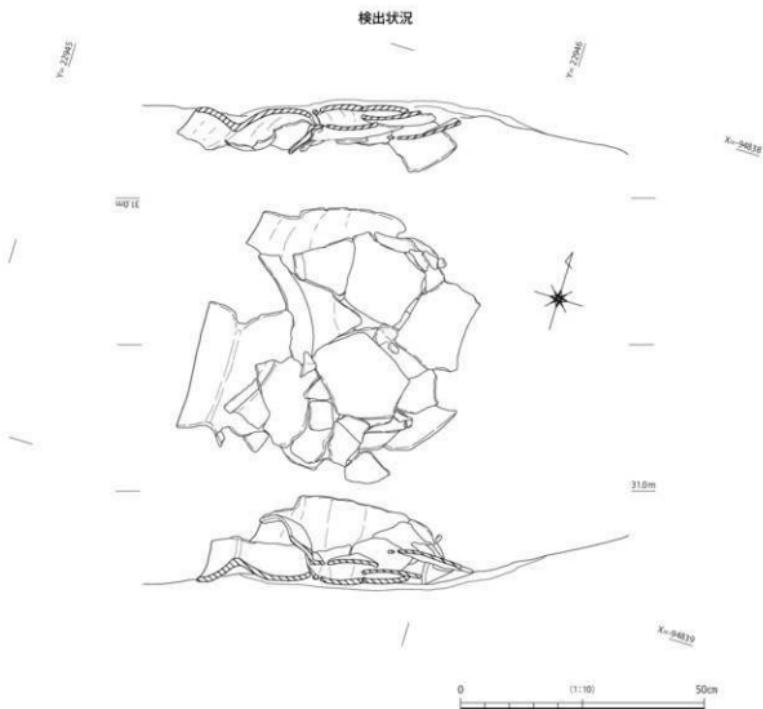
BOからCOグリッドにかけて位置する。斜面を段状に加工する。ちょうどH28年度とH29年



第46図 松林寺遺跡段状遺構3実測図



第47図 松林寺遺跡土坑実測図



第48図 松林寺遺跡土器埋設遺構実測図

度の調査区の端に位置していたため遺構であるとの認識が不十分で、南北の土層図の畦と断ち割りを遺構の中央に入れていたため、遺構の一部しか確認できなかった。規模は上場で 5.6m 以上 × 1.0m 以上、深さは約 0.4m である。遺構掘削中に出土した土器には弥生土器や土師器がある（25 ~ 31）。これらの土器から、遺構の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代前期中葉と考えられる。

土坑（第 47 図）

B9 グリッドに位置する。斜面の傾斜が緩くなった部分があり、その部分の土色の違う部分を精査したところで確認した。遺構の長軸は斜面に直行する。平面形は不整形な楕円形である。遺構のすぐ東側に大きな石があり、その大石に規制された可能性がある。規模は 2.5 × 1.5m である。深さは最大で約 0.3m である。遺構の上面やや西側で石を 2 個確認した。底面はやや凹凸がある。埋土は粘質の褐色土 1 層であった。土坑の上面から弥生土器や土師器の破片が出土した（32 ~ 34）。遺構の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉である。

土器埋設遺構（第 48 図）

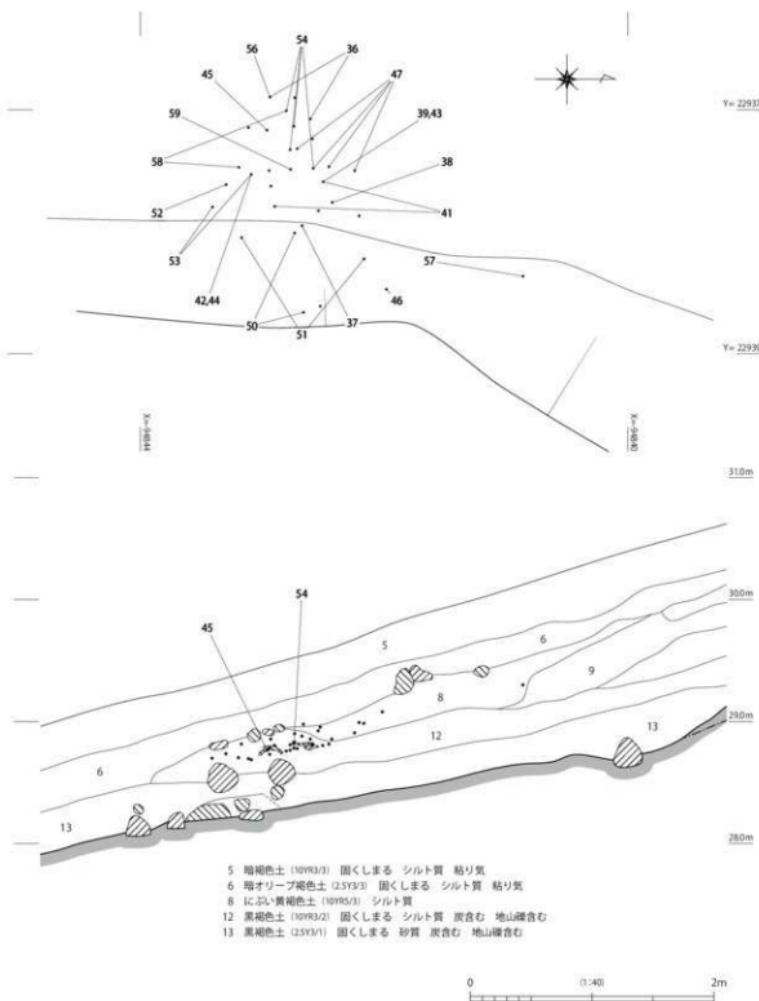
B1 グリッドに位置する。調査区中央やや東寄りの緩斜面を段状に加工して、掘立柱建物や櫛と同じ平坦面に位置する。土器埋設遺構の調査時には掘立柱建物の柱穴は確認できず、掘立柱建物より浅いところで検出したので、掘立柱建物に後出する。浅い楕円形に地面を掘り、口縁を西にして、横位に大形の甕を据えていた。土器の範囲は 60 × 50cm である。掘り込みの深さは 10cm 以下であることから、土坑を掘り土器を埋めたのではなく、横位に大形の甕を設置したと考えられる。24 の特徴から、古墳時代前期前葉と考えられる。

土器溜まり（第 49 図）

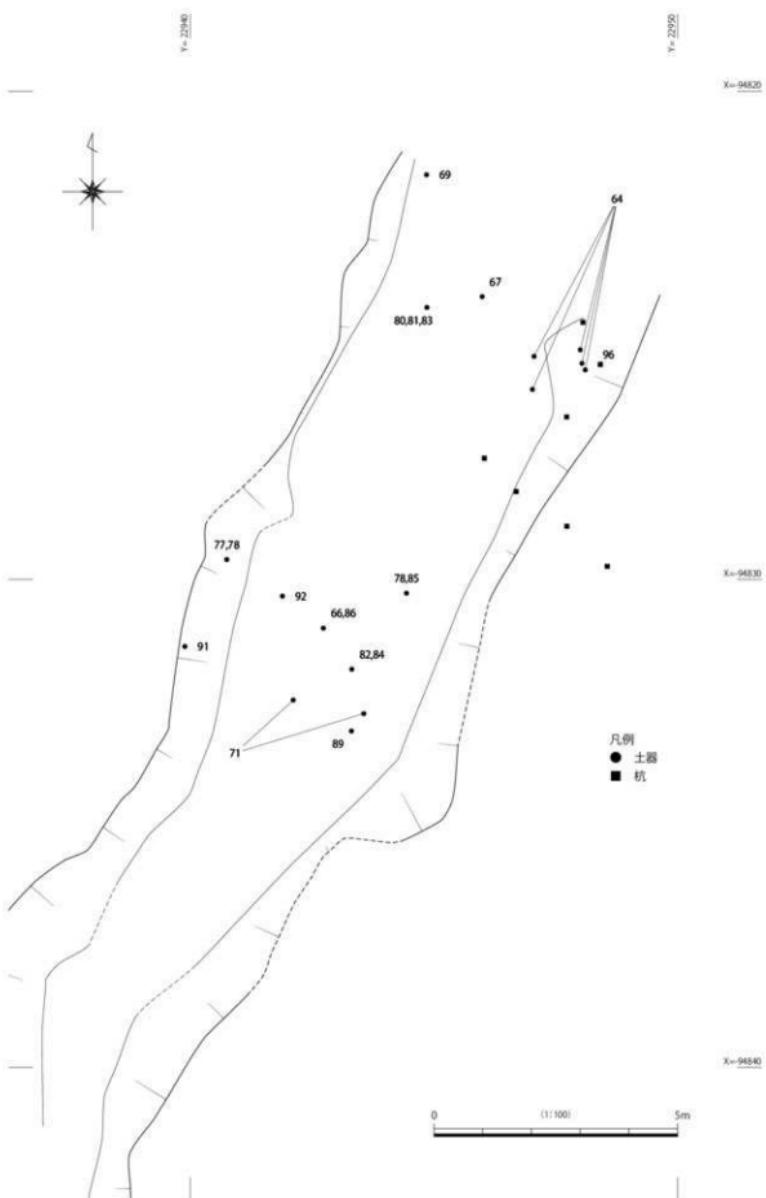
C2 グリッドに位置する。褐色土を掘削中に土器が集中して出土したので、土器の広がりを確認し、その部分を土器溜まりとして取り上げた。南北の土層図ではにぶい黄褐色土から黒褐色土に相当する。谷状地形の最下部に位置する。およそ南北 1.5m、東西 2m の範囲に広がる。土器には同じ層位に弥生土器と土師器があり（35 ~ 62）、完形に復元できるものは少なく、離れた場所から出土した土器が接合関係にある個体があることから、斜面の上位、例えば段状遺構 1 や 2 から複数回投棄されて累積した結果と考えられる。土器に伴い炭、炭化種子が出土した。炭化種子はトチノミであった（第 5 章第 2 節参照）。時期は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉と考えられる。

土器の出土状況（第 50 ~ 52 図）

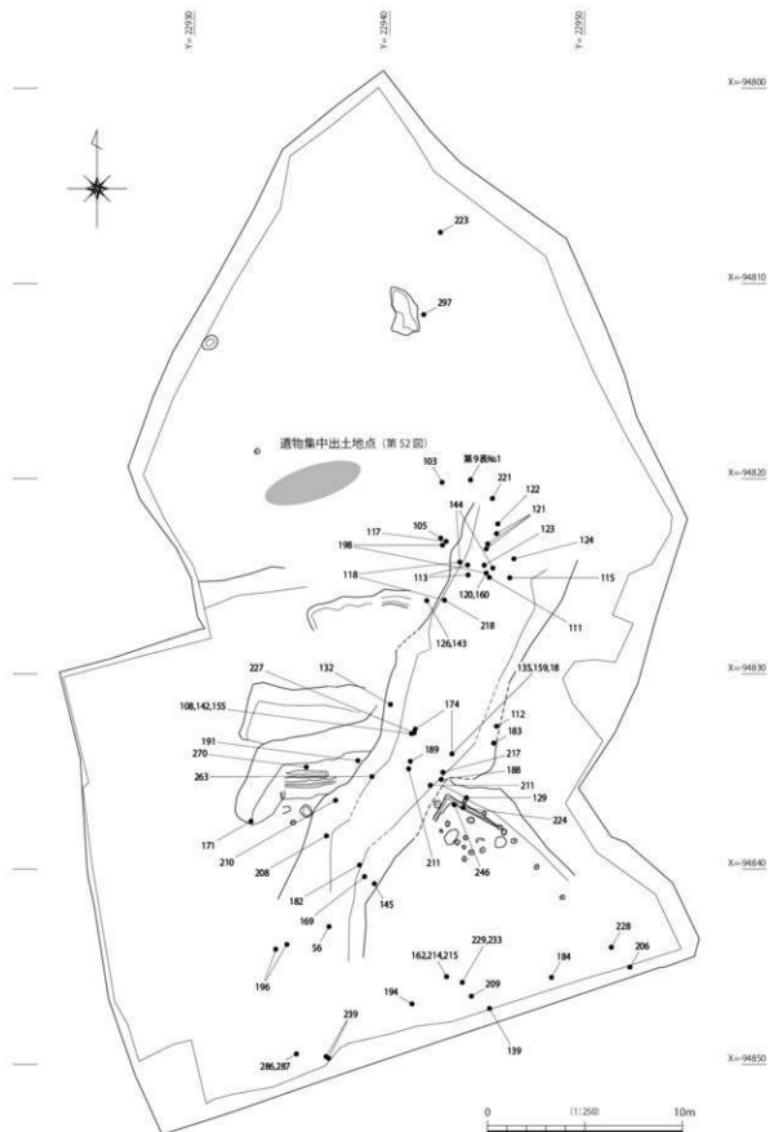
第 50 図は谷状地形内の土器、第 51 図は遺跡全体の「褐色土」中の土器、第 52 図は C9、C0 グリッドの土器出土状況である。遺跡の上方では少なく、B0、C0 グリッドより下方で多く出土した。C9、C0 グリッドでは土器が比較的集中して出土したが、地山直上だけではなく包含層中からも出土した。焼土や炭が周囲よりもやや多かったが、遺構を確認することはできなかった。台付裝飾壺（172、175）が出土している。土器の数量と重量は第 13 表に示した。



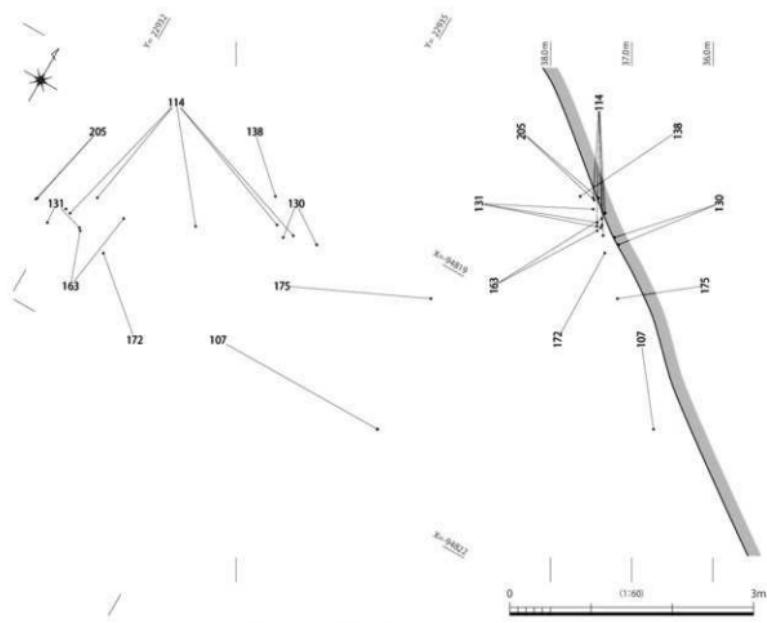
第49図 松林寺遺跡土器溜まり実測図



第50図 松林寺遺跡谷状地形土器出土状況図



第51図 松林寺遺跡土器出土状況図



第52図 松林寺遺跡 C9C0 土器出土状況



写真5 作業風景

3. 2 区（第53図）

調査地は世界遺産『石見銀山遺跡とその文化的景観』のバッファーゾーンの範囲内であり、石見銀山遺跡が繁栄した時期の遺構・遺物の存在が想定されたことから、調査を実施した。

1区から約40m離れた丘陵中程の平坦面に調査区を設定した。調査前から石製の階段が露出しており、江戸時代もしくはそれより新しい時期の遺構の存在を想定した。調査区は長さ約12m、幅3~5mである。調査の結果、石列を確認した。また、階段を清掃した。なお、図示していないが調査区の東側には水たまりがあり、滯水していることや泥が深いことから調査を行わなかった。

調査区の北東側の壁の土層では、調査区の北側では表土の褐灰色土（1層）が薄く堆積しており、すぐに地山である黄褐色土を確認した（第54図）。調査前は平坦であったが、断ち割りをしたところ、南西側では地山が傾斜しており、地山ブロックを含む粘質の土が堆積していた。地山の上のにぶい黄褐色土（7層）には、拳大の礫を多数含んでいた。表土がほぼ水平に堆積していることから、4層以下は造成土の可能性があり、調査区の南側半分ほどは造成された部分である。

石列（第55図）

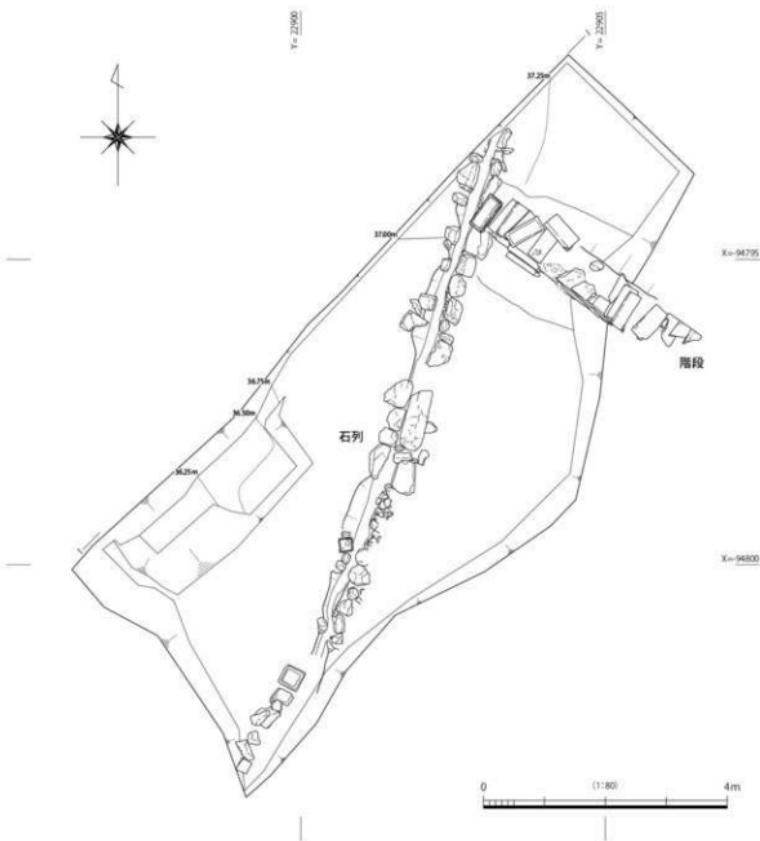
調査区の中央を北東・南西方向にのびる。現状で長さ11mであり、さらに南北へ延びるようである。調査区の南側には木の根があり、溝は確認できなかったが、西側の石を確認した。幅約20cmほどの溝の両側に拳大から人頭大の角礫を置いている。石は積み上げておらず、1個のみ置いている。石列の石に宝鏡印塔を転用したものが2点あった。東側の石に大きい角礫が多い。埋土は褐灰色土で、表土と区別できなかった。普段は乾いているが、降水時には水が北から流れたので、排水用と考えられる。埋土から土器が出土しなかったので、時期は不明であるが、宝鏡印塔（303）を石列に転用していること。埋土が表土と同じであったことから、江戸時代以降の可能性がある。

階段（第56図）

調査区の東側に位置する高まりへ続く階段である。調査範囲にかかった約4m部分を清掃した。地山を削り出した上に踏み石を直接置いているが、南側は長方形の石を最大で6段積み、踏み石を置く部分を平たんにしている。階段の中程は踏み石が落ちて原位置を保っていないが、上の部分と下の部分は原位置を保っているものが多い。合計15~20段存在したと考えられる。踏み石は長さ約60cm、幅約30cm、厚さ約10cmである。表面は平滑に仕上げているが、裏面は中をくりぬくように加工したままである。階段の上には後述する江戸時代の墓地があったことから、階段の時期は江戸時代以降と考えられる。

墓地（第57図）

1区と2区の間の高まりの部分には江戸時代から明治時代の墓地があった。墓地の移転に際して、平成26年度に調査を行い、墓石の内容を記録した。墓石の内容は第6表に示した。約30基余りの墓石は寛延4（1751）年のものを最古とし、明治20年代まで築かれた。

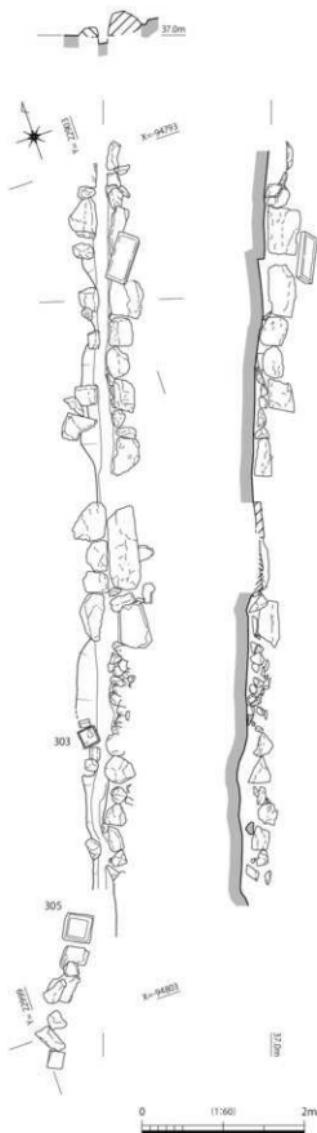


第53図 松林寺遺跡2区全体図

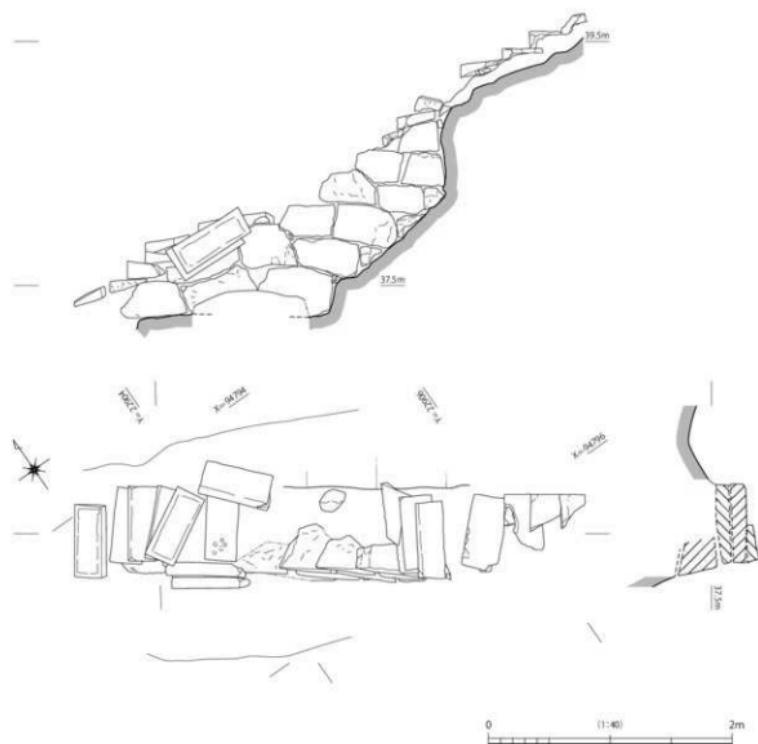


- | | |
|------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 細灰土 (10YR5/1) 粘質 細粒砂～中粒砂 表土 | 5 にふい黄褐色土 (10YR4/3) 粘質 中粒砂 |
| 2 にふい黄褐色土 (10YR5/4) 粘質 細粒砂～中粒砂 | 6 広黄褐色土 (10YR5/2) 粘質 中粒砂 地山ブロック含む |
| 3 にふい黄褐色土 (10YR6/4) 粘質 細粒砂～中粒砂 | 7 にふい黄褐色土 (10YR4/5) 粘質 細粒砂 ポロボロくずれる |
| 4 明黄褐色灰土 (10YR6/6) 粘質 中粒砂 地山ブロック含む | 8 黄褐色土 (10YR8/8) 粘質 固くしまる 地山 |

第54図 松林寺遺跡2区西壁



第55図 松林寺遺跡2区石列



第56図 松林寺遺跡 2区段階



写真6 調査指導風景 1



第57図 松林寺遺跡石造物平面図



写真7 調査指導風景2

第6表 松林寺遺跡墓石一覧表

墓石等 番号	種別	西暦	高さ (cm)	最大幅 (cm)	備考
A-1	地蔵	—	22.0	台座のみ	
A-2	突頂方柱	1848-1854	80.4	21.2	
A-3	突頂方柱	—	88.8	22.0	
A-4	円頂方柱	—	112.2	23.7	
A-5	灯籠	—	84.1	34.1	台座のみ
A-6	灯籠	—	—	—	
A-6-2	一石宝篋印塔	—	—	—	
A-7	地蔵	—	—	24.0	
A-8	円頂方形	1859	—	106.8	27.5
		1883			
A-9	円頂方柱 (形)	1820	—	111.2	27.2
A-10	墓石 (無縫塔)	1751	—	17.0	32.8
A-11	墓石 (無縫塔)	1766	—	147.3	29.5
A-12	円頂方形	—	—	74.7	21.5
A-13	笠付方形	—	—	—	24.4
A-14	基礎	—	—	—	18.5
A-15	笠付方形	1807	—	—	52.0
		1838			
A-16	円頂方柱	1887-1896	—	101.2	24.0
A-17	墓石	—	—	94.6	23.0
A-18	墓石	—	—	83.0	18.0
A-19	墓石	—	—	—	—
B-1	円頂方形	1820	—	94.5	23.5
B-2	円頂方柱	1807	—	85.1	22.8
C-1	祠	—	—	89.1	52.5
C-1-2	笠付方形	—	—	—	—
D-1	—	1862	—	67.7	25.2
D-2	円頂方柱	1838	—	—	—
E-1	円頂方柱	1798	—	—	23.2
		1806			
E-2	墓石 (無縫塔)	—	—	—	20.8
F-1	灯籠	—	—	—	破片 4
F-2	灯籠	—	—	—	破片 4
F-3	相輪	—	—	—	18.9
G-1	墓石	—	—	—	—
H-1	地蔵	—	—	—	—
I-1	墓石	1843	—	—	—
I-2	墓石	1838	—	—	—
I-3	墓石	1775	—	—	—
I-4	墓石	—	—	—	—

4. 出土遺物

松林寺遺跡から出土した土器を基準で分類し、注記が可能なものの数量と重量を計測した。その結果は第13表に掲載した。出土土器の中で最も多いのは弥生土器と古墳時代前期の土師器である。このうち、出土量の多い弥生土器の甕の分類を行い、その指標を明示する。分類は甕の各部位の特徴や文様の変遷に着目して行うべきであるが、肩部より上位しか遺存していない資料が多いので、口縁部形態に着目し以下のように分類する。

- ・口縁部の形態（第58図）

I：口縁部が内傾または直立する。

II：口縁部が外反する。

- ・口縁部の長さ（相対的なもの）

A：短い

B：長い

- ・口縁部下端の稜の突出の程度

a：口縁部下端の稜の突出が弱い

b：口縁部下端の稜が強く突出

- ・口縁部の文様の有無

1：有文（柳描、貝殻）

2：施文後ナデ消し

3：無文（ヨコナデ）

以上に分類し、「甕 Ia1類」「甕 IIb2類」のように表記する。

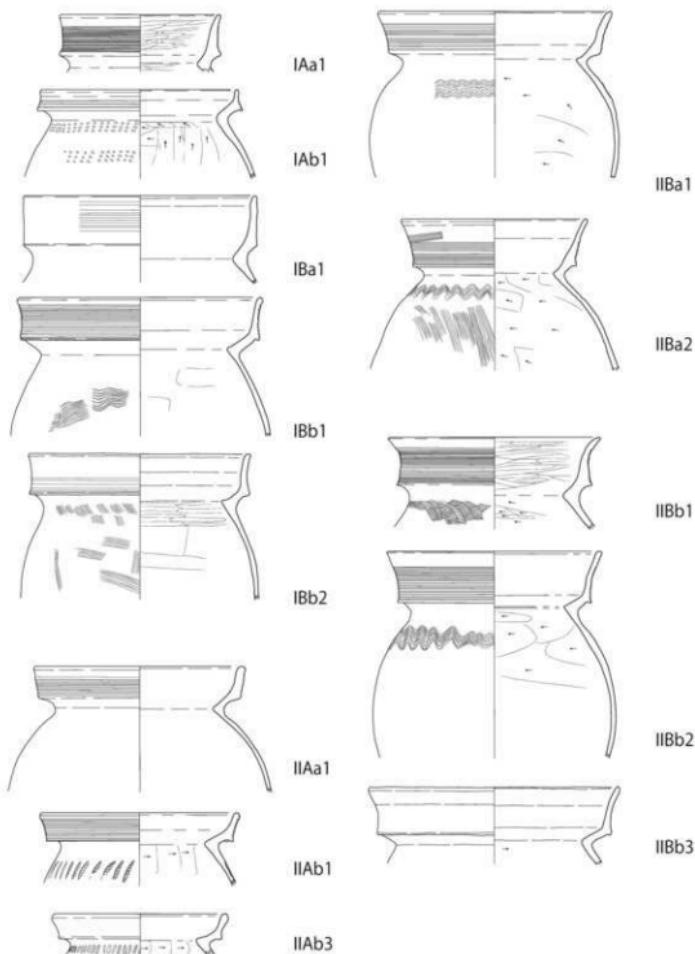
直線文について、原体を確認できたものは「貝殻直線文」のように呼称したが、そうでないものについては「直線文」「波状文」のように原体を特定していない。

弥生土器、古墳時代前期の土師器の編年においては、土器の要素が共通することから、（松本1992）（鹿島町教育委員会編1992）（松山2015）の出雲地域の編年を用いる。

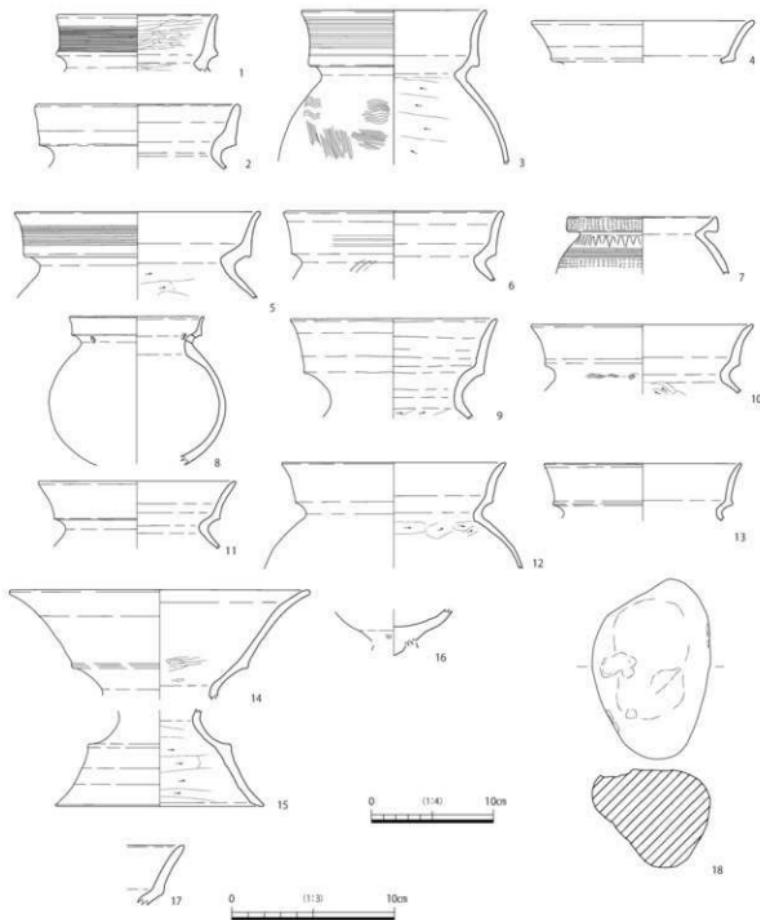
松林寺遺跡の弥生土器は、胎土に1～2mmの鉱物を含むものがほとんどであるが、土師器の胎土は鉱物を含まず、砂質であるものがほとんどであった。このことから、破片であっても弥生土器と土師器を区別することができた。なお、松林寺遺跡の土器は丘陵部に位置しているためか、摩滅しているものが多く、焼成が軟質のものが多い。

段状遺構1（第59図1～18） 1～4は床面で出土した。1は口縁が直立し、外面には直線文がある。口縁部下の稜はあまり突出しない。2は口縁部が厚い。摩滅のため文様の有無は不明である。3は口縁部が外反する。4は土師器の甕である。口縁部下の稜の突出は鈍く、口縁端部は丸い。

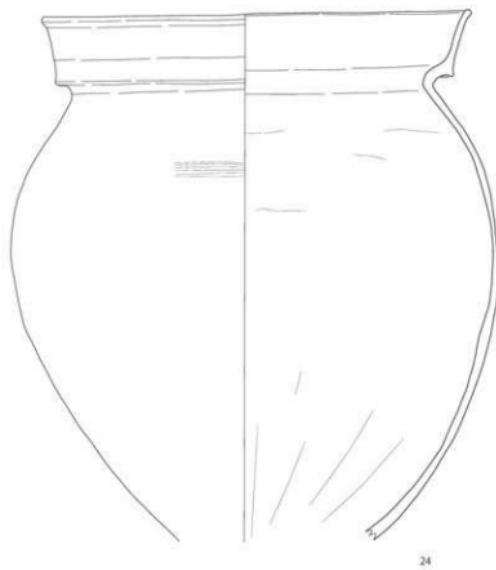
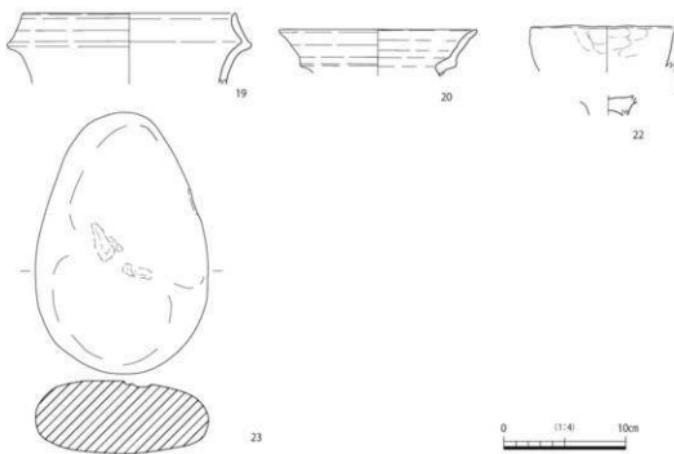
5～17は埋土から出土した。5、6は摩滅しており本来は口縁部全面に直線文があったと考えられる。7、8は鉢である。7は口縁部外面に列点文、胴部に上から「ハ」字状の列点文、直線文、口縁部と同じような列点文がある。8は球形の胴部から口縁部が短く立ち上がる。口縁部内面には蓋用の孔が向かい合わせに2つ1対で開いている。内外の調整や口縁部の文様の有無は摩滅により不明である。9～17は土師器である。9は壺である。口縁部が一周する。厚手で、口縁端部は外反する。口縁部下の稜はつまみ出す。10～13は口縁端部が丸く、口縁部下の稜の突出は鈍い。



第58図 松林寺遺跡甕分類図



第59図 松林寺遺跡段状遺構1遺物実測図



第60図 松林寺遺跡段状遺構 2、土器埋設遺構遺物実測図

14、15は鼓形器台である。14に比べて15は台部径が細い。16は古墳時代中期以降の高環である。环部の底の粘土が丸く突出する。

18は床面から出土した石器である。縦長の円盤で、打痕があることから敲石と考えられる。

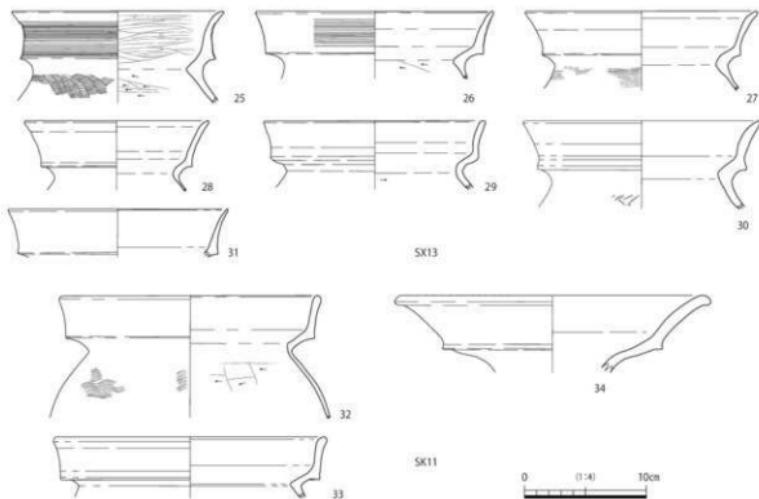
1～3は草田3期、4は草田5～6期、5、6は草田3期、7、8は草田2期までさかのぼる可能性がある。10～13、15は草田4～5期、14、17は草田5期、16は小谷4式以降と考えられる。

段状遺構2(第60図19～23) 土器は床面から胴部片がわずかに出土し、埋土からは土師器が多く出土した。図示した土器はすべて土師器である。19は口縁部が内傾する。20の口縁部の稜は鈍い。21は厚手の鉢に復元した。23は貼床から出土した。使用痕があり、大きさから台石と考えられる。

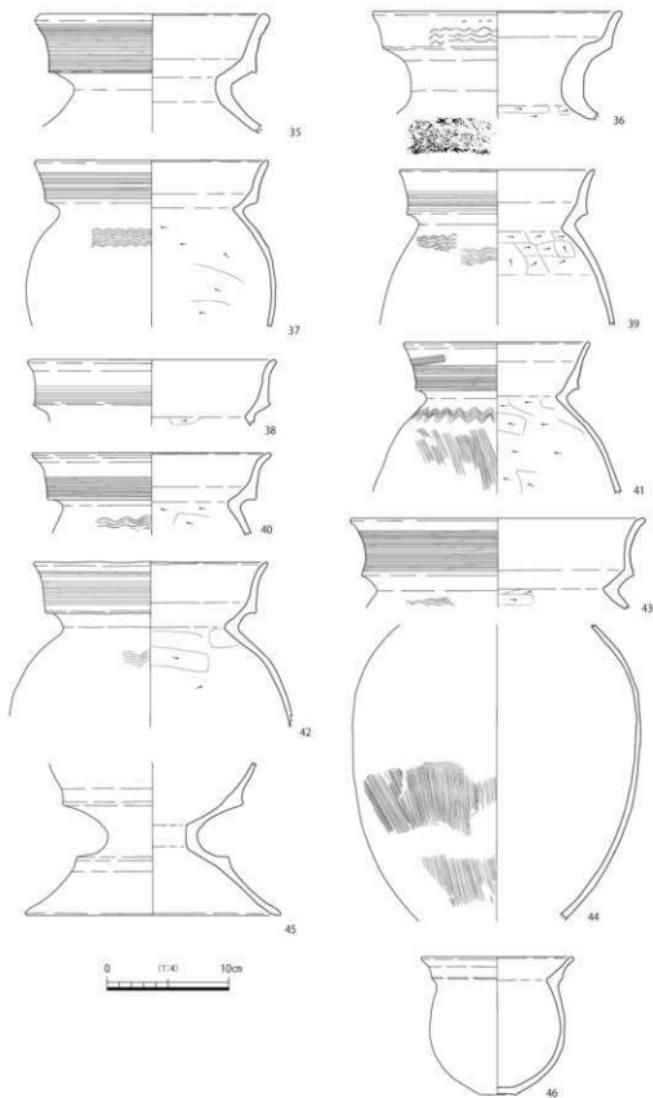
19は草田5～6期、20は草田5期と考えられる。

土器埋設遺構(第60図24) 大型の土師器の甕である。ほぼ完形であるが、底部を欠く。摩滅しているが、肩部のヨコハケが確認できる。口縁部の稜は下方へ突出する。胴部に煤が薄く付着していることから、日用品を使用したと考えられる。口縁端部が肥厚しないことから、草田5期と考えられる。

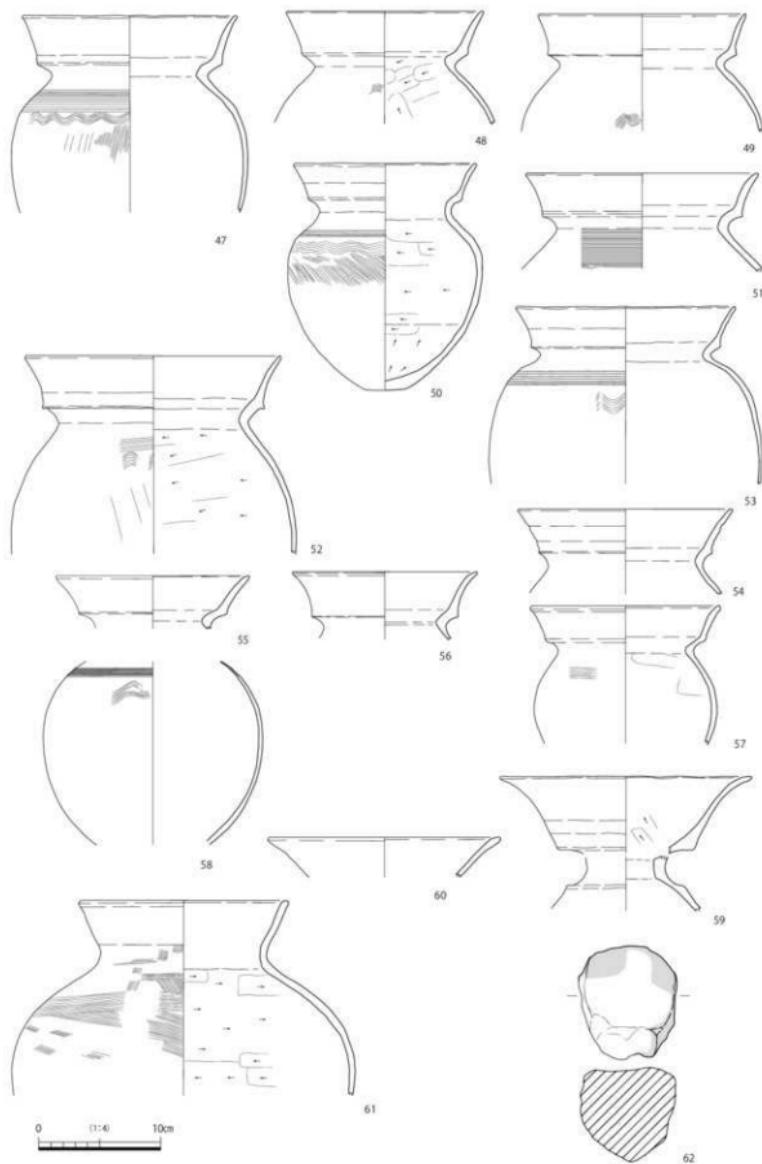
段状遺構3(第61図25～31) 25、26は弥生土器である。25は口縁部が大きく外反する。口縁部下の稜は鋭く突出する。肩部には貝殻文を押し引き風に施す。26は口縁部が摩滅しているが、10条の直線文が確認できる。27～31は土師器である。27、28は口縁端部がやや尖り気味で、口縁部下の稜が鋭い。29は口縁端部が丸く、稜がやや鈍くなっていることから、やや時期が下ると考えられる。30は口縁部が厚くなっていることから、さらに時期が下ると考えられる。



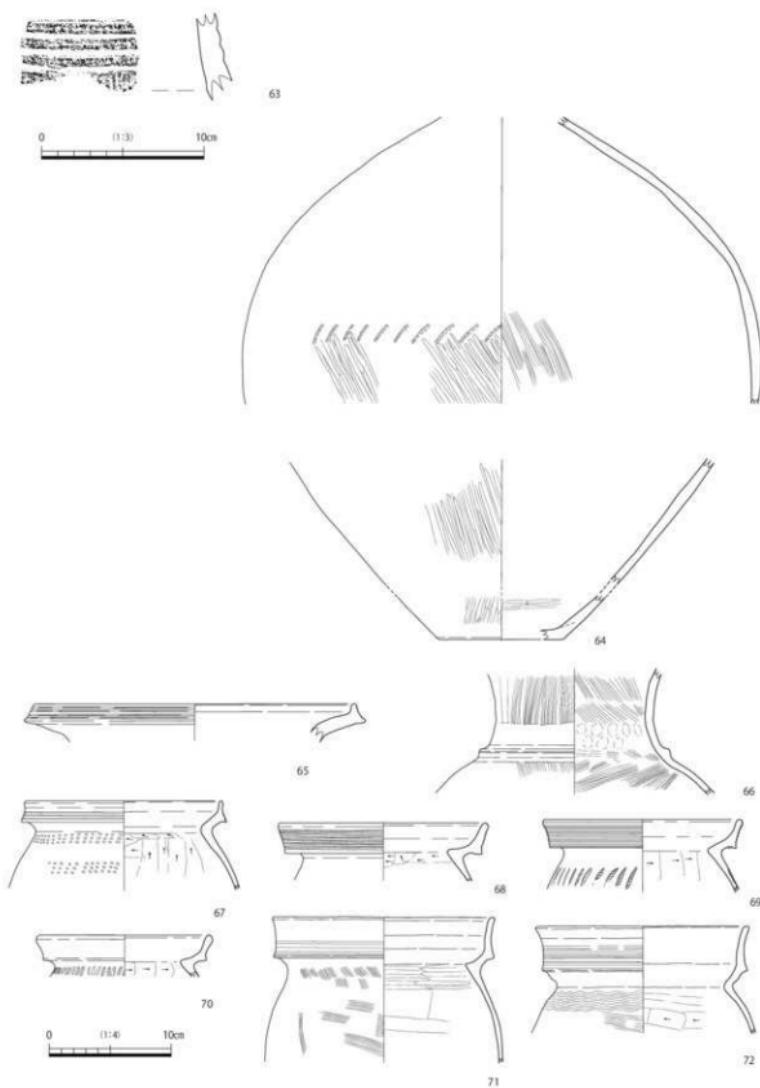
第61図 松林寺遺跡段状遺構3、土坑土器実測図



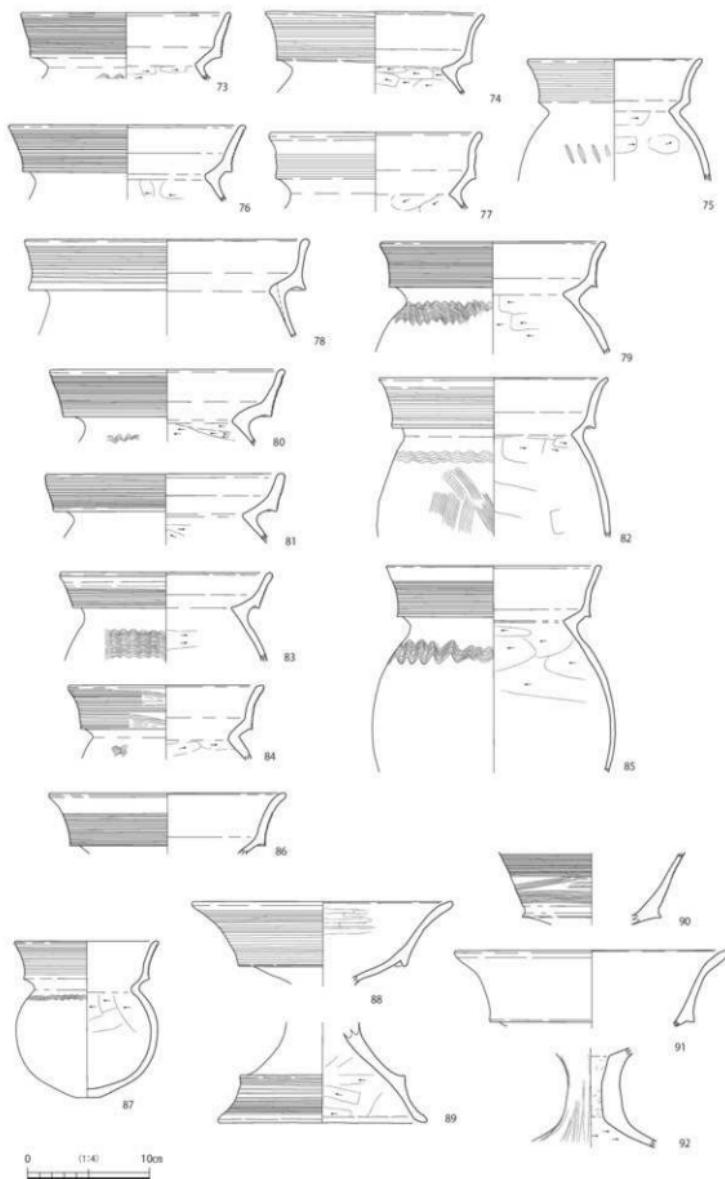
第62図 松林寺遺跡土器溜まり遺物実測図1



第63図 松林寺遺跡土器溜まり遺物実測図2



第64図 松林寺遺跡谷状地形遺物実測図1



第65図 松林寺遺跡谷状地形遺物実測図2

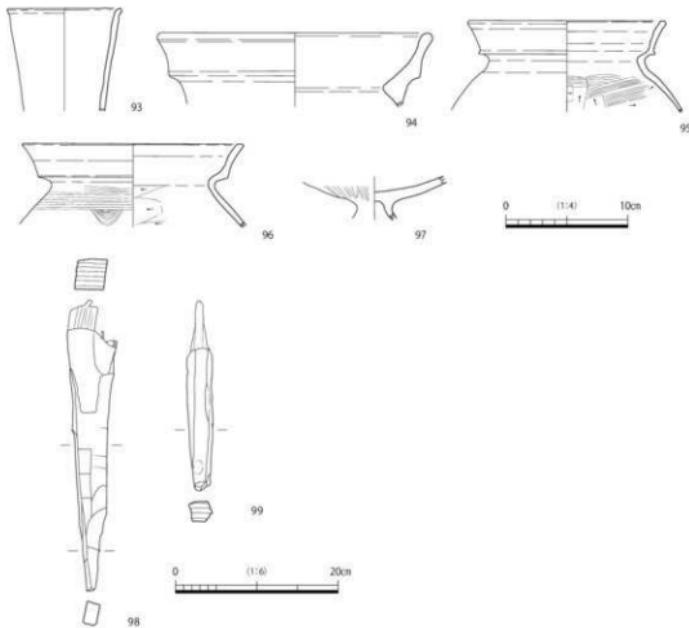
25、26は草田3期、27、28は草田5期、29、30は小谷3式以降と考えられる。

土坑（第61図32～34）32、33は弥生土器である。摩滅しているが口縁部外面に直線文があった可能性がある。口縁部はあまり外反しない。34は土師器の壺である。口縁部が大きく外反し、端部は下方へ垂れる。

32、33は草田3～4期、34は小谷3～4式と考えられる。

土器溜まり（第62図35～第63図62）35～46は弥生土器である。35の口縁部の貝殻直線文は、直線文1本の幅が広く、断面はU字である。36は頸部が厚い。口縁部は摩滅しているが、二段程度の波状文がある。外来系土器と考えられる。37～41は口縁部下の稜の突出がやや弱い。38の口縁部の上半分は摩滅のためナデ消しの有無は不明である。39～41は直線文の後にナデ消しをする。39の直線文1本の幅は狭く、断面はU字である。40の口縁部上半はナデにより強く屈曲する。41の直線文1本の幅は狭いことから、原体は貝殻でないと考えられる。胴部は被熱により変質する。口縁部が薄いが、胎土の特徴から弥生土器とした。42、43は口縁部が強く屈曲して長く、口縁部下の稜が突出する。42の貝殻直線文の断面は逆台形で、線同士の幅は広い。43も線同士の幅は広いが、直線文は狭く細い。44は胴部で、摩滅しているが内面はヘラケズリと考えられる。45は摩滅しているが、胎土から弥生土器と判断した。46は複合口縁の鉢で、稜は鈍い。これらの土器は、35、37、38、42、43は草田3期、39～41、45は草田3～4期と考えられる。

47～61は土師器である。47～49の口縁部下の稜は鈍く、口縁部の先端が尖り気味である。



第66図 松林寺遺跡谷状地形遺物実測図3

50はやや小型ではあるが全形がわかる。底部内面に指頭圧痕は見られない。口縁部外面にはヨコナデによる凹みがある。稜の突出は鈍い。胴部下半はやや厚くなる。胴部最大径付近と口縁部に煤が付着する。52の口縁部下の稜は下方へつまみ出す。53はやや肩の張った器形である。54は口縁部にヨコナデによる凹みがある。56は口縁部が大きく外反する。57は小型の甕である。口縁部がやや厚く、端部は丸く外へ屈曲する。口縁部下の稜は段状である。58は球形の胴部である。59、60は鼓形器台である。59は図上で復元した。61は肩が張り、口縁部は直線的で厚い。胴部のヨコハケの単位は細い。47～49は草田4期の可能性がある。50、51は草田4～5期、52～56は草田5期、57は草田6期、61は小谷3～4式と考えられる。

62は角礫で、被熱痕のある石である。

谷状地形（第64図63～第66図99） 63～92は弥生土器である。63は壺の頸部で、3条の凹線文がある。器壁が厚く、大型の壺になる。64は比較的広い範囲から出土した。胴部上半と底部付近の破片を同一個体と判断した。胴部最大径付近に列点文があり、外面はヘラミガキである。63、64は弥生時代中期にさかのぼる土器である。65は頸部から強く屈曲し、口縁端部は内側上方へ立ち上がる。後期前半の壺と考えられる。66は頸部から胴部上半の個体である。頸部と胴部の境に突帯がある。突帯の稜は鋭い。内外のハケは粗く、山陰の弥生土器のハケとは大きく異なる。ヘラケズリが確認できないことも特徴の一つである。北部九州の下大隈式と考えられる。67～86は甕である。その内67～70は口縁部が相対的に短いものである。67は口縁部が内傾して立ち上がる。肩部に二列の列点文がある。68の口縁部の貝殻直線文は若干上下する。70は小型の甕で、口縁部は厚くヨコナデである。71、72は口縁部が直立する。口縁部外面は直線文を一部ナデ消す。口縁部下の稜は水平に突出する。71は頸部内面の稜が鋭く突出し、ヨコヘラミガキ調整である。73～77は口縁部が相対的に長く、口縁部下の稜の突出が弱いものである。73の直線文は線の断面が逆台形で幅が細く、線同士の幅も狭いが、74、75は線同士の幅は広い。77は摩滅により、口縁部外面の文様は不鮮明である。78～86は口縁部下の稜が強く突出するものである。79、80の口縁部には貝殻直線文がある。79の原体は約1cm程度である。82は口縁部に17条の直線文があり、やや多い。直線文の幅は狭く、断面はU字である。83～86は口縁部の直線文を一部ナデ消す。83は口縁部の上方をナデ消す。84は上から見て時計回りに施文している。

87は鉢である。図上で復元した。口縁部の直線文は17条と多いが、肩部の波状文は3条である。

88～91は鼓形器台である。88は90に比べて受部が短いが、貝殻直線文は28条と多い。89は金気が付着して文様が不鮮明であるが、88よりも直線文の幅が広く、台部が短い。90の直線文は何度も文様をつけており、上下している。91は受部の長さは88とあまり変わらないが、摩滅により文様の有無が不明である。92は筒部が厚いことから古い特徴を指摘できる。90と92は赤彩の痕がある。

67は草田2期よりさかのぼる可能性がある。68～70、89、92は草田2期、73～82、87、88、90、91は草田3期、71、72、83～86はナデ消しがあることから草田3期後半と考えられる。

93～97は土師器である。93は長頸の壺である。胎土から土師器と判断した。外側へ開き気味の口縁部であり、口縁端部はわずかに外方へ折れる。94は口縁部が厚く、頸部内面に稜が残っていることから弥生土器の特徴を強く残すが、胎土から土師器と判断した。95は口縁端部が丸く、口縁部下の稜はつまみだすように突出する。肩部内面にはハケ状の工具の痕がある。96は口縁部

が厚く、口縁部下の稜は突出しない。口縁端部に面がある。95に比べて後出する。97は低脚環である。口縁を欠くが、口縁が大きく開くものである。

94は草田4期、95は草田6期、96は小谷3式、97は草田5～6期と考えられる。

98、99は木製品である。98は杭である。先端のみ残存していた。分割材で、方形に加工し、四方向から平坦に加工する。なお、他の杭は残りが悪く、取り上げた際に細片になってしまった。99は谷状地形から出土した施設材・器具材である。一端は劣化している。五方向から加工する。98、99ともに肉眼観察で針葉樹と判断した。

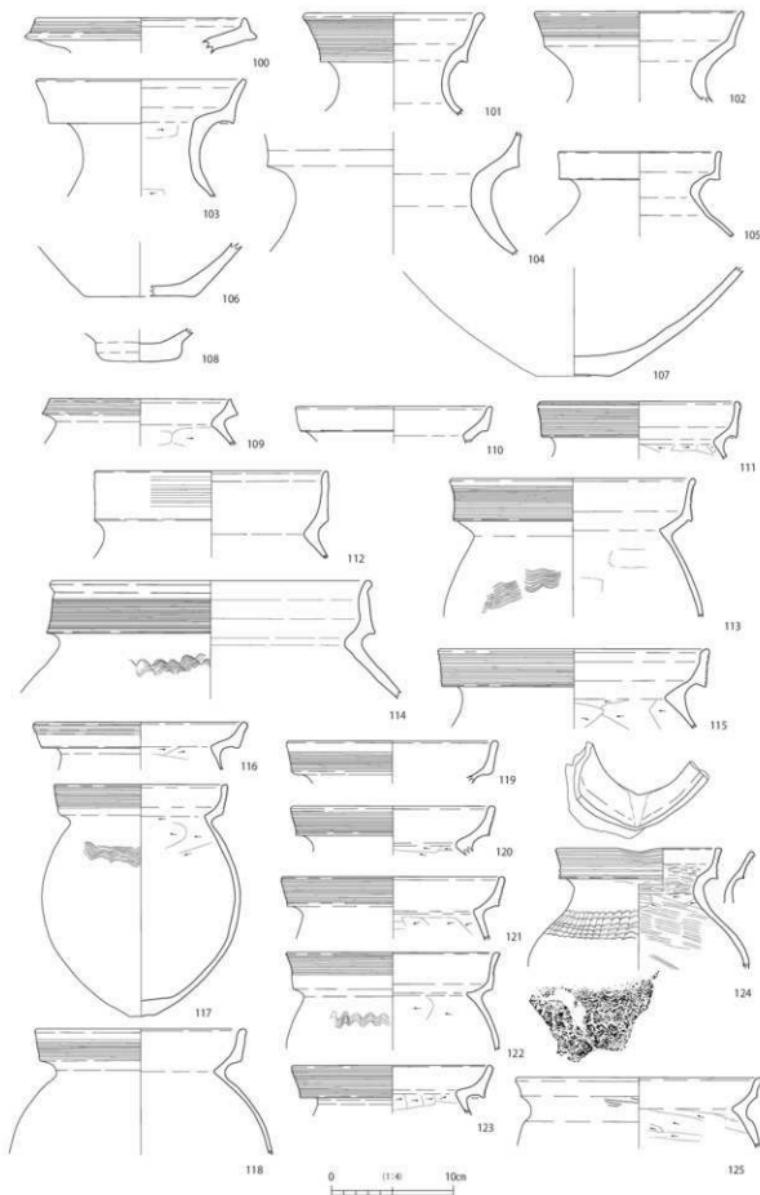
遺構に伴わない遺物（第67図100～第78図299） ここでは遺構には伴わない遺物のうち、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を最初に挙げる。

100～193は弥生土器である。100～108は壺である。100は口縁端部が内側上方へ立ち上がる。第64図65に似る。101、102は口縁部に直線文がある。103、104は摩滅しているが、本来は直線文があったと考えられる。105は口縁部が直立する。体部が薄く、胎土も細かく土師器に似る。106、107は底部である。106は胎土が細かい。108は底部が突出する。

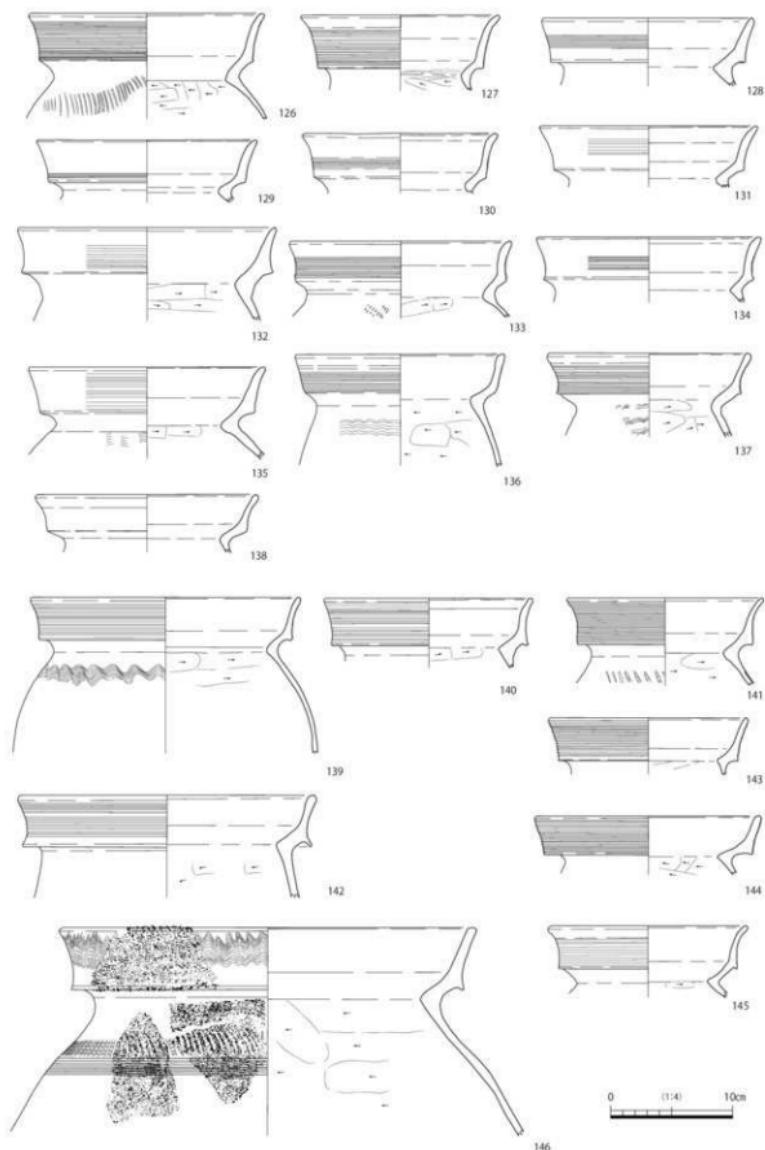
100は後期前半、101～104は草田3期、105は草田3期後半と考えられる。

109～166は甕である。109は口縁部が内傾する。頸部内面に稜がある。110～115は口縁が直立する。112は摩滅しており、現状で12条の直線文が確認できる。口縁端部が肥厚する。113は口縁部が下方にも伸びる。114は同一個体が散らばって出土した（第52図）。口縁端部が外側へ折れるように屈曲する。115の貝殻直線文は1cmあたり3条である。

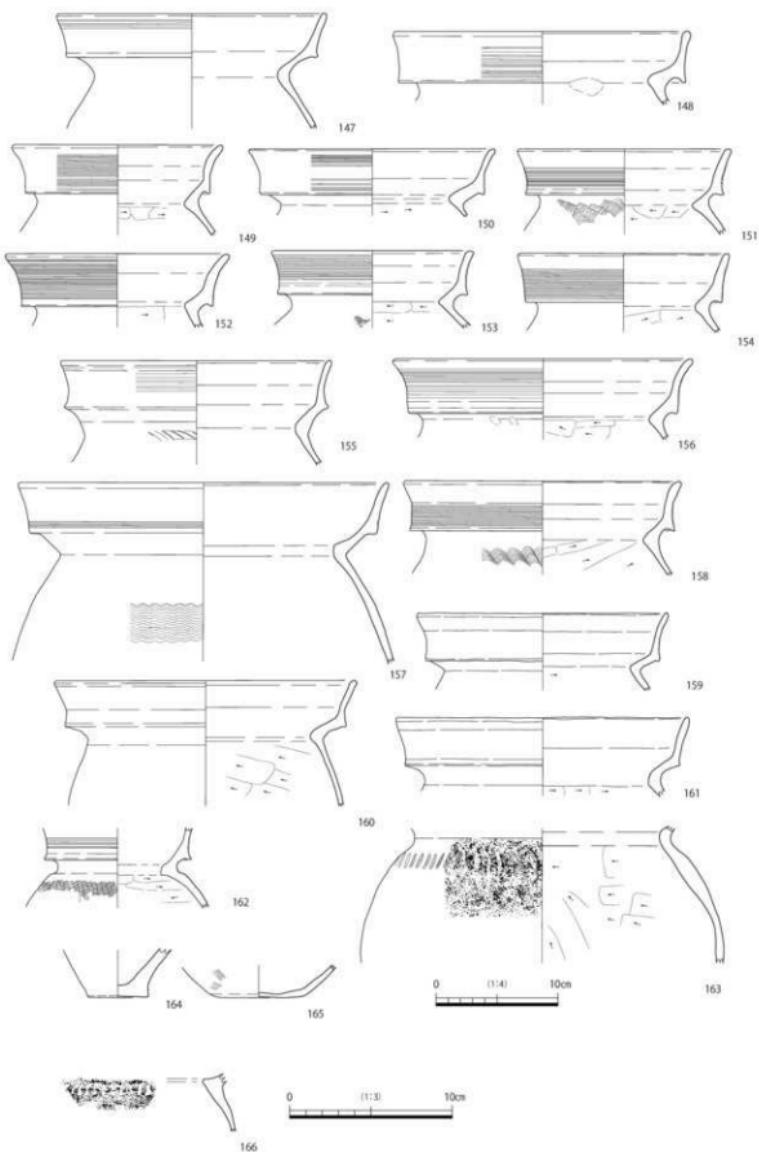
116～122は口縁部下の稜の突出が弱いものである。116は摩滅により口縁部下半分は不明で、3条の四線文が残る。117は図上で完形に復元した。胴部は球状で、不安定な平底である。120、121は直線文の一部をナデ消す。122は摩滅により口縁部下半分は不明で、ナデ消しの有無は不明である。124は口縁部の一部を曲げて注口状にしている。上から見て方形を意識しているのかもしれない。頸部内面はヘラミガキ、胴部内面をヘラケズリではなく貝殻により調整しており、ハケメのように見える。125は口縁部が短く、外面はナデである。肩部に稜がある。126～138は口縁部が相対的に長く、口縁部下の稜の突出が弱いものである。126の肩部の貝殻列点文は、列点文の位置が乱れている。127の口縁端部はつまんで折り曲げるよう外反する。頸部内面はヨコヘラミガキがある。128～135は口縁部が摩滅しており、直線文が一部しか残っていない。137の頸部には肩部の波状文の工具が当たった痕がある。138は摩滅のため文様の有無は不明である。139～162は口縁部下の稜が強く突出するものである。139～141は直線文の条数が多い。139の直線文は1cmあたり7条と狭く、線の幅と線同士の間隔は同じ程度である。141も直線文の幅が狭い。142は肩部の張らない器形で、口縁端部が肥厚する。143、144は貝殻直線文で、1cmあたり5条程度である。145は口縁端部が強く屈曲する。146は大型の甕である。口縁部の上半に貝殻波状文があり、肩部には貝殻列点文の下に貝殻直線文がある。147～150、155、157は口縁部が摩滅しており、直線文が一部しか残っていない。151は頸部に近いところに二列の波状文がある。152の直線文は細いがはっきりしており、原体は貝殻でないと考えられる。154の口縁部内面は薄く煤がついたように変色している。155は口縁端部のすぐ下が凹線上に凹む。157はやや大型の甕で、頸部が強く屈曲する。158は直線文の後、口縁部の中程をナデ消すようにヨコナデがある。肩部の波状文は強く施されたようで、痕がはっきり残っている。159～161



第67図 松林寺遺跡弥生土器実測図1



第68図 松林寺遺跡弥生土器実測図2



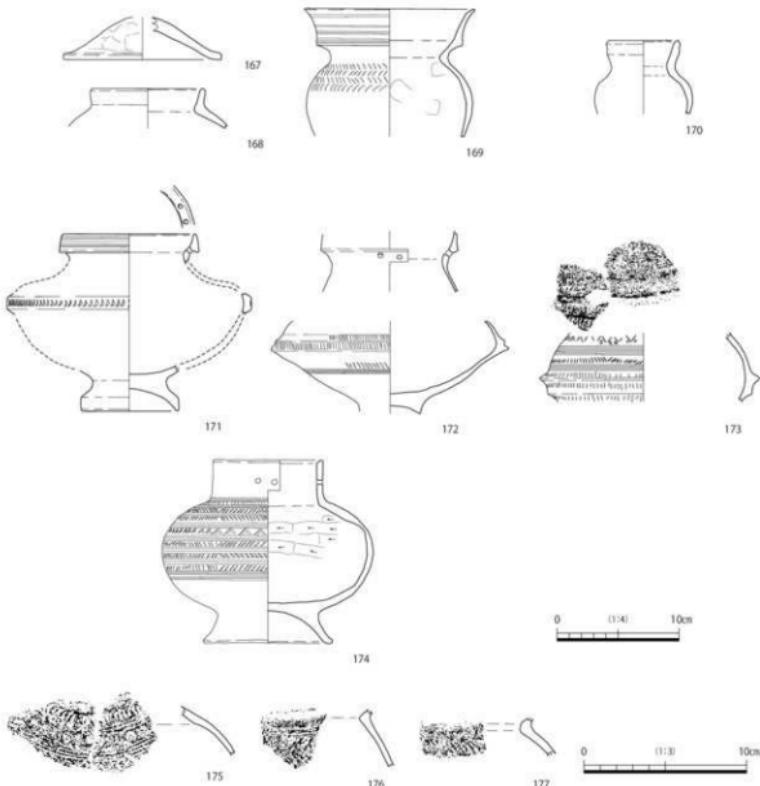
第69図 松林寺遺跡弥生土器実測図3

は口縁部外面が無文である。159、160は摩滅しており文様は確認できなかった。161は胎土が砂質で、弥生土器に多い灰白色ではなく土師器に多い黄橙色であり、土師器に近い特徴がある。

162は口縁部上半を欠く小型の甕である。口縁部下の稜は強く突出する。163は甕の胸部上半である。厚手で肩部に貝殻列点文がある。164は平底で、被熱の痕がある。165は突出気味の平底である。指頭圧痕は確認できなかった。166は頸部に列点文があり、内面の稜ははっきりしている。

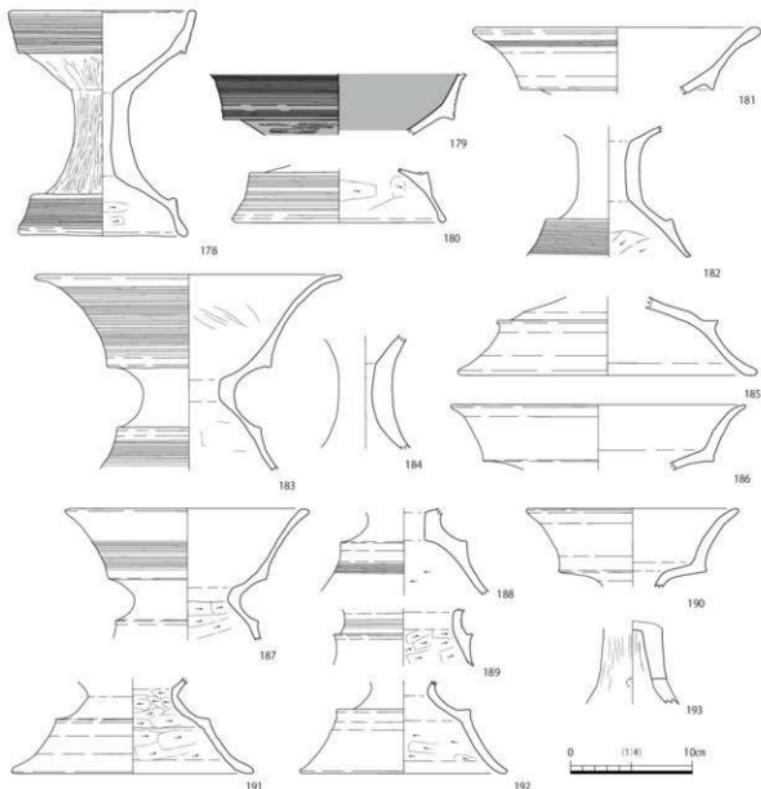
109、110、116は草田1期、117～125は草田2期、111～115、126～145、147～157は草田3期、146、158～162は草田3期後半、166は後期前半代である。

167は蓋である。煤が付着していないこと、外面の調整がヘラミガキであることから、壺や鉢の蓋と考えられる。168は短頸の鉢、169の肩部には貝殻により二列の羽状文がある。摩滅しており、口縁部の直線文の原体が羽状文と同じかどうかは判断できなかった。口縁部下の稜の突出は

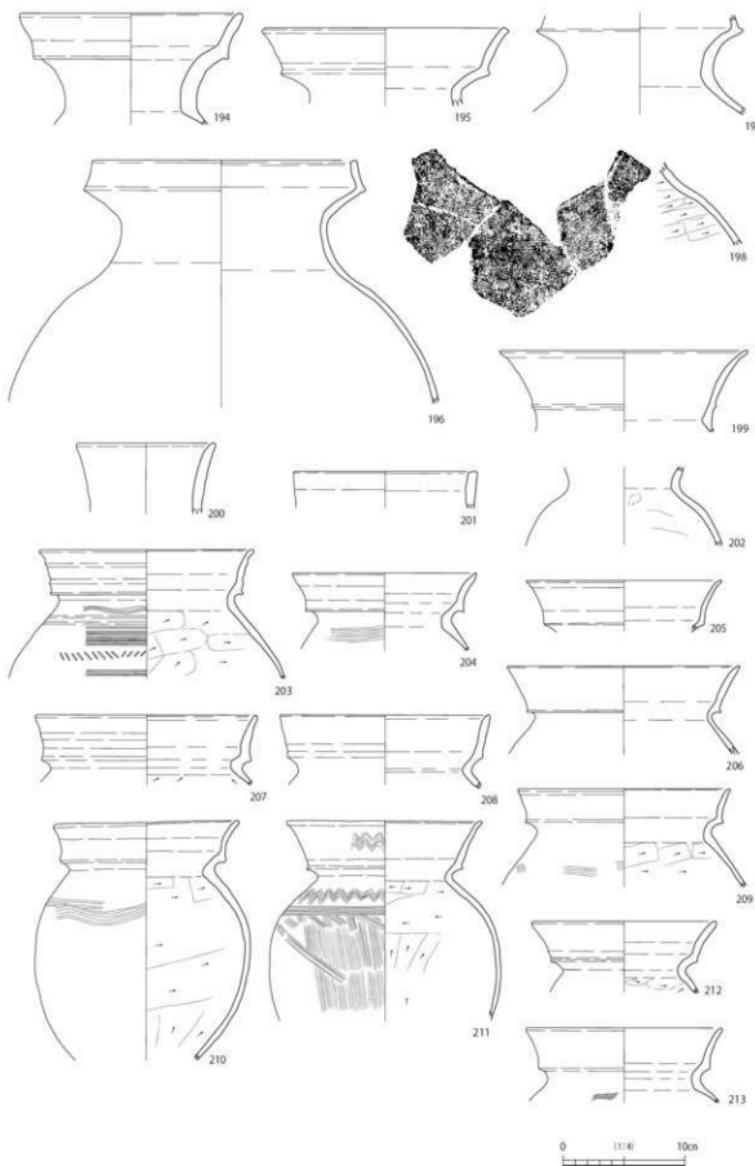


第70図 松林寺遺跡弥生土器実測図4

弱い。胸部最大径より下に薄く煤が付着している。170は小型の鉢である。171～175は台付飾壺である。171は出土時に胸部から下が残っていたが、取り上げ時に細片になってしまった。胸部の突帯の上には逆C字の刺突文がある。台部には直線文があったと考えられるが、摩滅している。172は胴部下半が残っていた。摩滅のため、頭部はもっと屈曲する可能性がある。胴部のM字状の突帯は、下のほうが突出する。突帯の上には爪状の刺突文があり、突帯の下にはそれより太い列点文と直線文がある。173も摩滅が著しいが赤彩の跡が残る。胴部上半から下へ、鋸歯文、直線文、列点文、直線文があり、突帯の上にも列点文がある。突帯の上のほうが突出する。174は口縁部が直立する。張り出した胴部外面の全面に綾杉文や向かい合わせの列点文、鋸歯文を施文する。胴部内面や台部外面には金気が厚く付着し、土圧により歪んでいる。175は破片ではあるが、胴部上半から下へ列点文、直線文、同心円のスタンプ文、直線文、鋸歯文がある。176、177は肩部に貝殻羽状文がある。



第71図 松林寺遺跡弥生土器実測図5



第72図 松林寺遺跡土師器実測図1

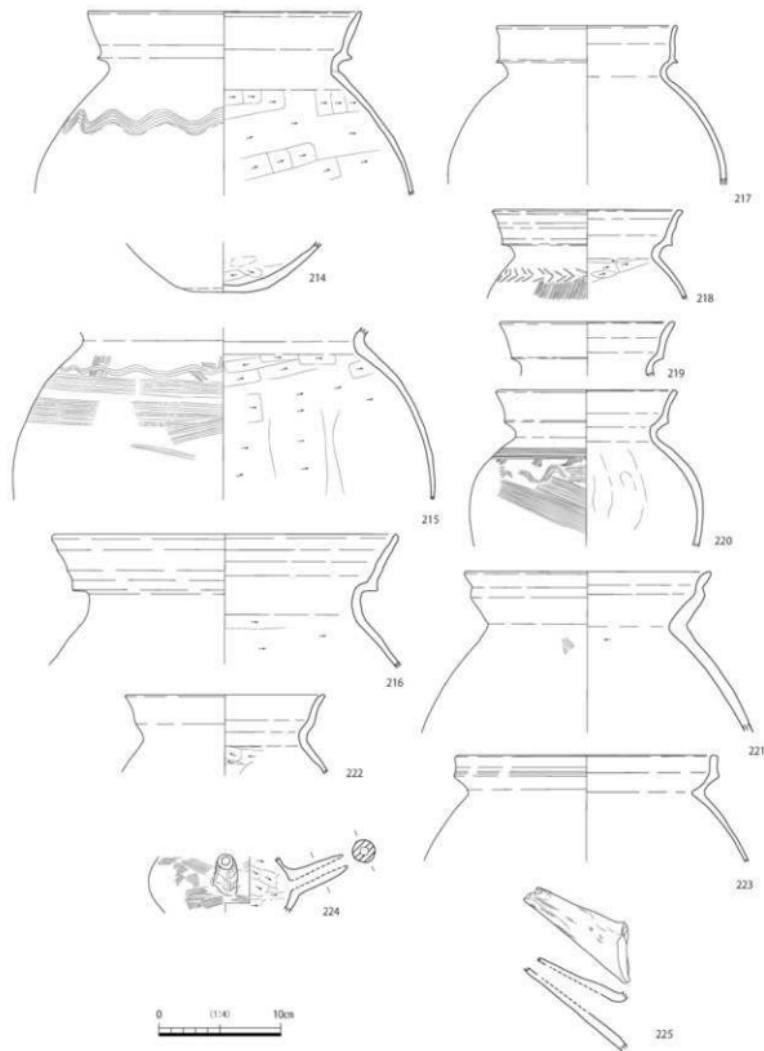
なお、松林寺遺跡の下方に位置する大國地頭所遺跡では2点の台付装飾壺が出土しており、松林寺遺跡と合わせて7点の台付装飾壺が出土していることになる。

178～192は鼓形器台である。178は筒部が長く細い。筒部の上位に稜があり、そこから直線的に受部へ至る。受部と台部の外面に櫛描直線文がある。179には赤彩が残る。180の台部から筒部へのびる部分は薄い。181は摩滅により口縁部に近い部分しか直線文を確認できない。内面は黒く変色している部分がある。182は筒部が細く長い。183は受部が大きく開き、筒部は178や182に比べて太く短い。直線文の原体幅は約1.2cm/7条である。口縁端部と台部上の稜の部分のナデ調整をしているため、直線文が一部ナデ消される。184は筒部である。内面に剥離痕を確認できなかったことから器台と判断した。185は台部が大きく開き、台部上の稲が強く突出する。高環形器台の可能性がある。186は受部である。摩滅が著しい。187、188は当初は台部全面に直線文があったと考えられる。187は受部の一部が被熱により変色している。直線文は水平ではないようだ。189は筒部に沈線があるようだ。191、192は灰白色で胎土はきめ細かく、土師器に似る。192は台部外面のヨコナデがよく残っている。193は高环である。円形の透かし孔が四方向にあると考えられる。頂部は粘土で充填されている。外面は丁寧なヘラミガキである。この他に高环と考えられる破片はほとんど無い。

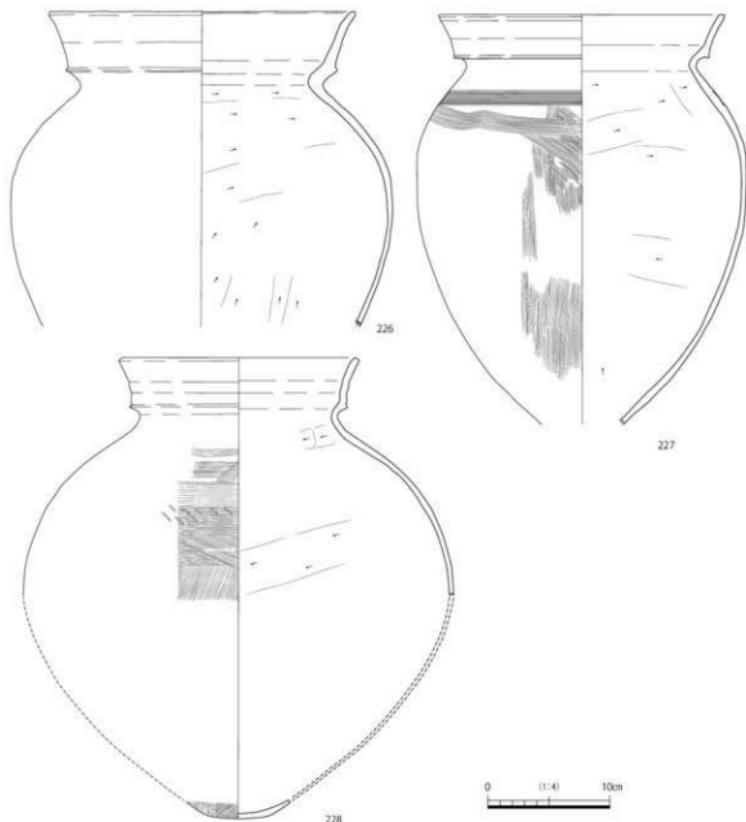
178～180は草田2期、182、187、188は草田3期、183、190～192は草田3期後半、184、193は後期前半代と考えられる。

194～242、244～261は古墳時代前期の土師器である。194～202は壺である。194は口縁部や頸部が厚く、口縁部は中程で屈曲する。口縁端部は丸く、口縁部下の稜は鋭く突出する。195は口縁部下の稜は鈍く、口縁端部は面を持つ。196は図上で口縁部から胴部までつなげた。口縁部は内側へ傾き、肥厚する。197は口縁部を欠くが、内側へ傾く。198は肩部に直線文と波状文があるが、口縁部に近い側から施文している。頸部は強くヨコナデしている。199は口縁部下の稜は低い。200は口縁部が開く直口の壺と考えられる。厚手である。201は短頸の壺の可能性がある。

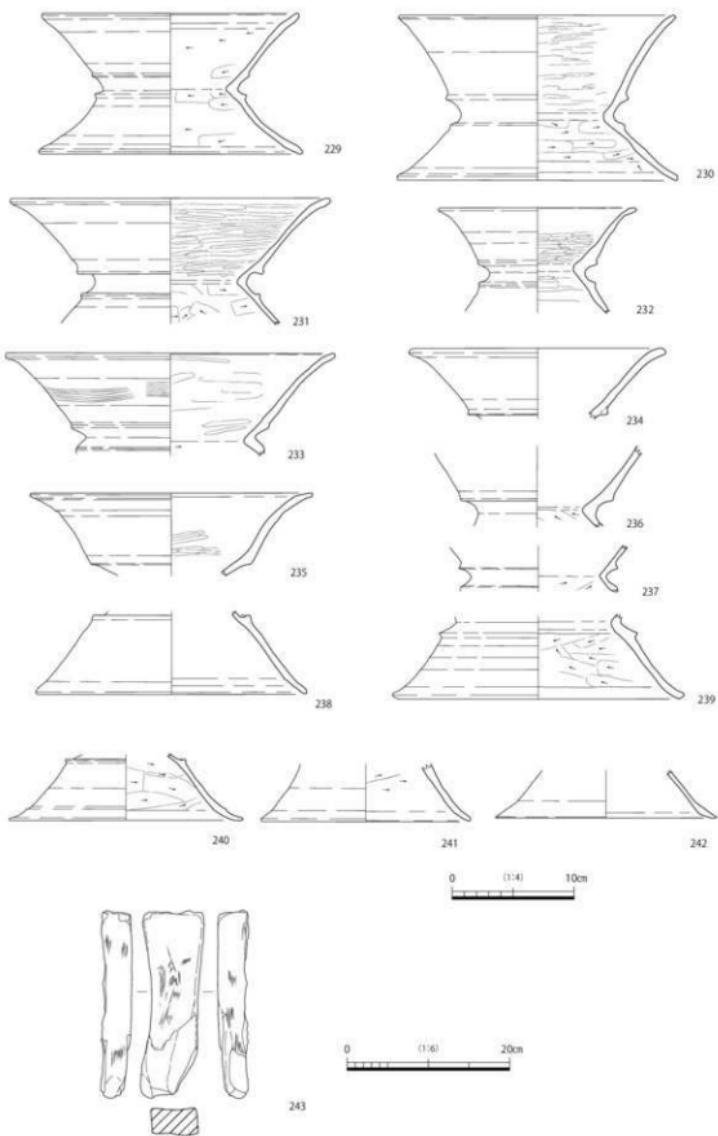
203～222は壺である。口縁部の特徴に基づいて配列した。203は口縁部外面のヨコナデが顕著で、ナデの単位を確認できる。口縁端部の下にもナデがあるので、口縁部が外側へ折れ曲がっているように見える。口縁部下の稜は突出するが、断面は丸い。頸部から肩部に文様があり、上から綱の波状文、直線文、向かい合わせの列点文、直線文がある。直線文や波状文の1本は幅が広い。204の口縁端部は尖り、口縁部下の稜は鋭く突出する。205は摩滅しているが口縁部は薄い。206の口縁端部は尖り、口縁部下の稜は斜め下方向へ突出する。口縁部はやや長い。207、208は口縁部が厚く、口縁部下の稜の突出は鈍い。ただ、208は摩滅による可能性がある。209は口縁部がやや短いが、口縁端部が丸い。210は口縁部が外反し、胴部は卵形である。口縁端部が丸く、口縁部下の稜は斜め下方に鈍く突出する。肩部に直線文があるが、水平ではなく一部波状文風になる。上から見て時計回りに施文する。胴部最大径より下に薄く煤が付着する。211は口縁部が直線的に外反し、胴部は球形に近い。口縁部下の稜の突出は鋭い。口縁部外面にピッチの狭い波状文があり、肩部には波状文と直線文がある。肩部から胴部最大径にかけて煤が付着する。212、213は口縁部が大きく外反する。214～216はやや大型の壺である。214の口縁端部は丸く、口縁部下の稜は水平方向に鋭く突出する。底部は突出気味の平底である。胴部片もあるが、口縁部や



第73図 松林寺遺跡土師器実測図2



第74図 松林寺遺跡土器実測図3



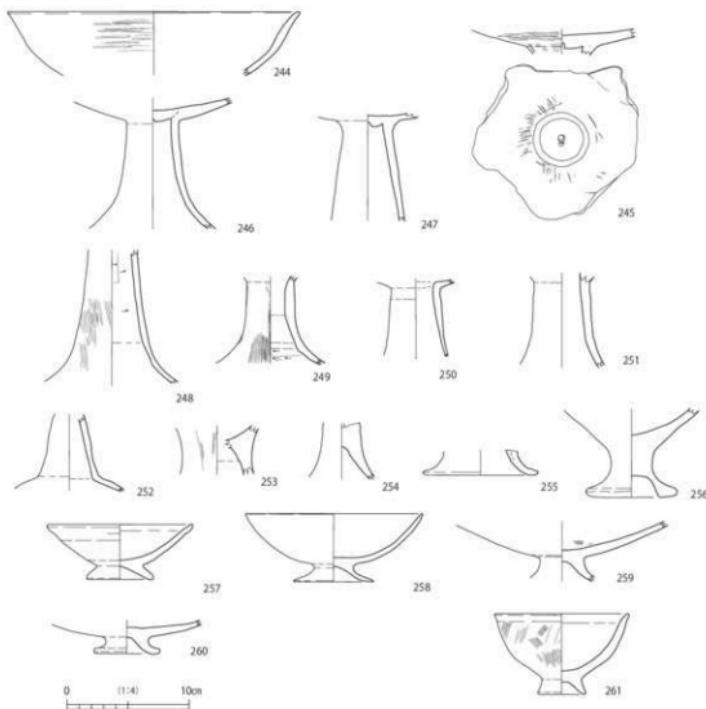
第75図 松林寺遺跡土師器実測図4

底部との接点はない。215は肩部に波状文がある。胴部の調整はヨコハケである。216の口縁部は直線的にのびる。口縁端部はやや角張り、口縁部下の稜は鋭く突出する。217は口縁部下の稜が水平方向へ突出する。218は口縁端部を外方へ丸く収める。肩部にヘラ描の羽状文がある。220は球状の胴部である。口縁端部には平坦面があり、口縁部下の稜の突出は純い。221～223は古墳時代中期の甕である。221は厚手で、頸部で強く屈曲する。短い口縁部の中程で外方へ屈曲し、退化した複合口縁である。222は複合口縁が緩い段状である。内面の調整は丁寧なヨコナデである。223は頸部内面の稜が鋭く突出する。口縁部は短く直立し、端部は丸い。胎土はやや粗く、弥生土器の可能性がある。

203～205は草田4期、206は草田4～5期、209～213は草田5期、214、216は草田5～6期、217、218は草田6期、219は草田7期、220は小谷3式、221～222は小谷4式以降と考えられる。

224、225は注口土器の注口部である。224は注口部がやや短い。胴部外面には一部煤が付着する。225は先端を欠損するが、注口部は長い。下半分に煤が付着する。

226～228は大型の甕である。やや胴部が張る。口縁部は直線的にのび、口縁端部は丸い。口



第76図 松林寺遺跡土師器実測図5

縁部下の稜の突出は鈍い。外面の頸部から胴部にかけて金気が付着する。227は肩部が張る。口縁部は直線的にのび、端部には面がある。肩部には直線文と緩い波状文がある。胴部外面に金気が付着する。228は図上で口縁部から胴部まで復元した。口縁部は外反し、口縁部外面にはヨコナデの稜が残る。口縁端部に破面がある。肩部の列点文は一部二列に重なっている。底部は平底で薄く、指頭圧痕はあまり顕著ではない。

226は大型にもかかわらず口縁端部が丸いことから草田4～5期、227は草田5～6期、228は草田5期以降と考えられる。

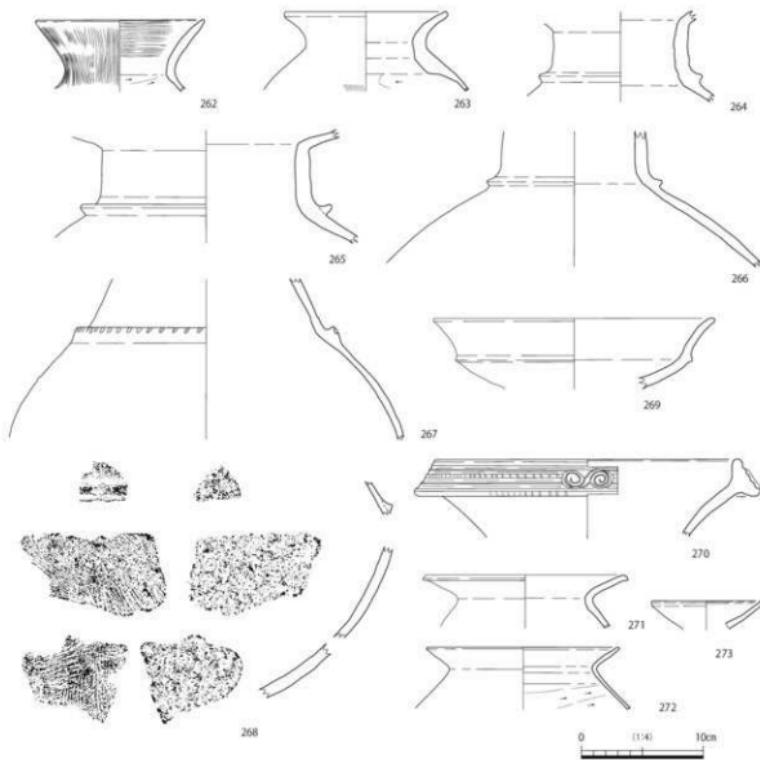
229～242は鼓形器台である。229は全形がわかるものである。受部は直線的にのび、台部は開く。筒部はやや短い。230は図上で復元した。受部に比べて台部が低い。229、230は稜の突出は鈍い。231も図上で復元した。受部内面のヘラミガキは単位が長い。232はやや小型である。233は受部外面に直線文がある。234の稜は鋭く突出する。238～242は台部である。238～240の台部外面の稜は鋭い。

243は砥石である。長方形で、三面を使用した。

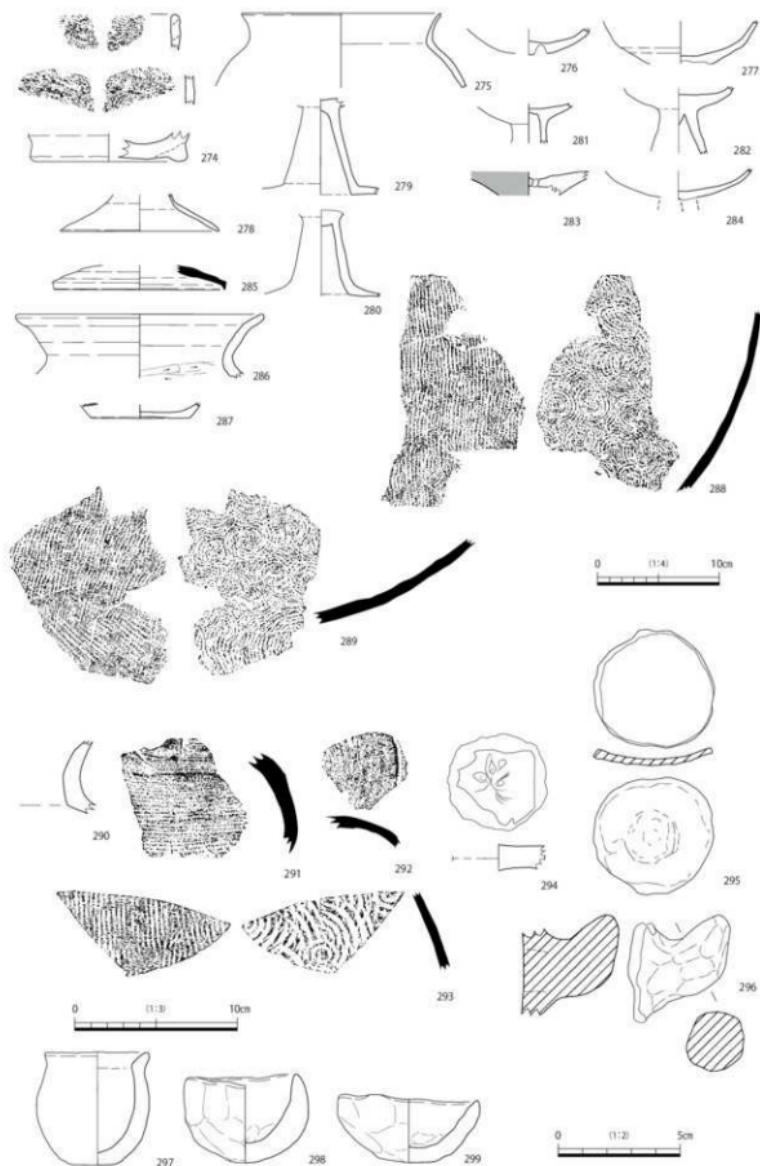
244～256は高坏である。244は摩滅しているが、外面の調整に細かいヨコヘラミガキがある。内面には煤が付着している。245は坏部の内面に直径5mmの穴が開いている。失敗したのか二度開けている。247にも確認できる。246～251は脚柱部で、最も細い部分で直径約4cm程度である。器壁は薄く、外面の調整はハケである。252は脚柱部の中位が膨らみ、脚部が強く屈曲する。253、254は脚柱部が残る。253は脚柱部が太い。254は脚柱部の上が剥離している。255は短い脚部が外反する。脚部の上端は剥離している。256は中実の脚柱部から直線的な坏部へのびるようである。脚部は内側へ肥厚する。胎土は他の土師器と同様の砂質であることから土師器と判断した。257～260は低脚坏である。257は坏部がわずかに湾曲する。口縁部の下にナデの稜がある。257のように小型で椀状のもの、259、260のように大きく口縁部が開くもの、258のようにその中間のもの、という三種類の低脚坏がそろっている。261は椀状の坏部で、脚部が短い。鉢の可能性がある。

鼓形器台、高坏の多くは草田5～6期と考えられる。252は小谷4式と考えられる。

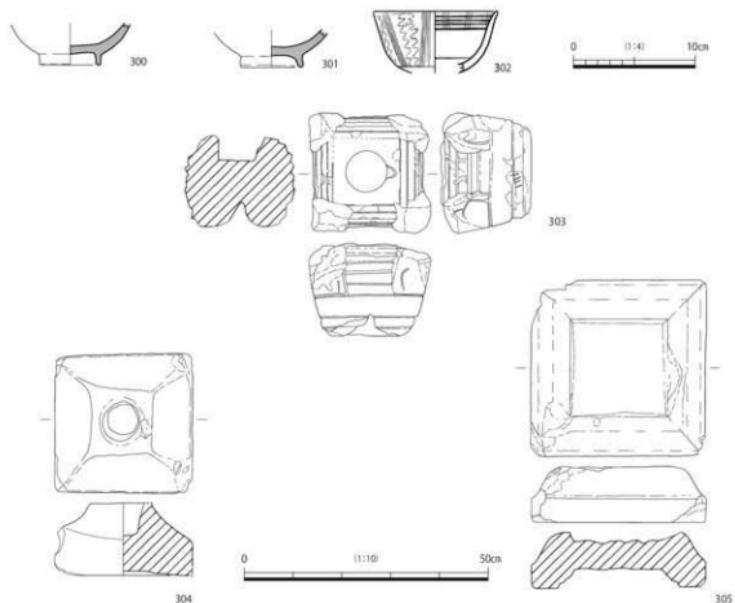
262～273は外来系土器である。262～270は弥生土器である。262は短頸の壺である。内外面をハケ調整する。263も短頸の壺である。これらは複合口縁ではないことから外来系土器と判断した。264～268は頸部または肩部に突帯のある壺である。264、265は頸部と胴部で大きく屈曲する。264の突帯の断面は太く丸い。265の口縁部内面に稜がある。肩部の突帯の上下で粘土の色が異なる。264と266は色調が浅黄橙色で胎土の特徴が似る。267は肩部に刻み目のある突帯がある。明赤褐色で胎土が他の土器と異なる。268は破片の点数は多いが部位を特定できる破片が少ない。内外面の調整はハケだが内面の剥落が著しい。肩部に断面三角形の突帯があるが、突帯には色の異なる粘土を使っている。269は坏部外面に稜があり、口縁部へ向けて外反する。胎土はきめ細かく砂質で、弥生土器より土師器に近い。器形の特徴に加えて弥生土器には高坏が少ないとから外來系土器と判断した。270は胴部から直線的に口縁部へのびる。口縁部は上下に拡張し、4条の凹線文がある。凹線文の間と口縁部下端に列点文がある。さらに口縁部にはS字状の連続渦文を描いた粘土を貼る。橙色の色調で胎土が他の土器と異なる。壺ではなく器台と考えられる。



第77図 松林寺遺跡外來系土器実測図



第78図 松林寺遺跡遺構外遺物実測図



第79図 松林寺遺跡2区遺物実測図



写真8 1区土器出土状況 (210)

264～268は北部九州系の壺である。269は北部九州系の高环であり、下大限式の壺に伴うと考えられる。270は似た特徴の土器として、出雲市西谷3号墓第1主体や第4主体の「高环形器台」がある（出雲弥生の森博物館編2015、72-64、96-149、150、95-152）。これらの土器は口縁部を拡張したり円形浮文を貼る、という特徴は共通するが、口縁部に列点文がある点や胴部の器形が異なる。

271～273は土師器である。271、272はく字口縁の甕である。271は口縁部が直線的で、口縁端部には面があり下方へ下がる。272も口縁部が直線的で、口縁端部はわずかに内湾する。273は小型器台である。摩滅により内外の調整は不明であるが、口縁端部は上方へつまみ上げる。脚部との接合部が剥離している。

274～299は遺構と関連が薄い時期の遺物を挙げる。

274は縄文土器である。口縁部、胴部、底部の破片を掲載した。内外面の調整はナデであるが、胴部のナデは内面と外面で異なる。底部は上げ底である。275～284は古墳時代中期～後期の土師器である。275の口縁部はつまみだすように細くなる。276～284は高环である。276、277の环部の底には脚部との接合部がよくわかる。276は环部に脚部をそのまま差し込むもので、脚部の跡が残る。277は环部の底に剥離跡があることから、环部と脚部を接合する際に脚部の周囲に粘土を巻き付けるように固定したと考えられる。278は脚部の中ほどで屈曲する。279、280は直線的な脚柱部から屈曲する。279は脚部の頂部が环部の底になることから、脚部の両側に环部がつく。一方280は脚部の頂部は环部との接合部になっている。282は脚部内面の粘土が突出する。283は环部の底を粘土で充填しているが、その中央ではなく偏ったところに下からの孔があいている。この孔は环部を貫通している。284は环部の底に穴があいている。

285～293は奈良・平安時代の土器である。285は須恵器の蓋である。口縁端部は下方へ折り曲げる。286は土師器の甕である。口縁部が外反し、口縁端部はさらに屈曲する。287は土師器の环である。288、289は甕である。同一個体と考えられるが接点はない。290は図示できていないが外面の調整はタテハケである。291の外面の調整はカキメである。292の天井部は回転ヘラケズリである。294は青磁碗D類である。周囲を打ち欠いて円盤状に成形している。294は厚さ5mm前後の円盤状の土製品である。高环の环部が剥離したもの可能性がある。296は瓶の取っ手である。取っ手中ほどで屈曲する。297～299は手捏ね土器である。297は丁寧に成形し、小型の鉢のようである。298、299は厚手である。

2区出土遺物（第79図300～305） 300～302は陶磁器である。300、301は肥前系陶器の呉器手碗である。置付けは無釉である。17世紀末～18世紀前半。302は肥前系磁器の碗である。1850～1860年代である。

303～305は石造物である。303は宝篋印塔の笠部である。隅飾は欠損する。屋根は下位に2段、上位に5段の段級を彫り出す。上位には相輪を差し込むためのぼぞ穴が空く。石列に転用されていた。室町時代にさかのぼる可能性がある。304は五輪塔の火輪である。軒の線はわずかに湾曲する。表土から出土した。305は灯籠である。石列に転用されていた。石材は、303、304が白色凝灰岩、305が福光石である。

第4節 小結

1. 遺跡・遺構について

松林寺遺跡の調査では、1区で弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物1、柵1、段状遺構3、土坑1、土器埋設遺構1を、2区で江戸時代の石列と階段を確認した。竪穴建物を確認できなかったが、これは斜面が急なうえに地すべりが起きやすい地盤であり、居住には不適当な場所であったことによると考えられる。潮川を挟んだ対岸に位置する庵寺古墳群では、弥生時代後期前葉の遺構を確認している。丘陵斜面に竪穴建物などの居住域、作業小屋や納屋などの作業場、露天の作業場や見張り台など広場的空間が分節的に配置されている可能性が指摘されており、松林寺遺跡の調査区周辺は作業場として利用されていたと考えられる。斜面下方に位置する大國地頭所遺跡では弥生時代後葉～古墳時代前期中葉の建物跡が確認されており、居住域は低地に位置する大國地頭所遺跡にあった可能性がある。また、谷状地形から土器が出土したことから、遺跡は標高のやや高い部分、調査区の北東側にも広がる可能性がある。

土坑がやや離れた標高40.5mのところに位置しているが、段状遺構は段状遺構1、2と段状遺構3の上下二段程度に築かれたと想定できる。標高29mより下位では遺構が確認できなかった。試掘調査でもこの部分では遺構が確認できなかったことから、遺構の広がりは薄いと考えられる。

遺構の継続時期を以下にまとめる。

段状遺構1 草田3(?)期～草田5/6期

段状遺構2 草田5～6期

段状遺構3 草田3期～小谷3式

土器埋設遺構 草田5期

土坑 草田3期～小谷3/4式

土器溜まり 草田3期～小谷3/4式

谷状地形 弥生中期後葉～草田6期

遺構に伴わない土器 草田2期～小谷4式以降

掘立柱建物、柵（土器出土せず：草田3期～6期？）

松林寺遺跡は弥生時代中期後葉から始まる。この時期から草田2期までは土器の出土量が少ないとから、遺跡周辺での活動はあまり盛んでなかったと考えられる。谷状地形から出土した土器は、元々は調査区外の上方で使用されたものと考えられ、標高40m以上の斜面上方にこの時期の遺構が広がっていた可能性がある。

草田3期になり、段状遺構や土坑、土器溜まりが築かれる。土器は出土していないが、掘立柱建物や柵もこの時期に築かれたと考えられる。その後、草田5期には掘立柱建物が廃棄され、土器埋設遺構が築かれる。段状遺構も上方に作り直すと考えられる。その後、小谷3～4式の時期には土坑や段状遺構がやや上方に築かれる。土器溜まりはこの段階まで続くと考えられる。その後遺構は築かれず、松林寺遺跡での活動は低調になる。古墳時代中期以降の土器がC2グリッドでやや多く出土するほか、須恵器や古代の土師器がB1、B2、C2グリッドで散見され、標高の低いところでわずかながら活動があったと考えられる。

この様相を大國地頭所遺跡と比較すると、弥生時代中期後葉に量は少ないものの土器の出土が見

られる。塙町式土器に類似した土器も出土する。弥生時代後期にも遺跡は継続する。そして草田3期に土器の出土量が増え、土器群が形成される。平地式または竪穴建物と考えられる弧状の溝や柱穴、土坑などが築かれ始める。その後も遺跡は継続し、特に小谷2~3式の土器が多い。大国地頭所遺跡は古墳時代中期まで続いた後、一度古墳時代後期後葉まで断絶があるが、遺構や遺物のピークは松林寺遺跡と一致しており、同じ遺跡の丘陵部と平地部ということが可能である。

土器埋設遺構は類例が乏しいが、江津市都治町高津遺跡の「土器棺墓01」は楕円形の土坑を約10cm掘りくぼめ、壺を合わせ口にしている（江津市教育委員会編2005）。「竪穴住居08・09」のすぐ脇に位置している。報告書では「土器棺墓」としているが、竪穴建物が集中する居住域の中にあり、遺構のすぐ脇に位置すること、土器の時期がほぼ同時期であることから、松林寺遺跡の土器埋設遺構と似た特徴がある。

2. 遺物について

土器の出土量では、弥生土器と古墳時代前期の土師器で全体の9割を超える。弥生土器と古墳時代前期の土師器では、重量は弥生土器が多い一方、点数は土師器の方が多い。これは、弥生土器には器壁が厚いものが多いのに対し、土師器は器壁が薄いことに因る。弥生土器は7割~9割が壺で、壺は1~2割、鼓形器台は1割以下、高环は数点という組成になり、この時期における土器組成としては一般的である。古墳時代前期の土師器は、壺、鼓形器台が5%から1割未満、高环と低脚环を合わせて5%前後、壺が7~8割という組成である。

なお、前述したように松林寺遺跡の弥生土器と土師器は、胎土に含む鉱物の有無から破片であっても弥生土器と土師器を区別することができた。

土器以外の遺物は少なく、砥石や敲石が数点出土した。鉄器は出土しなかった。

弥生土器の壺における口縁部の形態は、最も多いものがIIBb1類で、約4割を超える。次に多いのはIIAb1類、IIBa1類で、それぞれ1割前後である。口縁部が内傾・直立するものは全体の5%前後で、口縁部が外反するものがほとんどであった。また、口縁部下の稜の突出が弱いa類は全体の1/4前後、口縁部に文様のあるものは8割を超える。文様をナデ消すものや無文のものは約15%であった。これらの特徴からも、松林寺遺跡の弥生土器の時期は草田2期が少量あり、草田3~4期が中心であるとの傍証となる。

弥生土器の文様では、壺や甕の口縁部に櫛や貝殻による直線文があり、山陰の特徴を示す。その中で口縁部に波状文があるもの（146）は、近隣の遺跡では美郷町沖丈遺跡で出土している（邑智町教育委員会編2001、49-67、205-66）。また、鼓形器台178のように、受部や台部が短い草田2期の特徴が後の時期にも残るようで、183のような典型的な草田3期の特徴があるものは少ない。口縁部をゆがめて注口状にする甕124は、他に例を見ない。

古墳時代前期の土師器では、鼓形器台の筒部が短く、内面の稜の高さが低いものが多い。時期が下る特徴と見なすことができるが、大国地頭所遺跡でもこの傾向があるので、この地域の特徴の可能性がある。

台付装飾壺は5点を図示した。大国地頭所遺跡でも2点出土しており、石見地域では出土点数が多い遺跡になる。なお、台付装飾壺は（松井2013）に詳しいが、石見地域では江津市高津遺跡、大田市川合遺跡で出土している。

外来系土器は弥生土器と古墳時代前期の土師器ともに存在する。弥生土器では土器溜まり（36）、

谷状地形(66)、包含層(262～270)がある。このうち最も多いのは、北部九州系の壺66、264～268である。全体の器形がわかるものはないが、264～266は頸部と胴部の境に1条の太い突帯があり、267、268から肩部にも突帯があるものがある。器形は豊前から長門にかけての地域の特徴に似るものである。内外の調整は粗いハケである。66、264～266は浅黄橙色、267、268は橙色の胎土であり、内面のハケ調整とあわせて胴部片でも区別できた。66は内傾する複合口縁の器高35cm前後の壺、264～268はそれよりも大型の壺と考えられる。これらの土器は北部九州の下大隈式新段階に相当すると考えられる(常松2002)。このうち265は胴部と頸部で大きく屈曲することから、単純口縁で時期がさかのぼる可能性がある。高壺269は壺部外面に稜があり、そこから外反して口縁へ至ることから、北部九州の下大隈式新段階から北部九州の「IA期」や北九州市域の1期にかかる段階の高壺と考えられる(久住1999、常松2002、中村2017)。

短頸の壺262、263は胎土が264～266に似る。系譜は不明であるが、山陰以外の影響を受けた外来系土器と考えられる。36は口縁部に2段以上の波状文があることから、山陰の土器とは考えにくく、外来系土器と考えられる。器台270は特徴に加えて胎土も異なる土器である。近畿北部系土器の可能性があるが、系譜は不明である。

古墳時代前期の壺271、272は、中四国地方に多い「布留形壺」であり(次山1997)、遺跡での破片点数は22点であった。大国地頭所遺跡でも出土しているが、草田7期～小谷3式の幅の中におさまると考えられる。この特徴を持つ壺は出雲東部では少なく、出雲市古志本郷遺跡や下古志遺跡など出雲西部の遺跡で多く見られる。小型器台273は271、272に伴う時期と考えられる。

弥生土器や古墳時代前期の土師器の特徴は、山陰の特徴を示すが、台付装飾壺や「く」字口縁壺の存在、外来系土器の特徴から、隣接する出雲西部地域との交流の濃さがうかがえる。土器の出土量からみて、松林寺遺跡は大国地頭所遺跡とあわせて弥生時代後期～古墳時代前期の仁万平野における中心的な集落遺跡ということができるが、その背景の一つには出雲西部地域との交流の濃さがあると考えられる。

第7表 松林寺遺跡弥生土器発数量表

遺分類	重量(g)	点数	重量比	点数比
IIAa1	3296.17	58	7.3%	8.0%
IIAa3	284.72	8	0.6%	1.1%
IIAa-	131.66	1	0.3%	0.1%
IIAb1	4142.20	116	9.2%	16.1%
IIAb2	83.72	3	0.2%	0.4%
IIAb3	750.32	29	1.7%	4.0%
IIBa1	6050.40	64	13.5%	8.9%
IIBa2	981.10	6	2.2%	0.8%
IIBa3	340.36	9	0.8%	1.2%
IIBa-	155.79	2	0.3%	0.3%
IIBb1	19236.63	333	42.9%	46.1%
IIBb2	962.94	11	2.1%	1.5%
IIBb3	1665.44	35	3.7%	4.8%
IIBb-	528.83	4	1.2%	0.6%
I--	474.31	17	1.1%	2.4%
IAa-	298.37	3	0.7%	0.4%
IAa1	190.85	4	0.4%	0.6%
IAb1	297.40	3	0.7%	0.4%
IAa2	33.65	1	0.1%	0.1%
IBa1	172.40	1	0.4%	0.1%
IBb1	574.73	2	1.3%	0.3%
IBb2	1090.52	2	2.4%	0.3%
IBb-	288.80	2	0.6%	0.3%
大型 IIb1	501.22	1	1.1%	0.1%
大型 IIb1	495.31	3	1.1%	0.4%
大型 IIb1	1664.24	3	3.7%	0.4%
大型 IIb3	190.95	1	0.4%	0.1%
		44883.03	722	

3. 2区について

遺構としては南北にのびる石列を確認した。遺物は少なかったが、17世紀末から19世紀中頃の土器を確認したほか、宝篋印塔や五輪塔、灯籠が出土した。また、2区に隣接する墓地では18世紀中頃から19世紀末の墓石を確認した。2区出土遺物の時期と調和的である。

また、2区に隣接する土地には「(浄土宗) 松林庵」があったといわれている。北西側の丘陵斜面に平坦面や墓石があることから、「松林庵」の南端を調査したことになる。

【参考文献】

- 出雲弥生の森博物館編 2015『西谷3号墓発掘調査報告書』、島根大学考古学研究室調査報告第14冊、出雲弥生の森博物館研究紀要第5集
- 邑智町教育委員会編 2001『沖丈遺跡 主要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、邑智町教育委員会
- 鹿島町教育委員会編 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』、鹿島町教育委員会
- 江津市教育委員会編 2005『高津遺跡』都治地区県営は場整備事業に伴う発掘調査報告書II、江津市教育委員会
- 島根県教育委員会編 2014『庵寺古墳群II 大迫ツリ遺跡 小釜野遺跡 一般国道9号(仁摩温泉津道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5』、島根県教育委員会
- 島根県教育委員会編 2018『大國地頭所遺跡 一般国道9号(静間仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』、島根県教育委員会
- 久住猛雄 1999『北部九州における庄内式併行期の土器様相』『庄内式土器研究』XIX、庄内式土器研究会、62-143
- 次山 淳 1997『初期布留式土器群の西方展開・中四国地方の事例から』『古代』第103号、早稲田大学考古学会、135-156
- 常松幹雄 2002『九州地方の土器』赤塚次郎編『考古資料大観2 土器II』小学館、91-106
- 中村利至久 2017『北九州市域の古式土器について』『九州島における古式土器 第19回九州前方後円墳研究会』、九州前方後円墳研究会、164-178
- 松井 潔 2013『台付装飾壺』『みずほ別冊 弥生研究の群像』大和弥生文化の会、359-376
- 松山智弘 2015『4山陰』、中国四国前方後円墳研究会第18回研究集会編『前期古墳を再考するII-古墳出土器をめぐって-』発表要旨・資料集、37-129

第8表 松林寺遺跡土器觀察表

遺物 番号	持因番号	写真図版	種別	器種	出土地点/ 標高	層位	口径 (cm)	その他 の寸法 (cm)	残存率 (%)	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
1 第59回 因版69	弥生土器	甕	段状造構1	床面	(13.0)		40	18条の直線文。	浅黄褐色 (10YR8/3)		IaA1	
2 第59回 因版53	弥生土器	甕	段状造構1	床面	(16.4)		60	摩滅	(外) 暗褐色 (7SYR8/6) (内) 暗褐色 (7SYR8/6)		IaA-	
3 第59回 因版69	弥生土器	甕	段状造構1	床面	(15.0)		10	20条の直線文、波状文	(外) 浅黄褐色 (10YR8/3) (内) 底白色 (10YR8/2)		IBB1	
4 第59回 因版69	土師器	甕	段状造構1	粘土	(18.0)		10	摩滅	に赤い黄褐色 (10YR8/3)		IB	
5 第59回 因版53	弥生土器	甕	段状造構1	理土	(20.0)		30	摩滅により8条の直線文が 残る	底白色 (10YR8/2)		IBB1	
6 第59回 因版69	弥生土器	甕	段状造構1	理土	(17.8)		15	摩滅により15条の直線文が 残る、肩部列文	(外) 浅黄褐色 (10YR8/3) (内) 底白色 (10YR8/2)		IBB1	
7 第59回 因版69	弥生土器	鉢	段状造構1	理土	(12.0)		30	度減、口縁部に赤い合わせの 「八」の字文、5条の直線文、 列文	(外) 明赤褐色 (7SYR5/6) (内) 底白色 (10YR8/2)			
8 第59回 因版53	弥生土器	鉢	段状造構1	理土	11.0	側面14.4			(外) 浅黄褐色 (10YR8/3) (内) 底白色 (10YR8/2)			
9 第59回 因版53	土師器	壺	段状造構1	理土	17.0				(外) 暗褐色 (5YR7/8) (内) 暗褐色 (5YR7/8)			
10 第59回 因版53	土師器	甕	段状造構1	理土	(18.0)		20	摩滅、肩部波状文？	(外) 暗褐色 (5YR6/6) (内) 浅黄褐色 (7SYR8/6)	草田 4-5期		
11 第59回 因版53	土師器	甕	段状造構1	理土	(16.0)		30	摩滅	(外) 暗褐色 (5YR6/6) (内) 暗褐色 (5YR6/6)	草田 4-5期		
12 第59回 因版53	土師器	甕	段状造構1	理土	(18.0)		35	摩滅	(外) 暗褐色 (7SYR6/6) (内) 暗褐色 (5YR6/6)	草田 4-5期		
13 第59回 因版69	土師器	甕	段状造構1	理土	(16.0)		25	摩滅	(外) に赤い黄褐色 (10YR8/2) (内) 底白色 (10YR8/2)	草田 4-5期		
14 第59回 因版69	土師器	甕	段状造構1	理土					(外) に赤い黄褐色 (5YR5/4) (内) に赤い黄褐色 (5YR5/4)	草田 5期		
15 第59回 因版69	土師器	鉢形器	段状造構1	理土	(24.0)		10	摩滅	(外) 暗褐色 (7SYR7/6) (内) に赤い黄褐色 (10YR8/3)			
16 第59回 因版69	土師器	鉢形器	段状造構1	理土		底厚 (17.0)	15	摩滅	(外) 底白色 (10YR8/2)			
17 第59回 因版69	土師器	高杯	段状造構1	理土					(外) 浅黄褐色 (7SYR8/6) (内) 浅黄褐色 (10YR8/3)			
19 第60回 因版69	土師器	壺	段状造構2	理土	(17.4)		10	摩滅	(外) 浅黄色 (2.5YR8/3) (内) 浅黄色 (10YR8/3)			
20 第60回 因版69	土師器	甕	段状造構2 下層	理土下層	(16.0)		15	内面摩滅	(外) に赤い黄褐色 (7.5YR8/6) (内) に赤い黄褐色 (7.5YR8/6)			
21 第60回 因版69	土師器	鉢	段状造構2	理土	(12.0)		15	摩滅	(外) 浅黄褐色 (7SYR8/6) (内) 底白色 (10YR8/6)			
22 第60回 因版69	土師器	高杯	段状造構2	理土					(外) 底白色 (10YR8/6) (内) 底黄色 (10YR8/3)			
24 第60回 因版53	土師器	甕	土器埋設段落 破壊	段状造構2	34.7	側厚40.0	85	摩滅、ヨコハケ	黄褐色 (10YR8/6)			
25 第61回 因版53	弥生土器	甕	段状造構3	理土	(17.0)		25	20条の直線文、肩部に 貝殻波状文？	浅黄褐色 (10YR8/3)		IBB1	
26 第61回 因版54	弥生土器	甕	段状造構3	理土	19.2		80	摩滅により10条の直線文 が残る	浅黄褐色 (10YR8/3)		IAB1	
27 第61回 因版54	土師器	甕	段状造構3	理土	(19.0)		35	摩滅	(外) に赤い黄褐色 (10YR8/3) (内) 底白色 (10YR8/6)	草田 5期		
28 第61回 因版54	土師器	甕	段状造構3	理土	(15.0)		35	摩滅	(外) 暗褐色 (7SYR8/6) (内) 浅黄褐色 (7.5YR8/6)	草田 5期		
29 第61回 因版54	土師器	甕	段状造構3	理土	(18.0)		30	摩滅	に赤い黄褐色 (10YR8/3)	小谷 3以降		
30 第61回 因版70	土師器	甕	段状造構3	理土	(19.0)		20	摩滅、肩部縦杉文	(外) に赤い黄褐色 (10YR8/3) (内) 底白色 (10YR8/2)			
31 第61回 因版70	土師器	甕	段状造構3	理土	(18.0)		30	摩滅	(外) に赤い黄褐色 (10YR8/2) (内) に赤い黄褐色 (10YR8/3)			
32 第61回 因版54	弥生土器	甕	土坑	上層	(21.0)		45	摩滅、肩部波状文	浅黄褐色 (10YR8/3)		IBb	
33 第61回 因版70	弥生土器	甕	土坑	上層	(22.0)		10	摩滅	(外) 黄褐色 (10YR8/6) (内) 浅黄褐色 (10YR8/6)			
34 第61回 因版70	土師器	壺	土坑周辺	両面	(25.0)		25		(外) 浅黄褐色 (7.5YR8/6) (内) 底白色 (10YR8/6)			
35 第62回 因版54	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(18.2)		20	摩滅、15条の貝殻直線文	浅黄褐色 (10YR8/3)			
36 第62回 因版54	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(20.2)				(外) 浅黄褐色 (7.5YR8/6) (内) 底白色 (10YR8/6)			
37 第62回 因版55	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(19.0)		45	11条の直線文、肩部に11 条の波状文	(外) 浅黄褐色 (10YR8/4) (内) 浅黄褐色 (2.5YR8/4)		IAB1	
38 第62回 因版70	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(20.0)				摩滅により8条分の直線文 が残る	浅黄褐色 (10YR8/3)	IAB1?	
39 第62回 因版55	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(16.0)		30	摩滅、12条の直線文、肩部 波状文	(外) 浅黄褐色 (10YR8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR8/3)		IAB2	
40 第62回 因版70	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(19.2)		15	9条の直線文ナデ消し、肩 部波状文	底白色 (2.5YR8/2)		IAB2	
41 第62回 因版55	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(15.0)		25	11条の直線文ナデ消し、肩 部波状文、ヨコハケ、肩部波状文	(外) 底白色 (7.5YR8/6) (内) に赤い黄褐色 (10YR8/3)		IAB2	
42 第62回 因版55	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(19.0)				(外) に赤い黄褐色 (10YR8/3) (内) 浅黄褐色 (7.5YR8/6)			
43 第62回 因版70	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(24.0)		20	16条の直線文、肩部波状文	(外) 浅黄褐色 (10YR8/3) (内) 底白色 (10YR8/2)		IBB1	
44 第62回 因版55	弥生土器	甕	土器埋まり	土器埋まり		脚厚23.5	70	摩滅	(外) に赤い黄褐色 (10YR8/3) (内) 底白色 (10YR8/2)			
45 第62回 因版55	弥生土器	鉢形器	土器埋まり	土器埋まり		台脚厚 (2.4)			底部平底、底部は被削 黄褐色 (2.5YR8/6)			
46 第62回 因版55	弥生土器	鉢	土器埋まり	土器埋まり	(12.2)	脚厚12.3 (10.8)	30	摩滅、底部平底、底部は被削 黄褐色 (10YR8/6)				
47 第63回 因版55	土師器	甕	土器埋まり	土器埋まり	17.5	脚厚 (19.4)			摩滅、肩部の波状文を以て 切る	黄褐色 (10YR8/6)	草田 4期	
48 第63回 因版56	土師器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(16.0)		25	摩滅、肩部波状文	(外) 暗褐色 (10YR8/3) (内) 底白色 (10YR8/2)	草田 4期		
49 第63回 因版56	土師器	甕	土器埋まり	土器埋まり	(17.0)		30	摩滅、肩部の波状文がわずかに 残る	(外) 浅黄褐色 (10YR8/4) (内) 黄褐色 (10YR8/2)	草田 4期		

通物番号	博団番号	写真図版	種別	器種	出土地点/地層	層位	口径 (cm)	その他 寸法 (cm)	残存率 (%)	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期	
50	第 63 回	回版 56	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	14.8	口径18.5 底径15.0	100	肩部縮頸、直腹、平底だが口付せず	淡黄色 (SYR2/3)	草田 4-5 期	
51	第 63 回	回版 71	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	19.0		40	廢滅	(外) 淡色 (SYR4/4) (内) 黄褐色 (SYR7/6)	草田 4-5 期	
52	第 63 回	回版 56	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	20.8	口径23.4	頭部完存	頭部の直線文と波状文 又は一部残存	黄褐色 (SYR2/6)	草田 5 期	
53	第 63 回	回版 56	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	17.8	軸径(22.4)	頭部完存	頭部の直線文と波状文	黄褐色 (SYR2/6)	草田 5 期	
54	第 63 回	回版 56	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	17.6		75	廢滅	淡黄褐色 (SYR2/4)	草田 5 期	
55	第 63 回	回版 71	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	15.8		30	廢滅	黄褐色 (SYR2/6)	草田 5 期	
56	第 63 回	回版 71	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	15.0		20	廢滅	にふい黃褐色 (SYR2/4)	草田 5 期	
57	第 63 回	回版 56	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	15.4	口径14.8	40	廢滅、やや鉛質	淡黄褐色 (SYR2/4)	草田 6 期	
58	第 63 回	回版 71	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	18.0	軸径(18.0)	30	廢滅、脇部に 7 条の直線文、 波状文	明黄褐色 (SYR2/6)		
59	第 63 回	回版 56	土師器	鼓形容器	土器底つまり	土器底つまり	20.4		100	頭部 60.0 部完存	橙色 (SYR2/6)		
60	第 63 回	回版 71	土師器	鼓形容器	土器底つまり	土器底つまり	19.0		15	廢滅	(外) 明黄褐色 (SYR2/6) (内) にふい黄褐色 (SYR2/4)		
61	第 63 回	回版 57	土師器	甕	土器底つまり	土器底つまり	16.6	口径(28.2)	頭部完存	浅黄褐色 (SYR2/4)			
63	第 64 回	回版 71	弥生土器	甕	B1	谷状地形			3 条の直線文	灰白色 (SYR2/2)			
64	第 64 回	回版 71	弥生土器	甕	B0.81	谷状地形		軸径(42.7)	15	内部縮減、脇部に列点文、や り鉛質	(外) 淡黄色 (2.5YB3/3) (内) 灰白色 (2.5YB2)		
65	第 64 回	回版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(26.2)		10	4 条の直線文	(外) にふい黄褐色 (SYR2/4) (内) 灰白色 (SYR2/2)		
66	第 64 回	回版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形			30	脇部に突帯、内外相高いハク 調整、微成段、下大輪式	(外) 浅黄褐色 (SYR2/6) (内) 浅黄褐色 (SYR2/3)		
67	第 64 回	回版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	(16.0)		15	外部縮減、3 条の凸縦文、脇 部に列点文	(外) 灰白色 (2.5YB3/3) (内) 灰白色 (2.5YB2)	IAb1	
68	第 64 回	回版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	(17.0)		20	6 条の直線文	灰白色 (SYR2/2)	IAb1	
69	第 64 回	回版 57	弥生土器	甕	B0	谷状地形	(16.0)		40	8 条の直線文、脇部骨質裂 文	(外) 灰黄褐色 (10YR4/2) (内) 灰白色 (SYR2/1)	IAb1	
70	第 64 回	回版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(14.0)		35	頭部に剝突文	(外) にふい黄褐色 (SYR2/2) (内) にふい黄褐色 (SYR2/4)	IAb3	
71	第 64 回	回版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(18.0)		90	6 条の直線文、一部ナテに より單線が不明瞭	灰白色 (SYR2/2)	IAb2	
72	第 64 回	回版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(17.1)		10	10 条の直線文、一部ナテ消 し、脇部波状文	灰白色 (2.5YB1/1)	IAb2	
73	第 65 回	回版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(17.0)		80	14 条の直線文、脇部波状文	灰白色 (2.5YB2/2)	IAb2	
74	第 65 回	回版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(17.7)		75	19 条の直線文	灰白色 (SYR2/2)	IAb1	
75	第 65 回	回版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(14.0)		50	16 条の直線文、脇部剥離文	灰白色 (2.5YB1/1)	IAb1	
76	第 65 回	回版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(19.0)		30	摩減、14 条の貝殻模文	(外) 灰白色 (10YR2/2) (内) 灰白色 (2.5YB1/1)	IAb1	
77	第 65 回	回版 56	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(17.0)		80	摩減、10 条の直線文が残る	灰白色 (SYR2/2)	IAb2	
78	第 65 回	回版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(23.0)		30	摩減、11 条の直線文が残る	灰白色 (2.5YB1/1)	IAb1	
79	第 65 回	回版 56	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(18.0)		30	18 条の貝殻模文、脇部波 状文	(外) にふい黄褐色 (10YR2/2) (内) 灰白色 (10YR2/2)	IAb1	
80	第 65 回	回版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	(19.0)		25	17 条の貝殻模文、脇部 波状文	(外) 灰白色 (10YR2/2) (内) 浅黄褐色 (10YR2/1)	IAb1	
81	第 65 回	回版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	(19.0)		30	13 条の直線文、一部赤彩	(外) にふい黄褐色 (10YR2/4) (内) 浅黄褐色 (10YR2/4)	IAb1	
82	第 65 回	回版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(18.6)		35	17 条の直線文、脇部波状文	灰白色 (2.5YB1/1)	IAb1	
83	第 65 回	回版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	(17.0)		25	計 9 条の貝殻模文、一部 コヨナ、一部波状文	灰白色 (2.5YB1/1)	IAb2	
84	第 65 回	回版 58	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(16.0)		40	14 条の直線文、一部ナテ消 し、脇部波状文	(外) 灰白色 (10YR2/2) (内) 灰白色 (10YR2/1)	IAb2	
85	第 65 回	回版 58	弥生土器	甕	B0.81	谷状地形	(17.0)		35	14 条の直線文、脇部 波状文	灰白色 (10YR2/2)	IAb2	
86	第 65 回	回版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(19.0)		15	14 条の直線文、一部ナテ消し	灰白色 (10YR2/2)	IAb2	
87	第 65 回	回版 58	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(11.6)		40	17 条の直線文、脇部 波状文、平底が自立せず	灰白色 (SYR6/1)		
88	第 65 回	回版 73	弥生土器	鼓形容器	B1	谷状地形	(21.0)		15	摩減、28 条の貝殻模文	(外) 淡黄褐色 (2.5YB2/6) (内) 波状 (SYR2/6)		
89	第 65 回	回版 58	弥生土器	鼓形容器	B1	谷状地形		底径17.0	80	全気が付着、12 条の直線文	(外) にふい黄褐色 (10YR2/2) (内) 灰白色 (10YR2/2)		
90	第 65 回	回版 58	弥生土器	鼓形容器	B1	谷状地形			15	計 22 条の直線文、一部赤彩	灰白色 (10YR2/2)		
91	第 65 回	回版 73	弥生土器	鼓形容器	B1	谷状地形	(22.0)		10	廢滅	(外) 浅黄褐色 (2.5YB2/4) (内) 浅黄褐色 (2.5YB2/6)		
92	第 65 回	回版 58	弥生土器	器台	B1	谷状地形			体部完存	廢滅、赤彩残る	浅黄褐色 (2.5YB1/4)		
93	第 66 回	回版 73	土師器	甕	B1	谷状地形	(9.0)		20		(外) 浅黄褐色 (10YR2/3) (内) 灰白色 (10YR2/2)		
94	第 66 回	回版 73	土師器	甕	B1	谷状地形	(22.0)		15	廢滅	灰白色 (10YR2/2)		
95	第 66 回	回版 59	土師器	甕	B1	谷状地形	(16.0)		20		(外) にふい黄褐色 (SYR2/3) (内) 明黄褐色 (2.5YR7/2)		
96	第 66 回	回版 59	土師器	甕	B1	谷状地形	(18.0)		35	脇部波状文と直線文	灰白色 (10YR2/2)	小谷 3 式	
97	第 66 回	回版 73	土師器	低脚杯	B0	谷状地形			70	内面縮減	灰白色 (2.5YB2/2)	草田 5-6 期	
100	第 67 回	回版 74	弥生土器	甕	B1	谷状地形	(17.0)		15	廢滅	灰白色 (10YR2/2)		
101	第 67 回	回版 74	弥生土器	甕	B1	褐色土	(14.5)		10	15 条の直線文	(外) 淡黄褐色 (2.5YB2/3) (内) 波状 (SYR2/3)		
102	第 67 回	回版 74	弥生土器	甕	B2	褐色土	(17.0)		25	摩減、9 条の直線文	(外) 淡黄褐色 (2.5YB2/6) (内) にふい褐色 (SYR6/6)		
103	第 67 回	回版 74	弥生土器	甕	B0	褐色土	(17.0)		10	廢滅、本来は直線文があつ た?	(外) 淡黄褐色 (2.5YB2/4) (内) 淡黄褐色 (10YR2/4)		
104	第 67 回	回版 74	弥生土器	甕	C9	褐色土			25	廢滅、本来は直線文があつ た?	(外) 淡黄褐色 (2.5YB2/4) (内) 淡黄褐色 (10YR2/4)		
105	第 67 回	回版 59	弥生土器	甕	B0	褐色土	(13.0)		75	廢滅、施土は土師器に似る	褐色 (SYR7/8)		
106	第 67 回	回版 74	弥生土器	甕	B2	褐色土		底径(9.0)	30	廢滅	(外) 淡黄色 (2.5YB3/3) (内) 灰白色 (2.5YB1/1)		

遺物番号	地図番号	写真番号	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径 (cm)	その他の寸法 (cm)	残存率 (%)	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
107	第 67 号	図版 74	弥生土器	壺	B1	褐色土	底径 (6.0)		40	磨滅	(外) 広葉緑色 (10YR6/2) (内) 淡黄色 (10YR8/3)	
108	第 67 号	図版 74	弥生土器	壺	B9	褐色土	底径 6.1		50	磨滅、部分充てん	(外) 明褐色 (10YR7/6) (内) 淡黄色 (10YR8/3)	
109	第 67 号	図版 75	弥生土器	壺	B1	褐色土	(15.0)		15	磨滅、横成二段、4 条の凹縫文	(外) 広白色 (7.5YR8/1) (内) 底部 (2.5YR8/1)	IaA1
110	第 67 号	図版 75	弥生土器	壺	C2	褐色土	(16.0)		25	摩滅して文様の有無不明	(外) 淡黄色 (2.5YR8/3)	IaA-
111	第 67 号	図版 59	弥生土器	壺	B9	褐色土	(16.0)		45	11 条の直線文、兩体は異型でないかと想われる	(外) 広葉緑色 (10YR6/2) (内) 淡黄色 (10YR8/3)	IaB1
112	第 67 号	図版 59	弥生土器	壺	B1	褐色土	(19.0)		35	磨滅、12 条の直線文が残る	灰白色 (10YR8/2)	IaB1
113	第 67 号	図版 59	弥生土器	壺	B9	褐色土	19.6		50	磨滅、11 条の直線文、両部皮状文	(外) 広葉緑色 (7.5YR8/6) (内) 棒色 (5YR7/6)	IbB1
114	第 67 号	図版 75	弥生土器	壺	C9.C0	褐色土	(26.0)		35	内面磨滅、口縁部は外方へ折れるように展開、15 条の細縫文線文、両部崩壊状文	(外) 広白色 (10YR6/1) (内) にふい・黄褐色 (10YR7/2)	IbB1
115	第 67 号	図版 59	弥生土器	壺	B9	褐色土	(22.0)		45	9 条の直線文	(外) にふい・黄褐色 (10YR6/2) (内) 広葉緑色 (10YR6/2)	IbB1
116	第 67 号	図版 75	弥生土器	壺	B9	褐色土	(17.0)		20	磨滅により口縁部下半分は不明、3 条以上の直線文が残る	灰白色 (10YR6/2)	IaA1
117	第 67 号	図版 59	弥生土器	壺	B9	褐色土	(14.0) 最高 19.0 最大径 16.3	脚部下平 充てん	45	外周磨滅、7 条の直線文、崩壊皮状文、平坦たがり立つしない	灰白色 (10YR8/2)	IaA1
118	第 67 号	図版 60	弥生土器	壺	B9	褐色土	(17.0)		45	磨滅、7 条の直線文	灰白色 (2.5YR8/1)	IaA1
119	第 67 号	図版 75	弥生土器	壺	B1	褐色土	(17.0)		30	磨滅、7 条の直線文	(外) 浅褐色 (3YR8/4) (内) 相赤 (5YR7/6)	IaA1
120	第 67 号	図版 75	弥生土器	壺	B9	褐色土	(16.0)		30	9 条 (一部ナメ) の直線文、一部ナメ消失	浅黃褐色 (10YR8/3)	IaA1
121	第 67 号	図版 60	弥生土器	壺	B9	褐色土	(18.0)		65	8 条の直線文、一部ナメ消失	(外) 広葉緑色 (10YR8/4) (内) 底部 (10YR8/2)	IaA1
122	第 67 号	図版 60	弥生土器	壺	B9	褐色土	(17.0)		35	磨滅により口縁部下半分は不明、7 条以上の直線文、両部崩壊状文	灰白色 (10YR8/2)	IaA-
123	第 67 号	図版 75	弥生土器	壺	B9	褐色土	(16.0)		25	磨滅、10 条の直線文	灰白色 (10YR8/1)	IaB1
124	第 67 号	図版 60	弥生土器	壺?	B9	褐色土	(13.0)		30	口縁部注口状、7 条の貝殻縫合線文、肩部崩壊波状文	(外) 広葉緑色 (10YR8/2) (内) 淡黄色 (10YR8/3)	IaA1
125	第 67 号	図版 75	弥生土器	壺	B9	褐色土	(20.0)		10	磨滅	(外) にふい・黄褐色 (10YR8/2) (内) 底部 (10YR8/2)	IaA-
126	第 68 号	図版 60	弥生土器	壺	B9	褐色土	(19.0)		40	16 条の貝殻縫合線文、肩部の貝殻縫合部は列が下すする	(外) 底部 (2.5YR8/2) (内) 底部 (2.5YR8/1)	IbB1
127	第 68 号	図版 75	弥生土器	壺	不明	地上上	(16.0)		20	13 条の直線文	(外) 底部 (2.5YR8/1) (内) 底部 (2.5YR8/2)	IbB1
128	第 68 号	図版 60	弥生土器	壺	B1	褐色土	(17.0)		45	磨滅により 6 条の直線文が残る	(外) 底部 (2.5YR8/1) (内) 底部 (2.5YR8/2)	IbB1
129	第 68 号	図版 60	弥生土器	壺	B1	褐色土	18.0		90	磨滅により 7 条の直線文が残る。本來北竜神部全周に有る。	(外) にふい・黄褐色 (10YR8/3) (内) にふい・黄褐色 (10YR8/2)	IbB1
130	第 68 号	図版 60	弥生土器	壺	C9	褐色土	15.6			口縁部充てん	灰白色 (10YR8/2)	IbB1
131	第 68 号	図版 60	弥生土器	壺	C0	褐色土	17.8			磨滅、7 条以上の直線文	灰白色 (10YR8/2)	IbB1
132	第 68 号	図版 75	弥生土器	壺	B1	褐色土	(21.0)		30	磨滅により 10 条程度の直線文が残る	灰白色 (10YR8/2)	IbB1
133	第 68 号	図版 75	弥生土器	壺	B2	褐色土	(18.0)		35	9 条の直線文、肩部点文	(外) 広葉緑色 (10YR6/2) (内) にふい・黄褐色 (10YR8/3)	IbB1
134	第 68 号	図版 60	弥生土器	壺	C2	褐色土	18.0		75	磨滅により 8 条の貝殻縫合線文が残る。本来は口縁部外全面に施す。	浅黃褐色 (10YR8/3)	IbB1
135	第 68 号	図版 61	弥生土器	壺	B1	褐色土	(19.4)		45	崩壊、13 条の直線文、肩部波状文	灰白色 (2.5YR8/2)	IbB1
136	第 68 号	図版 76	弥生土器	壺	B1	褐色土	(17.0)		20	8 条の直線文、肩部波状文	(外) 広葉緑色 (10YR6/2) (内) にふい・黄褐色 (10YR8/2)	IbB1
137	第 68 号	図版 76	弥生土器	壺	B2	褐色土	(16.0)		20	10 条の直線文、肩部波状文	(外) 広葉緑色 (10YR6/2) (内) にふい・黄褐色 (10YR7/3)	IbB1
138	第 68 号	図版 61	弥生土器	壺	C9	褐色土	(18.0)		30	磨滅、文様の有無不明	灰白色 (10YR8/2)	Ib-
139	第 68 号	図版 76	弥生土器	壺	B2	褐色土	(22.0)		25	内面磨滅、19 条の直線文、肩部波状文	(外) 広白色 (10YR8/2) (内) 底部 (10YR8/3)	IbB1
140	第 68 号	図版 61	弥生土器	壺	B1	褐色土	16.8		85	磨滅、12 条の直線文	灰白色 (10YR8/2)	IbB1
141	第 68 号	図版 61	弥生土器	壺	B1	褐色土	(16.0)		35	24 条の直線文、肩部剥離文	灰白色 (10YR8/2)	IbB1
142	第 68 号	図版 76	弥生土器	壺	B1	褐色土	(24.0)		25	磨滅、10 条の貝殻縫合線文	灰白色 (2.5YR8/2)	IbB1
143	第 68 号	図版 76	弥生土器	壺	B9	褐色土	(16.0)		25	磨滅、12 条の直線文	(外) 底部 (10YR8/2) (内) 底部 (2.5YR8/1)	IbB1
144	第 68 号	図版 61	弥生土器	壺	B9	褐色土	(18.0)		45	13 条の貝殻縫合線文	(外) 淡黄色 (10YR8/3) (内) 淡黄色 (7.5YR8/4)	IbB1
145	第 68 号	図版 61	弥生土器	壺	C2	褐色土	(16.0)		25	磨滅、11 条の直線文	にふい・黄褐色 (10YR8/4)	IbB1
146	第 68 号	図版 76	弥生土器	壺	C2	褐色土	(33.6)		15	口縁部波状文、肩部 7 条の貝殻縫合文と直線文	灰白色 (2.5 Y 8/2)	IbB1
147	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	C2	褐色土	(21.6)		15	磨滅により 3 条の直線文が残る。	(外) 淡黄色 (7.5YR8/2) (内) 淡黄色 (10YR8/4)	IbB1
148	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	B1	褐色土	(24.0)		15	磨滅により 9 条の直線文が残る。	(外) にふい・黄褐色 (10YR8/3) (内) 淡黄色 (10YR8/3)	IbB1
149	第 69 号	図版 61	弥生土器	壺	B1	褐色土	(17.0)		30	磨滅により 13 条の直線文が残る。	灰白色 (10YR8/2)	Ib-
150	第 69 号	図版 61	弥生土器	壺	C0	褐色土	(20.0)		20	磨滅により 10 条の直線文が残る。	灰白色 (10YR8/2)	IbB1
151	第 69 号	図版 62	弥生土器	壺	B1	褐色土	(17.0)		8	18 条の直線文、肩部二列の波状文	灰白色 (10YR8/2)	IbB1
152	第 69 号	図版 61	弥生土器	壺	B2	褐色土	(18.0)		20	磨滅により 13 条の直線文が残る。肩部波状文ではないかと想われる。	(外) 底部 (10YR8/2) (内) 淡黄色 (10YR8/3)	IbB1
153	第 69 号	図版 61	弥生土器	壺	C2	褐色土	(16.0)		40	9 条の直線文、一部ナメ消失し、肩部波状文	(外) 底部 (10YR8/2) (内) 淡黄色 (2.5YR8/2)	IbB1
154	第 69 号	図版 62	弥生土器	壺	D1	褐色土	(17.0)		25	12 条の直線文、口縁部内面磨滅	(外) 淡黄色 (10YR8/3) (内) にふい・黄褐色 (10YR8/3)	IbB1

博物番号	古墳番号	写真図版	種別	器種	出土点地/標高	単位	口径 (m)	その他の寸法 (mm)	残存率 (%)	形態、文様の特徴	色調	型式/時期
155	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	B1	褐色土	(22.0)		35	残存により 7 条の直線文があり、口縁部は直線文で構成され、底部は凹状文である。	(W) 黄褐色 (10YR8/1) (W) 褐色 (10YR8/2)	BBB-1
156	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	B1	褐色土	(24.0)		15	16 条の直線文。一部にテープ状文がある。	(W) 淡黄色 (10YR8/3) (W) 淡褐色 (7.5YR8/3)	BBB-1
157	第 69 号	図版 62	弥生土器	壺	B1	褐色土	(30.0)		15	残存により 3 条の直線文がある。瓶底に波状文がある。	灰白色 (L5YR8/2)	BBB-
158	第 69 号	図版 62	弥生土器	壺	B1	褐色土	(23.0)		15	12 条の直線文。口縁部は直線文で構成され、瓶底に波状文がある。	灰白色 (L5YR8/2)	BBB-2
159	第 69 号	図版 62	弥生土器	壺	B1	褐色土	20.4		90	摩滅	灰白色 (L5YR8/2)	BBB-3
160	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	B0	褐色土	(24.6)		15	外周部摩滅	灰白色 (10YR8/2)	BBB-3
161	第 69 号	図版 62	弥生土器	壺	B2	褐色土	23.8		50		黄褐色 (7.5YR8/2)	BBB-3
162	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	B1	褐色土			30	3 条の直線文。肩部貝殻形による停り文。	(W) 黄色 (3YR8/1) (W) 淡黄色 (2.5YR8/1)	-
163	第 69 号	図版 62	弥生土器	壺	C0	褐色土			40	磨滅。瓶底貝殻形停り文。	(W) 淡黄色 (10YR8/3) (W) 黄褐色 (10YR8/2)	BBB-3
164	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	C1	褐色土			50	底面充填。摩滅。被熱	(W) 淡黄色 (7.5YR8/4) (W) 淡褐色 (7.5YR8/4)	BBB-3
165	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	B0	褐色土			40	摩滅。突出気味の平底。	(W) 黄褐色 (10YR8/2) (W) にいわゆる黄色 (10YR8/1)	BBB-3
166	第 69 号	図版 77	弥生土器	壺	B1	褐色土				頭部に列点文	(W) 淡黄色 (7.5YR8/4) (W) 淡褐色 (7.5YR8/4)	BBB-3
167	第 70 号	図版 78	弥生土器	壺	B1	褐色土	(13.0)		25	内面周部摩滅	灰白色 (10YR8/2)	BBB-2
168	第 70 号	図版 78	弥生土器	壺	B1	褐色土	(9.0)		20		灰白色 (10YR8/2)	BBB-2
169	第 70 号	図版 62	弥生土器	壺	C2	褐色土	(13.8)	削径 (13.6)	70	摩滅。直線文。肩部 2 列の貝殻形停り文。	灰白色 (10YR8/2)	BBB-2
170	第 70 号	図版 78	弥生土器	壺	B0	褐色土	(5.6)		40	摩滅	黒褐色 (2.5YR1/1) (W) 黄褐色 (2.5YR1/1)	BBB-2
171	第 70 号	図版 78	弥生土器	台付装飾壺	C1	褐色土	(8.8)	底面 8.0	台部充填	摩滅。若い 2 列の肩部直線文。直線文。列点文。直線文。列点文。直線文。列点文。	(W) 黄褐色 (10YR8/2) (W) 黄褐色 (7.5YR8/4)	BBB-2
172	第 70 号	図版 63	弥生土器	台付装飾壺	C0	褐色土			10	摩滅。若い 2 列の肩部直線文。直線文。列点文。直線文。	明黄褐色 (10YR7/6)	BBB-2
173	第 70 号	図版 78	弥生土器	台付装飾壺	C9.81	褐色土			10	摩滅。若い 2 列の肩部直線文。直線文。列点文。直線文。	(W) 淡黄色 (10YR8/3) (W) 淡褐色 (10YR8/2)	BBB-2
174	第 70 号	図版 63	弥生土器	台付装飾壺	B1	褐色土	8.8	削径 15.0 底径 17.3 底厚 10.2	85	2 列の肩部直線文。4 列の貝殻形停り文。直線文。列点文。直線文。列点文。直線文。列点文。	淡黄色 (2.5YR8/3)	BBB-2
175	第 70 号	図版 78	弥生土器	台付装飾壺	C9	褐色土			10	列点文。3 条の直線文。同心円形。直線文。列点文。4 条の直線文。直線文。列点文。直線文。	淡黄色 (2.5YR8/3)	BBB-2
176	第 70 号	図版 78	弥生土器	壺?	B1	褐色土			10	摩滅。1 条の直線文。貝殻形停り文。	淡黄色 (2.5YR8/3)	BBB-2
177	第 70 号	図版 78	弥生土器	壺?	B1	褐色土			10	摩滅。貝殻形停り文。	灰白色 (L5YR8/2)	BBB-2
178	遺物 13	図版 63	弥生土器	敲形器台	B0	褐色土	(14.8)	肩高 18.5 削径 13.4	肩部充填	受部に 16 条。台部に 17 条の直線文。底面直線文。	(W) 淡黄色 (2.5YR8/4) (W) 淡褐色 (2.5YR8/2)	BBB-2
179	第 71 号	図版 78	弥生土器	敲形器台	B0	褐色土	(21.2)		10	内外赤彩。直線文。	(W) 淡黄色 (10YR8/3) (W) 褐色 (10YR8/2)	BBB-2
180	第 71 号	図版 78	弥生土器	敲形器台	D2	褐色土			20	摩滅。12 条の直線文。	(W) 淡黄色 (10YR8/3) (W) 淡褐色 (10YR8/2)	BBB-2
181	第 71 号	図版 78	弥生土器	敲形器台	B1	褐色土	(23.0)		10	摩滅。内面黒変。	(W) 黑褐色 (2.5YR8/2) (W) 黑褐色 (2.5YR8/4)	BBB-2
182	第 71 号	図版 63	弥生土器	敲形器台	C2	褐色土			10	摩滅。16 条の直線文。	(W) 淡黄色 (2.5YR8/4) (W) にいわゆる黄色 (7.5YR7/4)	BBB-2
183	第 71 号	図版 63	弥生土器	敲形器台	B1	褐色土	(24.7)	肩部 6.4	肩部充填	受部に 33 条の直線文。台部に 13 条の直線文。直線文。後ナス消し跡分かれ。	淡黄色 (2.5YR8/3)	BBB-2
184	第 71 号	図版 63	弥生土器	器台	B2	褐色土			10	摩滅。直線文。	(W) 淡黄色 (10YR8/4) (W) 明黄褐色 (10YR8/2)	BBB-2
185	第 71 号	図版 78	弥生土器	器台	B1	褐色土			10	摩滅。高环型器台か?	灰白色 (L5YR8/2)	BBB-2
186	第 71 号	図版 78	弥生土器	敲形器台	C2	褐色土			15	摩滅。	淡黄色 (2.5YR8/2)	BBB-2
187	第 71 号	図版 63	弥生土器	敲形器台	C2	褐色土	(19.0)		10	直線文。透かし六四方印。内面ボリューム	(W) にいわゆる黄色 (10YR8/4) (W) 明黄褐色 (10YR8/2)	BBB-2
188	第 71 号	図版 63	弥生土器	敲形器台	B1	褐色土			10	現存部充填	灰白色 (L5YR8/2)	BBB-2
189	第 71 号	図版 78	弥生土器	敲形器台	B1	褐色土			15	摩滅。直線文に直線文が重ねられ、直線文に直線文が重ねられる。	(W) 淡黄色 (10YR8/4) (W) 淡褐色 (10YR8/3)	BBB-2
190	第 71 号	図版 78	弥生土器	敲形器台	C2	褐色土		(17.0)	15	摩滅。	淡黄色 (2.5YR8/4)	BBB-2
191	第 71 号	図版 78	弥生土器	敲形器台	C1	褐色土			20	摩滅。	(W) 黄色 (10YR8/2) (W) にいわゆる黄色 (10YR8/4)	BBB-2
192	第 71 号	図版 78	弥生土器	敲形器台	B1	褐色土			10	内面周部摩滅。	(W) 淡黄色 (2.5YR8/4) (W) にいわゆる黄色 (7.5YR7/4)	BBB-2
193	第 71 号	図版 63	弥生土器	高环	B0	褐色土			40	円形の透かし六四方印。内面ボリューム	淡黄色 (2.5YR8/4)	BBB-2
194	第 72 号	図版 64	土器	壺	B2/C2	褐色土	(18.0)		20		(W) 淡黄色 (2.5YR8/6) (W) 褐色 (2.5YR8/6)	BBB-2
195	第 72 号	図版 79	土器	壺	B2	褐色土	(19.6)		20		(W) にいわゆる黄色 (10YR8/4) (W) 明黄褐色 (10YR8/2)	BBB-2
196	第 72 号	図版 64	土器	壺	C2	褐色土	(21.0)		40	摩滅。軟質。	(W) 淡黄色 (2.5YR8/6) (W) 褐色 (2.5YR8/6)	BBB-2
197	第 72 号	図版 64	土器	壺	C2	褐色土			25	摩滅。	淡黄色 (2.5YR8/6)	BBB-2
198	第 72 号	図版 64	土器	壺	B2/C2	褐色土			20	軟質。直線文。	(W) 淡黄色 (2.5YR8/6) (W) 褐色 (2.5YR8/6)	BBB-2
199	第 72 号	図版 79	土器	壺	C2	褐色土	(20.2)		20	摩滅。	淡黄色 (2.5YR7/3)	BBB-2
200	第 72 号	図版 79	土器	壺	C2	褐色土	(11.0)		15	摩滅。	(W) 褐色 (2.5YR8/6) (W) 褐色 (2.5YR8/6)	BBB-2
201	第 72 号	図版 79	土器	壺	B1	褐色土	(15.0)		15	短錫の透かし。	(W) 淡黄色 (10YR8/3) (W) 黄褐色 (2.5YR8/1)	BBB-2
202	第 72 号	図版 79	土器	壺	C2	褐色土			10	摩滅。	相色 (2.5YR8/1)	BBB-2
203	第 72 号	図版 64	土器	壺	B1	褐色土	(17.0)		50	摩滅。肩部直線文。列点文。波状文。	(W) にいわゆる黄色 (2.5YR8/4)	草田 4 期

遺物番号	写真番号	種別	器種	出土地点 / 通鑑	層位	口径 (cm)	その他の寸法 (cm)	残存率 (%)	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
204	第 72 回	土師器	甕	B1	褐色土	(15.0)		25	内面磨滅	(外) にぶい 黄褐色 (10YR6/4) (内) 褐色 (7.5YR7/6)	草田 4 期
205	第 72 回	土師器	甕	C0	褐色土	(16.0)		15	磨滅	褐色 (7.5YR7/6)	草田 4 期
206	第 72 回	土師器	甕	A2	褐色土	(19.0)		20	磨滅、波状文?	(外) にぶい 黄褐色 (10YR7/4) (内) 褐色 (7.5YR7/6)	草田 4-5 期
207	第 72 回	土師器	甕	C2	褐色土	(18.0)		15		浅黄褐色 (10YR8/4)	草田 4 期?
208	第 72 回	土師器	甕	C1	褐色土	(17.0)		60	磨滅	(外) 浅黄褐色 (7.5YR8/6) (内) 褐色 (7.5YR7/6)	草田 4 期?
209	第 72 回	土師器	甕	B2	褐色土	(17.2)		20	磨滅、波状文?	無地色 (10YR7/6)	草田 5 期
210	第 72 回	土師器	甕	C1	褐色土	15.0	側径 17.6 口縁部 完存		口縁部 計りの波状文、一部波状文 と直線文	(外) 黄褐色 (7.5YR8/8) (内) 浅黄褐色 (7.5YR8/6)	草田 5 期
211	第 72 回	土師器	甕	B1	褐色土	15.8	側径 (19.0)	60	口縁部 波状文、肩部 波状文	(外) 浅黄褐色 (7.5YR8/6) (内) 褐色 (7.5YR7/8)	草田 5 期
212	第 72 回	土師器	甕	B2	褐色土	(15.0)		25	外面部磨滅	褐色 (7.5YR7/6)	草田 5 期
213	第 72 回	土師器	甕	C9	褐色土	(16.0)		20	磨滅、波状文	(外) 褐色 (7.5YR7/6) (内) 黄褐色 (7.5YR8/8)	草田 5 期
214	第 73 回	土師器	甕	B2	褐色土	(22.2)		40	外面部磨滅、膺部波状文、底部 は突出した平底	褐色 (10YR6/6)	草田 5-6 期
215	第 73 回	土師器	甕	B2	褐色土		側部 (23.0)	15	肩部波状文	褐色 (7.5YR6/6)	草田 5-6 期
216	第 73 回	土師器	甕	C2	褐色土	(28.0)		25	磨滅	(外) にぶい 黄褐色 (10YR7/4) (内) にぶい 黄褐色 (10YR8/3)	草田 6 期?
217	第 73 回	土師器	甕	B1	褐色土	(14.6)		20	磨滅	(外) 浅黄褐色 (10YR8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR8/3)	草田 6 期?
218	第 73 回	土師器	甕	B0	褐色土	(15.0)		25	肩部へラ羽彫状文	(外) 灰白色 (2.5YR7/8) (内) 浅黄褐色 (7.5YR8/6)	草田 6 期
219	第 73 回	土師器	甕	C9.C0	褐色土	(14.0)		30	磨滅	(外) にぶい 黄褐色 (10YR6/3) (内) にぶい 黄褐色 (10YR6/2)	草田 7 期
220	第 73 回	土師器	甕	B1	褐色土	(14.4)	側径 19.2	85	磨滅、肩部直線文、波状文	(外) にぶい 黄褐色 (10YR6/3) (内) にぶい 黄褐色 (10YR6/2)	小谷 3 式
221	第 73 回	土師器	甕	B0	褐色土	(20.0)		20	磨滅、退化した複合口縁	褐色 (5YR6/6) 褐色 (5YR6/6)	
222	第 73 回	土師器	甕	C2	褐色土	(16.0)		10	外面部磨滅、退化した複合口 縁	(外) 褐色 (7.5YR7/6) (内) 灰白色 (10YR5/2)	
223	第 73 回	土師器	甕	B8	褐色土	(21.0)		15	磨滅	浅黄褐色 (10YR8/3)	
224	第 73 回	土師器	口上土器	B1	褐色土			25		褐色 (7.5YR7/6)	
225	第 73 回	土師器	口上土器	B2	褐色土			現存部 完存	先端欠損	(外) にぶい 黄褐色 (10YR7/2) (内) 灰白色 (10YR7/2)	
226	第 74 回	土師器	甕	B1	褐色土	24.8	側径 (31.2)	90	磨滅、鉗質	浅黄褐色 (7.5YR8/6)	草田 4-5 期
227	第 74 回	土師器	甕	B1	褐色土	(22.6)	側径 (27.0)	40	肩部直線文と波状文、脇部 に穿孔	(外) 浅黄褐色 (10YR8/3) (内) 灰白色 (10YR8/2)	草田 5-6 期
228	第 74 回	土師器	甕	A2	褐色土	(19.0)	側径 (35.3)	20	肩部列点文	(外) 黄褐色 (10YR8/6) (内) 浅黄褐色 (10YR8/4)	草田 5 期以 後?
229	第 75 回	土師器	鉢形器台	B2	褐色土	(20.8)	直徑 11.5 高さ (21.4)	25	棱は鋭い	黃褐色 (7.5YR7/6)	
230	第 75 回	土師器	鉢形器台	B2	褐色土	(22.4)	直徑 13.5 高さ (22.8)	30	棱は鋭い	浅黄褐色 (7.5YR8/6)	
231	第 75 回	土師器	鉢形器台	C2	褐色土	(25.8)		45	棱は突出	(外) 浅黄褐色 (10YR8/3) (内) 浅黄褐色 (10YR7/6)	
232	第 75 回	土師器	鉢形器台	A2.81	褐色土	16.0	直徑 7.8 高さ (7.8)	高さ (7.8)	棱は鋭い	無地色 (7.5YR7/6)	
233	第 75 回	土師器	鉢形器台	B2	褐色土	(26.8)		25	棱は鋭い、受部外面に直線 文	(外) 黄褐色 (7.5YR7/6) (内) 黄褐色 (7.5YR7/6) - (10YR7/6)	
234	第 75 回	土師器	鉢形器台	C2	褐色土	(20.0)		20	磨滅、棱は鋭い	浅黄褐色 (10YR8/4)	
235	第 75 回	土師器	鉢形器台	C1	褐色土	(23.0)		10		浅黄褐色 (10YR8/4)	
236	第 75 回	土師器	鉢形器台	B1	褐色土			現存部 完存		(外) 灰白色 (10YR8/2) (内) にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	
237	第 75 回	土師器	鉢形器台	C2	褐色土			25	磨滅、棱は鋭い	(外) 相色 (7.5YR7/6) (内) 褐色 (7.5YR8/6)	
238	第 75 回	土師器	鉢形器台	C2	褐色土	(22.0)		20	磨滅、棱は鋭い	明黄褐色 (10YR8/4)	
239	第 75 回	土師器	鉢形器台	C2	褐色土	(23.0)		40	磨滅、棱は鋭い	(外) 浅黄褐色 (10YR8/3) (内) にぶい 黄褐色 (10YR7/3)	
240	第 75 回	土師器	鉢形器台	B1	褐色土	(19.0)		20	棱は鋭い	(外) 浅黄褐色 (7.5YR8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR8/4)	
241	第 75 回	土師器	鉢形器台	A2	褐色土	(17.0)		15	磨滅	(外) 浅黄褐色 (7.5YR8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR8/4)	
242	第 75 回	土師器	鉢形器台	C0	褐色土		側径 (18.0)	20	磨滅	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	
243	第 76 回	土師器	高杯	C0	褐色土	(24.0)		10	磨滅、内面擦付着	(外) 浅黄褐色 (10YR8/3) (内) にぶい 黄褐色 (10YR8/3)	
245	第 76 回	土師器	高杯	B2	褐色土			現存部 完存	肝部内面に穴 2 つ	(外) 褐色 (7.5YR7/6) (内) 浅黄褐色 (7.5YR8/6)	
246	第 76 回	土師器	高杯	B1	褐色土			現存部 完存	磨滅	(外) 黄褐色 (10YR8/6) (内) 浅黄褐色 (10YR8/4)	
247	第 76 回	土師器	高杯	B2	褐色土			現存部 完存	磨滅、肝部内面に穴	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	
248	第 76 回	土師器	高杯	C2	褐色土			50		(外) 浅黄褐色 (10YR8/4) (内) 浅黄褐色 (2.5YR7/3)	
249	第 76 回	土師器	高杯	B0	褐色土			現存部 完存	磨滅	灰白色 (10YR8/2)	
250	第 76 回	土師器	高杯	C2	褐色土			90	磨滅	(外) にぶい 黄褐色 (10YR8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR8/4)	
251	第 76 回	土師器	高杯	C2	褐色土			90	磨滅	(外) 褐色 (7.5YR7/6) (内) 褐色 (5YR6/6)	
252	第 76 回	土師器	高杯	B1	褐色土			50	磨滅	褐色 (7.5YR6/6)	
253	第 76 回	土師器	高杯	C2	褐色土			25		(外) にぶい 黄褐色 (7.5YR7/6) (内) 褐色 (10YR8/6)	
254	第 76 回	土師器	高杯	B2	褐色土			80		(外) 浅黄褐色 (7.5YR8/6) (内) にぶい 黄褐色 (10YR8/6)	
255	第 76 回	土師器	高杯?	C2	褐色土		側径 (8.6)	75	磨滅	(外) 浅黄褐色 (7.5YR8/6) (内) にぶい 黄褐色 (10YR8/6)	
256	第 76 回	土師器	高杯	C2	褐色土		側径 (7.0)	現存部 完存	磨滅	(外) にぶい 黄褐色 (10YR8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR8/4)	

遺物番号	博団番号	写真図版	種別	器種	出土土地/遺墳	層位	口径 (cm)	その他 寸法 (cm)	残存率 %	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
257	第76回	図版 67	土師器	低脚杯	B1	褐色土	(1.8)	脚径5.2	50	摩滅	浅黄褐色 (7.5YR 6/2)	
258	第76回	図版 67	土師器	低脚杯	C9	褐色土	(14.5)	直径5.6 脚径(6.6)	20	摩滅	(外) 浅黄褐色 (10YR 8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR 8/1)	
259	第76回	図版 82	土師器	低脚杯	C2	褐色土			60		(外) 浅黄色 (2.5Y 7/3) (内) にふく・黄褐色 (10YR 8/3)	
260	第76回	図版 82	土師器	低脚杯	B1	褐色土		脚径5.4	50		(外) 白色 (2.5Y 1/1) (内) 灰白色 (10YR 8/2)	
261	第76回	図版 67	土師器	低脚杯?	C2	褐色土	(10.6)	器高6.6 脚径(3.6)	脚部充存		(外) 褐色 (7.5YR 6/1) (内) 褐色 (7.5YR 6/1)	
262	第77回	図版 82	弥生土器	壺	B9	褐色土	(13.8)		15	短頸、外來系?	相色 (3YR 6/1)	
263	第77回	図版 67	弥生土器	壺	C1	褐色土	(13.0)		20	摩滅、短頸、外來系	(外) 灰褐色 (10YR 8/2) (内) 灰白色 (10YR 8/1)	
264	第77回	図版 82	弥生土器	壺	C2	褐色土			20	摩滅、頭部に突起、頭部と脚部で強く屈曲、北部九州系	(外) 浅黄褐色 (10YR 8/3) (内) 浅黄色 (2.5Y 8/3)	
265	第77回	図版 67	弥生土器	壺	B2	褐色土			20	内側膨張、頭部に突起、頭部と脚部で強く屈曲、北部九州系	(外) 浅黄褐色 (10YR 8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR 8/4)	
266	第77回	図版 82	弥生土器	壺	C2	褐色土			10	摩滅、頭部に突起、北部九州系	(外) 浅黄褐色 (10YR 8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR 8/1)	
267	第77回	図版 83	弥生土器	壺	B1C1,C2	褐色土			15	摩滅、突堤の上に刻み目、北部九州系	(外) 明赤褐色 (2.5YR 5/8) (内) 褐色 (2.5YR 6/6)	
268	第77回	図版 83	弥生土器	壺	B1B2,C2	褐色土				内面摩滅、頭部に突起、突堤は造つ筋柱を使用、北部九州系	(宋銘記、浅黄褐色 (7.5YR 4/1) (内) 褐色 (2.5YR 6/6) ~にふく・白 色 (3YR 6/1)	
269	第77回	図版 82	弥生土器	高杯	B1	褐色土	(23.0)		10	摩滅、杯部に横筋、筋柱は土師器に近い	浅黄褐色 (10YR 6/4)	
270	第77回	図版 67	弥生土器	器台	B1,C1,C2	褐色土	(24.8)		45	摩滅、口縁部に4条の凹筋、文、列点文、円筒浮文、外來系	相色 (3YR 6/1)	
271	第77回	図版 82	土師器	壺	B1	褐色土	(16.0)		10	摩滅、「く」字口縁	(外) 褐色 (7.5YR 6/1) (内) にふく・褐色 (7.5YR 6/4)	
272	第77回	図版 82	土師器	壺	B1	褐色土	(15.4)		10	摩滅、「く」字口縁	(外) 浅黄褐色 (10YR 8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR 8/6)	
273	第77回	図版 82	土師器	小型器台	B1	褐色土	(9.0)		15	摩滅	(外) 褐色 (7.5YR 6/1) (内) 褐色 (5W 7/8)	
		織文土器	深鉢	B2	褐色土					内外ナデ	(外) 褐色 (5W 7/8) (内) 褐色 (5W 7/8)	
274	第78回	図版 84	織文土器	深鉢	B2	褐色土				内面と外側のナデは異なる	(外) 褐色 (5W 7/6) (内) にふく・褐色 (5W 7/4)	
		織文土器	深鉢	B2	褐色土					(外) にふく・褐色 (5W 7/4) (内) にふく・褐色 (5W 7/3)		
275	第78回	図版 84	土師器	壺	C2	褐色土	(16.2)		10	摩滅、軟質	(外) オリーブ灰色 (2.5G 16/1) (内) 褐色 (7.5YR 6/6)	
276	第78回	図版 84	土師器	高杯	B1	褐色土				杯基部 寄存	(外) 明褐色 (7.5YR 8/0) (内) 褐色 (7.5YR 6/6)	
277	第78回	図版 84	土師器	高杯	C2	褐色土			50	摩滅	相色 (3YR 7/0)	
278	第78回	図版 68	土師器	高杯	C2	褐色土		脚径(13.0)	75	摩滅	(外) 浅黄褐色 (10YR 8/4) (内) 浅黄褐色 (10YR 8/1)	
279	第78回	図版 68	土師器	高杯	B1	褐色土				脚柱部 80	(外) 褐色 (5W 6/8) (内) 褐色 (5W 7/8)	
280	第78回	図版 68	土師器	高杯	C2	褐色土				現存部 寄存	(外) 黄褐色 (7.5YR 8/0) (内) 褐色 (7.5YR 6/6)	
281	第78回	図版 84	土師器	高杯	C1	褐色土				摩滅	浅黄褐色 (10YR 8/3)	
282	第78回	図版 68	土師器	高杯	C2	褐色土				脚柱部 80	黄褐色 (7.5YR 6/6)	
283	第78回	図版 84	土師器	高杯	A1	褐色土				現存部 寄存	(外) にふく・褐色 (7.5YR 7/4) (内) 褐色 (7.5YR 6/6)	
284	第78回	図版 84	土師器	高杯	B9	褐色土	(6.0)		50	摩滅、杯部内面に穴	(外) にふく・褐色 (7.5YR 7/4) (内) 褐色 (7.5YR 6/6)	
285	第78回	図版 84	須恵器	壺	C2	褐色土	(14.0)		25		(外) 灰色 (7.5Y 6/1) (内) 灰色 (10YR 8/1)	
286	第78回	図版 84	土師器	壺	C2	褐色土	(20.0)		40		(外) 灰黄褐色 (10YR 6/2) (内) にふく・黄褐色 (10YR 7/3)	
287	第78回	図版 84	土師器	壺	C0	褐色土上位		底径(8.0)	25	摩滅、回転ナテ	(外) にふく・黄褐色 (10YR 7/3) (内) 明黄褐色 (10YR 6/3)	
288	第78回	図版 84	須恵器	壺	C2	褐色土				同一個体	灰皮 (N6/1)	
289	第78回	図版 84	須恵器	壺	C2	褐色土					灰皮 (N6/1)	
290	第78回	図版 84	土師器	壺	C2	褐色土				外顎タテハケ	(外) にふく・黄褐色 (10YR 6/4) (内) にふく・黄褐色 (10YR 6/3)	
291	第78回	図版 84	須恵器	壺	B8	褐色土					(外) 灰褐色 (10YR 6/1) (内) 褐色 (10YR 6/1)	
292	第78回	図版 84	須恵器	壺蓋	B8	褐色土				カキメ	(外) 灰褐色 (10YR 6/1) (内) 褐色 (10YR 6/1)	
293	第78回	図版 84	須恵器	壺	G8	褐色土				天井部回転ヘラグゼリ	(外) 灰色 (7.5Y 6/1) (内) 灰白色 (7.5Y 7/1)	
294	第78回	図版 84	磁器	碗	B0	褐色土				現存部 寄存	(外) 灰色 (7.5Y 6/1) (内) 灰白色 (7.5Y 7/2)	
295	第78回	図版 84	土製品?	不明	B1	褐色土				摩滅、高杯の杯部が剥離したものか?	(外) 灰褐色 (10YR 6/2) (内) にふく・黄褐色 (10YR 8/4)	
296	第78回	図版 84	土師器	壺	C2	褐色土				現存部 寄存	(外) 褐色 (5W 6/8) (内) 明褐色 (5W 5/8)	
297	第78回	図版 68	土師器	手捏ね土器	B9	褐色土	4.2	直径4.6 底径1.5	90		明褐褐色 (10YR 6/6)	
298	第78回	図版 68	土師器	手捏ね土器	C2	褐色土	4.5	直径2.6 底径1.0	90		(外) 褐色 (5W 7/8) (内) 褐色 (5W 6/8)	
299	第78回	図版 68	土師器	手捏ね土器	C2	褐色土	5.8	直径2.8			相色 (3YR 6/1)	
300	第79回	図版 68	陶器	碗	2区	灰褐色土					浅黄色 (2.5Y 9/3)	
301	第79回	図版 68	陶器	碗	2区	灰褐色土		底径5.0			(外) 灰白色 (2.5G 8/0) (内) 浅黄褐色 (10YR 6/1)	
302	第79回	図版 68	磁器	碗	2区	地山直上	(10.0)		40	肥前系、呉須で繪付、その後 に透明釉	灰白色 (2.5G 8/1)	

第9表 松林寺遺跡石器観察表

遺物番号/ 整理番号	検査番号	写真図版	種別	器種	出土地名 / 遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	形態の特徴
18	第59回	図版 69	石器	敲石	段状遺構 1	床面	14.7	9.6	8.0	1,400	
23	第60回	図版 69	石器	台石	段状遺構 2	床面	21.5	14.2	6.0	2,550	
62	第65回	図版 71	石器		被熱痕のある石	土壌面まり	9.1	8.1	7.7	800	
243	第75回	図版 83	石器	砥石	C2	褐色土	(23.1)	(7.5)	(3.7)	(950)	
Nb 1			石器	剣片	B0	褐色土	2.45	2.38	0.69	3.00	黒曜石
Nb 2			石器	剣片	C1	褐色土	3.53	1.73	0.65	2.73	黒曜石
Nb 3			石器	剣片	B0	褐色土	1.68	1.41	0.44	0.44	黒曜石

第10表 松林寺遺跡木製品観察表

遺物番号	検査番号	写真図版	種別	器種	出土地名 / 遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形態の特徴
98	第66回	図版 73	土木材	机	机	机 6	谷状地形	35.8	5.9	3.7 方形に加工、四方向から削る、側面は平坦に仕上げる
99	第66回	図版 73	施設用・器具材	机	机 7	机 7	谷状地形	22.3	2.8	2.5 五方向から削る、加工面は見えない

第11表 松林寺遺跡石造物観察表

遺物番号	検査番号	写真図版	種別	器種	出土地名 / 遺構	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)	形態の特徴
303	第79回	図版 85	石製品	宝室印傳 2 区	白色凝灰岩	25.0	24.7	19.0	11,500 箔		
304	第79回	図版 85	石製品	五輪塔 2 区表土	白色凝灰岩	28.5	28.2	14.8	12,400 火輪		
305	第79回	図版 85	石製品	灯籠 2 区	福光石	36.2	35.9	11.4	20,000		

第12表 松林寺遺跡遺構計測表

遺構名	遺構図	グリッド	前行き	梁行き	長軸 (m)	短軸 (m)
獨立柱建物	第41回	B1		2	1	2.2
	第42回	B1B2		1		3.8
遺構名	遺構図	グリッド	平面形	長さ (m)	幅 (m)	床面の 標高 (m)
段状遺構 1	第44回	C1	台形?	6.0	3.6	30.50
段状遺構 2	第45回	C1	台形?	6.0	3.0	31.73
段状遺構 3	第46回	B0,C0	台形?	5.6 以上	1.0 以上	33.80
土坑	第47回	B9	不整形	2.2	1.5	39.84
Pit2	第40回	B1	椭円形	0.3	0.2	30.51
Pit6	第40回	B1	椭円形	0.4	0.3	30.31
Pit10	第40回	B1	椭円形	0.3	0.2	30.15
Pit11	第40回	B1	椭円形	0.3	0.2	30.11
Pit12	第40回	B1	円形	0.2	0.2	30.20
Pit13	第40回	B1	椭円形	0.3	0.2	30.09
Pit14	第40回	B1	円形	0.2	0.2	30.18
Pit22	第39回	C9	椭円形	0.3	0.2	38.08
Pit23	第39回	C9	椭円形	0.8	0.7	40.06

規格	規格	前行き	2	梁行き	1
主軸		N53° W			
面積	Pit3	Pit4	Pit5	Pit7	Pit8
柱穴上部径 (m)	0.2 × 0.2	0.2 × 0.2	0.2 × 0.2	0.3 × 0.2	0.2 × 0.2
床面の標高 (m)	30.40	30.41	30.38	30.30	30.26
柱間距離 (m)	Pit3-Pit4	Pit4-Pit5	Pit5-Pit7	Pit7-Pit8	Pit8-Pit9
	1.08	1.16	1.48	1.16	1.18
					1.48

規格	規格		
主軸			
面積	Pit1	Pit15	Pit16
柱穴上部径 (m)	0.3 × 0.2	0.3 × 0.2	0.2 × 0.2
床面の標高 (m)	30.30	30.36	30.10
柱間距離 (m)	Pit1-Pit15	Pit15-Pit16	
	1.76	2.08	

第13表 松林寺遺跡土器数量表

種別	器種・特徴	C8		B8		C9		B9		土坑南辺		土坑	
		重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数
	豆			46.45	1	244.47	1	315.08	4				
	酉：中期												
	吉：外來系							70.08	2				
	台付装飾器					59.68	1.5						
	錫	56.27	7	243.02	15	2504.08	143.5	324.67	23	91.40	7	456.15	15
	鼓形器台					46.48	2	54.46	1			23.12	2
弥生土器	高环					5.61	1						
	高环：中期												
	高环：外來系												
	注口土器							16.43	1				
	釜												
	鉢												
	不明												
	合計	56.27	7	289.47	16	2860.32	149.0	780.72	31	91.40	7	479.27	17
	酉			63.15	2					249.38	1		
	吉	266.93	34	946.17	97	594.23	49.5	1048.25	134	190.64	8	126.81	17
	吉：く字口縁												
	鼓形器台			15.17	1			30.35	1	52.76	1		
	器台												
古墳前期の土器	小型器台												
	高环					20.66	1	70.13	2				
	注口土器												
	低脚环					121.16	2						
	鉢	37.70	1										
	不明												
	合計	304.63	35	1024.49	100	736.05	52.5	1148.73	137	492.78	10	126.81	17
縄文土器													
	豆												
	甕												
古墳中期以後の土器	高环							58.15	1				
	鉢												
	手捏ね							40.57	1				
	須恵器	81.31	2	115.61	2	7.30	1	83.15	4				
	古代の土器			87.74	3			25.35	2				
	土製品												
	中世土師器							14.86	1				
	中世土器												
	青磁												
	白磁												
	青花												
	備前焼												
	中世陶器												
	合計	81.31	2	203.35	5	7.30	1	222.08	9				
	総計	442.21	44	1517.31	121	3603.67	203	2151.53	177	584.18	17	606.08	34

種別	器種・特徴	C0		段状遺構3付近		BD-C0		B0		A0		D1	
		重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数
弥生土器	壺	46.37	1					673.78	12				
	壺：中期												
	壺：外來系												
	台付装飾壺	280.06	1										
	壺	3737.22	185.5	764.93	15	143.34	14	9261.49	380	86.79	9	129.06	1
	鼓形器台	26.43	1					1266.48	12				
	高环							83.81	1				
	高环：中期												
	高环：外來系												
	注口土器												
	轍							58.53	1				
	鉢												
	不明												
合計		4090.10	188.5	764.93	15	143.34	14	11344.09	406	86.79	9	129.06	1
古墳前期の土器	壺	57.85	2	77.45	1			36.90	1				
	壺	934.41	72.5	452.46	7			853.77	67	496.86	35		
	壺：く字口縁												
	鼓形器台	32.16	1					70.69	6				
	器台												
	小型器台												
	高环	53.22	1					127.15	4	122.24	1		
	注口土器												
	低脚环												
	鉢												
	不明												
	合計	1077.64	76.5	529.91	8			1088.51	78	511.10	36		
縄文土器													
古墳中期以前の土器	壺												
	壺			144.55	2			580.74	1				
	高环							30.99	4				
	鉢												
	手捏ね												
	須恵器	31.71	2					59.82	3	54.97	1		
	古代の土器	16.65	1										
	土製品												
	中世土器	35.25	2										
	中世土器							20.90	1				
	青磁	11.83	1					38.76	1				
	白磁												
	青花	6.60	1							9.60	1		
	備前焼												
	中世陶器							16.70	1				
合計		102.04	7	144.55	2			747.91	31	64.57	2		
総計		5269.78	272	1439.39	25	143.34	14	13180.51	495	662.46	47	129.06	1

種別	器種・特徴	C1		段状遺構 2 理土		段状遺構 2 床		段状遺構 1 理土		段状遺構 1 床		B1	
		重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数
弥生土器	壺			43.60	1	9.95	1	297.14	4			2549.27	51
	壺：中期												
	壺：外來系	2184.40	34.66									1141.46	9.66
	台付装飾壺	311.13	1									954.57	1.5
	甌	1826.39	78	304.50	19	7.85	1	2300.93	86	656.65	11	24164.81	835
	鼓形器台	252.08	6					18.48	1			1809.45	15
	高环							142.34	1				
	高环：中期												
	高环：外來系											81.28	1
	注口土器												
古墳前期の土師器	甌											64.03	1
	鉢							461.87	3			85.97	6
	不明												
	合計	4574.00	119.66	348.10	20	17.80	2	3220.76	95	656.65	11	30850.84	920.16
	壺	510.77	15	211.14	5			516.57	1			1430.20	32
	甌	2858.72	113	585.04	49	15.16	1	1702.89	112	281.07	9	21788.02	888
	甌：＜字口縁											152.70	10
	鼓形器台	154.98	5	10.26	1			157.78	4			1702.97	53.5
	器台	297.26	0.33									297.26	0.33
	小型器台											11.15	1
古墳中期以降の土師器	高环	180.58	8	70.54	5			60.72	1			1172.17	47
	注口土器											59.84	1
	低脚环											484.82	9
	鉢	67.98	7	31.92	1							215.44	17
	不明							176.68	8			156.70	1
	合計	4070.29	148.33	908.90	61	15.16	1	2614.64	126	281.07	9	27471.27	1059.83
	縄文土器												
	壺											599.53	32
	甌												
	古墳中期以降の土師器	高环	49.55	1								171.61	2
中世土師器	鉢												
	手捏ね												
	須恵器	581.06	22									91.37	2
	古代の土師器	117.46	6									169.20	10
	土製品												
	中世土師器												
	中世土器												
	青磁	2.63	1										
	白磁												
	青花												
備前焼	備前焼												
	中世陶器												
	合計	750.70	30									1031.71	46
	総計	9394.99	298	1257.00	81	32.96	3	5835.40	221	937.72	20	59353.82	2026

種別	器種・特徴	A1		D2		C2		土器混まり		B2		A2	
		重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数
弥生土器	壺					172.44	3	782.90	3	1011.31	10		
	壺：中期												
	壺：外来系			4320.3	1883.20	39.33	841.20	1	488.18	3.33			
	台付装飾壺												
	甕					7604.14	249	3661.03	57	4106.16	171	188.44	10
	鼓形器台					1710.62	17	809.39	2	396.10	6		
	高环									15.62	1		
	高环：中期												
	高环：外来系												
	注口土器												
	鉢					250.30	1	185.89	2				
	不明					70.40	4						
合計				11691.10	313.33	6280.41	65	6017.37	191.33	188.44	10		
古墳前期の土器	壺					2016.30	34.5			824.94	10.5		
	甕					8662.80	515	5071.26	107	4709.80	223	663.76	20
	壺：く字口縁					26.31	1	961.86	1	75.22	6		
	鼓形器台			78.38	1	2164.05	82	743.89	9	1448.15	31	196.92	4.5
	器台					297.26	0.33						
	小型器台												
	高环					865.92	17			702.03	8	18.49	2
	注口土器									67.65	1		
	低脚环					441.35	9			19.47	2		
	鉢												
	不明												
合計				78.38	1	14473.99	658.83	6777.01	117	7847.26	281.5	879.17	26.5
縄文土器										182.32	1		
古墳中期以降の土器	壺												
	甕					34.61	1						
	高环	88.06	1			951.29	25						
	鉢					160.52	10						
	手捏ね					74.72	2						
	須恵器					1215.90	25						
	古代の土葬器					1511.15	45			554.13	27		
	土製品					105.04	2						
	中世土葬器					14.22	2			7.51	1		
	中世土器												
	青磁									4.22	1		
	白磁									32.9	1		
	青花												
	備前焼									41.30	1		
	中世陶器												
合計		88.06	1			4067.45	112			792.77	32		
総計		88.06	1	78.38	1	30232.54	1084	13057.42	182	14657.40	505	1067.61	37

種別	器種・特徴	C3		AO/谷状地形		BO/谷状地形		BI/谷状地形		耕土・地点不明		重量 (g)	点数
		重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数		
弥生土器	壺					46.75	6	241.89	7			6,481.40	105
	壺：中期					1356.01	0.5	1440.95	1.5			2,796.96	2
	壺：外来系							256.92	1			6,865.44	91
	台付装飾壺											1,605.46	5
	壺	86.52	5	19.67	2	3190.63	152.5	10897.26	223.5	142.22	5	76,826.56	2,719
	鼓形器台					95.80	3	1378.97	8			7,887.86	76
	高环											247.38	4
	高环：中期					7.38	1					7.38	1
	高环：外来系											81.28	1
	注口土器											16.43	1
古墳前期の土師器	壺											64.03	1
	鉢					190.33	1					1,232.89	14
	不明							34.68	1	105.08		5	
	合計	86.52	5	19.67	2	4696.57	163	14406.32	242	176.90	6	104,218.15	3,025
	壺	46.69	1			35.93	2	49.12	1			6,126.39	109
	壺	117.21	11	33.07	5	578.83	45	886.13	111	65.06	11	53,931.35	2,741
	壺：＜字跡		23.03		2	25.18	2					1,264.30	22
	鼓形器台							167.98	6			6,948.11	206
	器台					8.82	1	97.30	3			997.90	5
	小型器台											11.15	1
古墳中期以降の土師器	高环					27.21	2	5.83	1			3,386.89	100
	注口土器											127.49	2
	低脚环					95.69	1	20.83	1			1,183.32	24
	鉢											353.04	26
	不明							7.61	1	340.99		10	
	合計	163.90	12	56.10	7	771.66	53	1227.19	123	72.67	12	74,670.93	3,246
	縄文土器											182.32	1
	壺											599.53	32
	壺											759.90	4
	高环											1,261.59	33
古代の土師器	鉢											160.52	10
	手挽ね											115.29	3
	須恵器					11.30	1			171.06	5	2,504.56	70
	古代の土師器											2,481.68	94
	土製品											105.04	2
	中世土師器											71.84	6
	中世土器											20.90	1
	青磁											57.44	4
	白磁											3.29	1
	青花									29.48	1	45.68	3
備前焼												41.30	1
中世陶器	合計					11.30	1			200.54	6	8,427.58	266
	総計	250.42	17	442.21	44	5468.23	216	15633.51	365	450.11	24	187,316.66	6,537